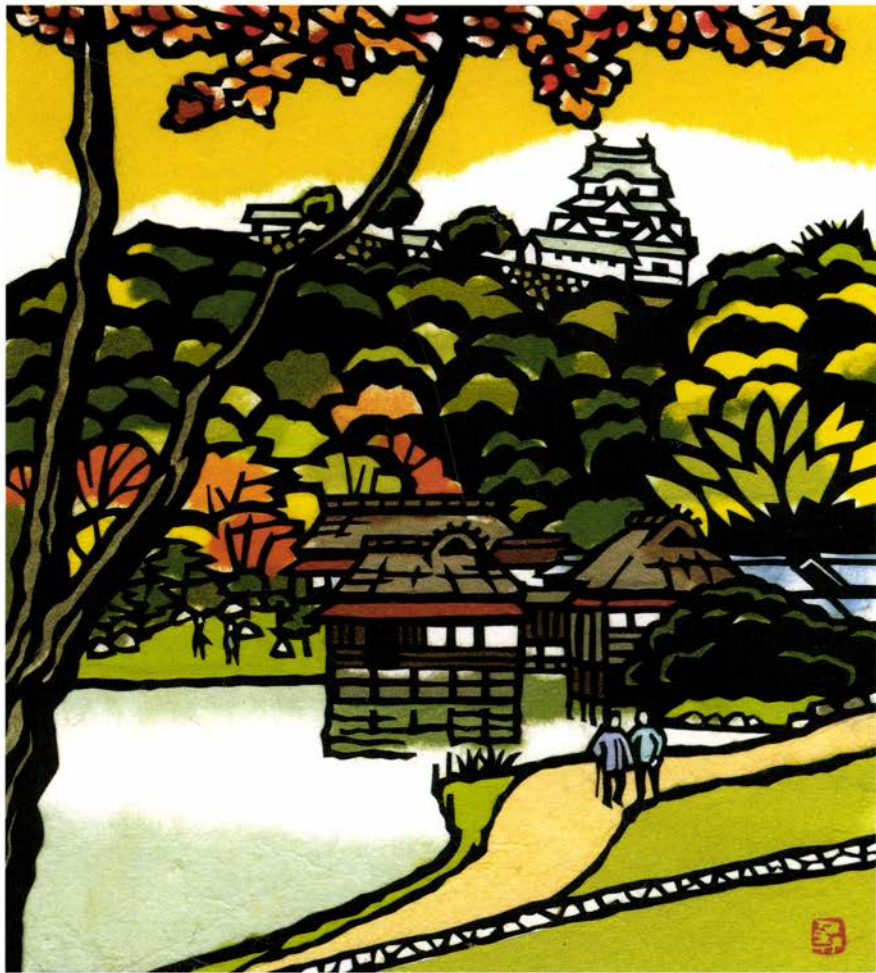


川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成二十四年十一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷一〇二六号



日川協加盟

No. 1026

第18回 川柳塔まつり特集

十一月号

年賀広告募集

本誌一月号に掲載する年賀広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各句会（川柳会）のアピール及び誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願いする次第です。広告のスペースと掲載料は、左記のとおりですので、お申込みのほど、よろしくお願い申し上げます。

★個人 一口 $\frac{1}{6}$ 頁 二、〇〇〇円

$\frac{1}{6}$ 頁 三、〇〇〇円

（氏名・住所・電話番号など掲載）

★団体 次の四種といたします。

① $\frac{1}{3}$ 頁 六、〇〇〇円 ③ $\frac{2}{3}$ 頁 一二、〇〇〇円

②半頁 九、〇〇〇円 ④一頁 一八、〇〇〇円

▼原稿締切 11月23日

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一―一四―一七

花野ビル 201号室

TEL 06-6779-3490

川柳塔社

第二回 春の川柳塔まつり誌上大会募集

このたび川柳塔社では、日頃句会などにお出掛けになれない方々を含め、結社を越えて広く川柳をお楽しみいただく機会として誌上大会を企画いたしました。是非皆様のご参加をお待ち申し上げます。

（二二九頁参照）

川柳塔社

★新年号特集★

川柳塔社同人参加（一人一句）

「私の一句」

■今年中に発表された句に限りです。
■締切 11月23日（本社事務所宛）

川柳カード・創刊記念大会

小島 蘭 幸

川柳カード創刊準備号が届いたのは、7月の暑い日でした。代表者の樋口由紀子氏、編集人の小池正博氏と共に10名の方がタイトルをつけて、それぞれ10句ずつ作品を発表していました。

私は9月に開催される創刊記念大会の選者に指名されていることもあって、10人の作品を繰り返し読む事にしました。繰り返し読む事によって川柳カードの方向性、目指すものが少しは見えてくるのではないかと思つたからです。

：誌名は「川柳カード」とした。これからの川柳シンを少しでも切り開いてゆく場になればいいなと思つている。別にひとつの方向性を目ざすものではなくて、川柳の表現領域を広げてゆく試みならば何でも歓迎である。冒険しようではないか……

これは編集後記の一節です。川柳カード創刊への並々ならぬ思いが伝わってくるではありませんか。

平成24年9月15日、大阪のたかつガーデンで川柳カード創刊記念大会は開催されました。出席者109

名、満員の盛況でした。

さて私は、課題「品」の選をしたのですが「しな」「ひん」共に佳句が多く、決められた入選句数にするのが大変でした。最後は技巧よりも新鮮味をいただきました。

鈴虫を聞く阿弥陀仏程上品に

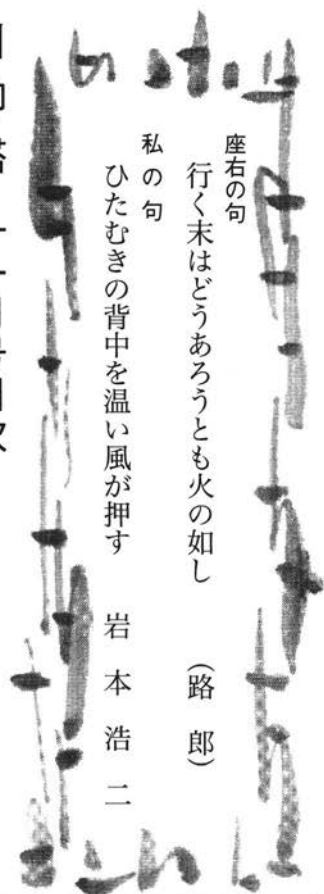
作二郎

お品書きにくも・そら・ひかり・水の音 小奈生
若き日の母に粗品をさしあげる 正博

披講のトップバッターは若い榊陽子さんです。初々しさがとても光つていて、凄く好感がもてました。他の選者も堂々と淡々と披講されていて耳にとっても心地良かったです。

そして何よりも良かったのは呼名です。「たいいはつ」「くんじろう」「むさし」の皆さんに代表されるように、披講と呼名が巧く響き合っていました。懇親会の席で、私の選句、披講に対して声をかけて下さる方がおられました。一生懸命に披講を聞く姿は本当に美しかったです。懐かしい人、新しい人、そして何よりも佳句に出合える川柳大会が私は大好きです。

川柳界に新風を!! 11月下旬に発行される川柳カード創刊号を、私はドキドキしながら待っています。



座右の句

行く末はどうあらうとも火の如し

(路郎)

私の句

ひたむぎの背中を温い風が押す

岩本浩二

川柳塔 十一月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「彦根城」

■巻頭言 川柳カード・創刊記念大会

出前する川柳試食会

小島 蘭 幸 … (1)

川柳塔(同人吟)

北野 哲 男 … (2)

川柳塔の川柳讃歌 ⑨

小島 蘭 幸 選 … (4)

自選集

木津 川 計 … (47)

温故知新

西出 楓 楽 選 … (51)

水煙抄

西出 楓 楽 選 … (52)

中島生々庵句抄

西出 楓 楽 選 … (52)

新川柳鑑賞 ⑨

麻 生 路 郎 … (75)

第18回 川柳塔まつり

麻 生 路 郎 … (76)

同人総会・おはなし・各賞発表・記念句会・懇親宴

英語 de Senryu ⑪

吉村 侑 久 代 … (91)

俳風柳多留 一 一篇研究 87

吉村 侑 久 代 … (92)

出前する川柳試食会

北野 哲 男

ボランティアとして四、五年前から福祉団体、老人会、地域団体、公民館活動、子供会などで「出前する川柳試食会」をしています。

出前とは注文があれば出かけると言う訳でこちらから仕掛けることはありませんが、それでもどこから伝わるのか(近隣の市町を含め)毎年四・五回以上は声がかかります。

試食会ですから、川柳に全く関わりのない人たちがほとんどと言う前提で約一時間から二時間三十分位話をします。人数は十名から二百五十名ほどでまちまちですが、古川柳、名句、時事句、私たちの句、サラ川、などを紹介し川柳の楽しさ、奥深さをレジュメからときどき脱線させながら笑わせます。

例えば路郎師の「俺に似よ・・・」を紹介し父親の子供に対する思いや期待、当時の世相などを話しながら最近のお母さんが子供に「もつとしつかり勉強せんと

愛染帖

檸檬抄「組む」

奥田みつ子

新家完司選 (94)

本所深川を歩く (十)

森山盛核共選 (98)

一路集「週末」

松永浩一 (101)

「きびきび」

村上直樹選 (102)

せんりゅう飛行船 (23)

山田葉子選 (103)

初歩教室「コーヒー」

森松まつお選 (104)

川柳塔鑑賞

新家完司 (105)

水煙抄鑑賞

鈴木公弘 (106)

民族の詩歌 (6)

川端一步 (108)

津軽発おもしろ景色 (12)

久保田千代 (110)

各地柳壇(佳句地十選／榊原道夫・山本希久子)

三好專平 (111)

十一月各地句会案内

高瀬霜石 (112)

柳界展望

朱夏・能子 (114)

■編集後記(ひとこと／真島久美子)

朱夏・能子 (134)

座右の句

星になる言葉を溜めている詩人

(楓 楽)

私の句

サービスデーメロスの様に走る妻 寺井弘子

お父さんみたいになるで」と叱る話や、古川柳の「孝行のしたい時分に親はなし」から「孝行をしたくないのに親がいる」などを混じえたりしながら穴埋め川柳も含め三・四十句位を聞いてもらいます。が、大笑いさせると眠くならない雰囲気になって私も元気を貰います。

しかし私が一番大切に行っていることは、あくまで川柳の押し売りをしないことです。漫談のような話から本当の川柳を少しでも理解し関心を持って欲しいと願っているからです。

終ってから少し川柳に関心が出来た人や、自分も作ってみようかなと思われた方には「川柳しませんか」を買ってもらいます。この試食会を通じて川柳の好きな人、つくりたい人が大勢いることに気付かされます。この中からも私たちの句会に顔を出される方が増えると句会はずます元気になります。

平成十二年六人で立ち上げた「川柳さんだ」は今年六つの会で三田市川柳協会を発足させることが出来ました。

奥行きのある一読明快、明るい句を持つて町に出ましょう。



小島蘭幸選

西宮市 吉井 菜々子

クリムトへしつくり調和する西日

虫の声とどくわたしの窓辺にも

くどいですが柿の葉寿司をお土産に

大人しくしてると邪念とんでくる

天井の灯りを消すと稲光り

枕よりちいさな夢を抱いて寝る

泉佐野市 山本 蛙城

枯尾花にも孤独死を見る月夜

夜濯ぎへ介護代れと啼くちちろ

蟬の死の天空仰ぐ大志かな

もし津波来たらどう出る地下迷路

柳俳は一如反論あらば出よ

父の日に身長縮んだねと言われ

紀の川市 宇野 幹子

草ぼうぼう墓地も生家も夢の中

母恋し三面鏡をあけてみる

ブルーメラン程よい距離でまいもどる

自画像のシミ晒してもさらしても
後期高齢自動トビラがすつとあく
無機質な少年の目に闇がある

和歌山市 牛尾 緑良

虚も実も昨日の本当の私

クーラーを効かせて政治論じるか

喜怒哀楽愛はみんなとお知り合い

鍵穴に秘めた噂がまた増える

国境はトンネルだけでない世界

分裂と合同がある我が家でも

堺市 桑原 道夫

うつくしい光の国のかたつむり

胸キュンとなるまで花火見ています

体育館裏でエキサイティングな話

こつそりと陰干しにする影法師

スイッチをパチンと鳴らしさあ寝よう

百年も経てば山河も眠くなる

病院の待合室の厚い雲

倉吉市 牧野芳光

墓を荒らして東京は楽しいか

逆転のチャンス死ぬまで追っている

美しい川だ寄せつけない川だ

恐妻に追われ山男になった

人間の嘘を逃れて犬を飼う

鳥取市 倉益一瑤

アハオホホウフフ心のエステする

泣き真似が上手に出来た寒い日よ

薬草を煎じて雨の日が続く

六法を枕に昼寝でもしよう

すつきりとするには少し言い足りぬ

戒名がついてドラマは幕になり

弘前市 高瀬霜石

躓いた石であふれるぼくの蔵

病院へ通えば我慢強くなる

吊り革に揺れてたころの髪の間

タラレバの話チンタラタラ続く

完璧な妻は疲れるものらしい

手相見も読めぬ人生空模様

岸和田市 岩佐ダン吉

獄死した彬の罪はなんだろう

結果論君はでつかい声で言う

いつだって本気私は肩が凝る

ちつぽけな光でもよし抱いている

連敗も僕は俯きなどしない

弁解はしない私は空仰ぐ

松江市 石橋芳山

目をつむる一瞬ふわり浮いている

水槽を出る気はないか金魚たち

鯛とて群青を飛ぶ夢がある

洋上を跨げば叩き落したる

清濁を飲み干し大人へとかわる

原発に鈴を付けねばなりません

松山市 古手川 光

原発が握る日本の首根つ子

そんなに安全だったら都心飛べばいい

世渡りが上手甘えるのが上手

夜が明けた目が覚めた生きていたんだ

怒らなくなった 元氣もなくなった

平和とはつくづく古城見て思う

神戸市 山口光久

沢庵をバリバリ母の気を食べる

泥濘を歩く適切な気配り

難解な古典はマンガから学ぶ

どうしても真似はできない山頭火

ライバルの腹は読めたが策がない

常識の殻を破った好奇心

変装より素っぱん誰も気付かない
ポツクリ寺延命寺と欲尽きぬ
大阪市 大川 桃花

車よりラクダに頼る産油国

三歳児もう骨のある事も言う

冷戦の夫婦ゴキブリ出て戻る

おばちゃんが三人怖いものがない

河内長野市 山岡 富美子

無理をいうスマートホンもパソコンも

美しい草書にルビをふっている

豆ご飯ちよつと息抜きしたくなる

下駄箱で懺悔している赤い靴

赤トンボ群れて駅までついてくる

お土産の栗プラハの印がある

八尾市 高杉 千歩

政治屋が溢れ洋上波高し

コンビニは母さんの味忘れさせ

生きること死ぬこと有難う忘れずに

無縁社会財布は重い方がいい

余命表猛暑を耐えた祭り笛

昔話になって無口が喋り出す

尼崎市 春城 年代

風の道さがし猛暑を逃げ惑う

五丁目辺り中途半端な風が吹く

人混みのなかの孤独に会いにゆく

おもいでだけで充ち足りている九十歳
大正昭和平成全部歩いた足軋む

真夜中に蟬が鳴いたら怖かろう

堺市 志田 千代

いい時もあつたとお茶を飲みながら

痛み止め効いてる時がわたしです

吹きだまりの中からたまに吠えてみる

時間かけ主菜にならぬ豆を煮る

吟醸酒ならばと妻もご相伴

賑やかににぎやかにする仏花

富田林市 片岡 智恵子

点滴にすぎるしかない白い壁

主のない机一輪白い菊

喪の底へ情無用の税が来る

頑張り過ぎぬ事が私に合っている

東電系の株と知らずに抱く不覚

黄金穂波こころの景色ゆたかなり

寝屋川市 森田 麗

集中豪雨我が家の座敷居座った

涙など出ぬ水害の恐ろしさ

これしきと津波の惨事思い出す

柳友の笑いに替える声届く

青畳入りチョットの間のリッチ

この日から雨音怖くトラウマに

札幌市 小沢 淳

一言が多い足りぬの我が愚直
川瀬の帽子を僕は持つている
核家族故郷に残る墓一基

どの傷も僕の肥やしになつて
近いうちこんな言葉の軽いこと
インク薄めて麻生路郎の爪の火よ

羽曳野市 宇都宮 ちづる

とんぼ来て虫の音聴いてまだ夏日
夏バテ解消に女子会を開く
サブリでは効かぬと医者が言う加齢

百均は何か得した気分する
十年目新車にするか迷う古希
林檎ほどのメロンがひとつ庭になる

鳥取市 森山 盛桜

足枷のように絡まる朝の靴
じつくりと見れば藁にも芯がある
御三家が遠い話になつて来た

笑つてはみるがだあれも寄つて来ぬ
その時の他爪切りは騒がない
今の世は公序良俗とは言わぬ

青森県 松山 芳生

二日酔い慰めなのか水うまい
なんとなく曲がつた線がいらしい
ペガサスのまわりはみんな外野席

特注の靴のいのちと響き合う
花屋さんで男が揺れたバラの数
一日を終える男の割烹着

堺市 山本 半銭

手摺頼り拝殿までの長い道
向き合つた月日がやつと掴むもの

夜更かしの御褒美だろう月冴える
やつとのこと開けた運だ放すまい

大き月に一言孫の絵手紙だ
ゆるゆると日の出わたしの句を染める

大阪市 古今堂 蕉子

介護認定今日は呆けていると言う
ヒマワリからそつと桔梗に変身中

虫の声がする私の耳も秋
夏の恋掬つた手から落ちて秋

仏間も秋ピタリと扉閉められて
助手席とナビが交互にしゃべる秋

紀の川市 辻内 次根

晩年は次の信号待つ余裕
家ダニへ報復枕日に当てる

模様替え風の動線考える
期限切れ後は鼻でという勝負

チューハイもうまい発泡酒もうまい
ビールでも酒でもご飯掻き込める

芦屋市 黒田能子

踏み出せば後はなんとかなつてくる
町工場小さなネジで生きている
ぼろつとこぼす娘の愚痴を聞いている
どっちにもつかず波風立たぬよう
第六感今来た道を引き返す
お元氣ですかお久し振りの垣根越し

奈良市 大久保眞澄

カレー鍋置いて二泊のブチ家出
書道展こぼれた墨を見るような
とりあえずを家中に積む整理下手
長電話横から椅子とお茶が出る
暑いアツイかなで書いてもまだあつい
禁煙三日捨てた灰皿また拾う

八尾市 寺川はじむ

乙女から女に変える紅の色
原発を生んで止めよというヒト科
貧困に耐えて芽を吹く偉人伝
金は出ぬ自力で取れという維新
偉そうに言うて己は手を出さぬ
危篤から還った口がよう回る

大阪市 川端一歩

千年杉自慢をしない顔が好き
正論を吐いて妥協もする勇氣
喜寿なんて宇宙のいのち比べたら

おい案山子キミもリストラされたのか
シナリオのない一日で万歩計
秋夜長夜学勧めた友のこと

松山市 高橋宏臣

生きているリズムペダル踏み続け
日常に風を入れてる途中下車
春は霞夢の尻尾を肥らせる
黙秘権画鋐の穴は動かない
雨の日は雨の匂いのする花野
「紅灯の巷」と書いて安らぎぬ

西宮市 西口いわるゑ

人間をこぼれぬように本を読む
賑やかな宴のあとの皿小鉢
民意など問う術もなし内輪もめ
笑顔なら言葉を越えて響き合う
癒されてそして疲れる長電話
長生きの秘訣忘れることだろう

堺市 源田八千代

はやばやと後期高齢保険証
いそいそとデイサービスへお洒落する
スケジュールが介護で埋まるカレンダー
タイミング良く水回りのリフォーム
芋茄子オクラ野菜の花は可憐なり
日本の元氣な時に何してた

尼崎市 長 浜 美 籠

福耳が旬の話題を提げて来る
言訳を正当化する横座り

母がいた頃は良かった秋なすび
耐えたとは決して言わぬ母である
門扉からスリ小さな秋が来る
懸命に生きる綴帳おりるまで

三田市 久保田 千 代

常識の違う人とはつき合わぬ
歌うたう私が私である瞬間
爪を切る狭間見つけた探し物
中流の意識気楽な趣味に生き
太陽の下できれいな汗をかき
平静をよそおい検診結果待つ

榎原市 安 土 理 恵

引いても引いても思い出はゼロにならない
はぐれ蛍そちの水も苦かろう
独りがいいと母には母のおもうこと
折れた支柱あさがおはまだしがみつく
月も星も無いせいでしよう淋しさは
殺し文句耳のそばから離れない

海南市 小 谷 小 雪

半歩出す満身創痍だとしても
保護色のルールが緩くなっている
遅れても良いお返事は許される

ブランコの途中から宇宙遊泳
初彼岸母の遺影がまた笑う
無花果と去年の秋をなつかしむ

奈良県 渡 辺 富 子

鎮魂の流木海を越えて着く
光彩の彼方へすうつと兄は消え
カランコロン昭和の音が遠ざかる
妻だけのエールを受けて奮い立つ
笑い声する方からやってくるチャンス
闇の中でいじめの連鎖まだ続く

藤井寺市 高 田 美代子

人間を演じて心痩せてくる
ちよい悪がひとり混っている活気
狒犬もたまには吠えてみたかろう
少し遠出リユックと杖が相伴する
秋を詠む芒一本あればよい
パスポートが切れて空港遠くなり

大阪市 榎 本 日 出

老いのグチャやがては同じ道たどり
ここだけの話に蓋をしたつもり
指切りをしたので多分大丈夫
ウォーキング頑張った分よく食べる
何の鍵解らないのに捨てられず
約束は友達づくり愛づくり

池田市 栗田久子

猛暑から解き放たれた今朝の風

満月にそつとわたしを映せたら

食欲のままの暮らしをいましめる

新米は銀飯にして塩むすび

こだわりは捨てよう友でいたいから

今年またあの畦道の彼岸花

米子市 吉田陽子

観察日記始まるたつた今発芽

縦の木が枯れた実家が気にかかる

二年間無料の先を聞いてなし

菊柄のカップに秋を誘い込む

時間厳守好きなわたしの腕時計

銀杏を拾ってからの大仕事

富山市 島ひかる

大観望表紙きり絵になる至福

三代代おんな詣でる峯本社

赤ちゃんのご機嫌な声峯本社

入山の女人禁制むかし事

感声の中登頂の十二歳

今はもう白銀の中峯本社

和歌山市 上田紀子

釣りあげた魚が妙にしおらしい

威厳ある一言深い人間味

生き様を変えてみたくて宙返り

頑張ろう一杯褒めてあげるから

沈黙が続きひたすら待つ奇跡

平凡な食卓満たす鯖秋刀魚

鳥取市 奥谷彩子

此岸に未練あるので少し徳をつむ

実年齢二割引きして紅を佩く

我が一代記馬の脚にも陽をあてる

四面楚歌する藁しべ見つからぬ

私も終焉ふる里の柿熟れたまま

莢を出て着地きまらぬ不況風

東大阪市 佐々木満作

人生を浪費して来た悔いがある

他所事と思えぬ災害の備え

ご近所の寄合仕切る人がいる

フルムーン妻はルンルン歩が弾む

古賀メロディ弦の調べに酔う月夜

蚊帳の中母の十八番は里の秋

鳥取市 岸本孝子

医者と店あれば田舎も暮らしよい

年金の有り難さ知るめし茶碗

葬儀屋のチラシだんだんなじみだす

生き方を学ぶ句集を積んでいる

ない方がいい原発のおかげ受け

若者に職がないとは世も末だ

札幌市 三浦強一

悪癖はDNAの所為にする

カンニングペーパーを手にご挨拶

思い遣る嘘は黙って聞いてやる

口喧嘩夫婦の脳の活性化

お喋りで女心の錯落す

砂川市 大橋政良

人間の匂いが好きなイルカ達

木魚ボコボコ背すじが寒い秋彼岸

四捨五入ボツンと取残されている

見たような手配ボスター屋の月

道を聞く少し訛が出てしまう

黒石市 佐藤古拙

虫が鳴く詩人になれと虫がなく

少子化はむら雀にも案山子談

車庫入りが一度でできずふける秋

虹がたつ浮世のちりを払うよに

七草が限界村で咲きこぼる

黒石市 相馬一花

葉指娘の未来心配す

みょうが食べこの世の憂さを忘れたい

百花繚乱女性はいつか開花する

絶対に自殺はしない女好き

緊張も興奮もせぬ妻になり

平川市 小寺花峯

森になるまで一本の樹を植える

いいことの囁き耳が燃えるほど

カラオケは騒音ですか酒を注ぐ

夕暮れのブランコ明日を期待する

友が来て休肝日なら破られる

弘前市 福士慕情

秋風が沁みる古傷抱いている

耐えにたえ診察までの硬い椅子

錆ついてもう戻らなくなった螺子

青いまま落ちるりんごもあるのです

夕焼けが明日のいのち保証する

弘前市 今愁女

温暖化北極熊も可哀相

残暑厳し水浴したい犬の舌

子どもの方がテレビ以外を消し歩く

台風の日に一喜一憂する農家

育てきた林檎いとしや防風網

弘前市 須郷井蛙

財源がないのに新党騒ぐだけ

雑草が嘲っていますスケジュール

冷蔵庫締める時間の速さ知る

一泊の研修楽しい宴が待つ

尖閣の山羊が国籍待っている

弘前市 稲見則彦

東京都 岸野あやめ

夏が去るわだかまりまだ溶けぬうち
鯛雲大漁旗を置いていき

夏雲がははの笑顔になつていく

癖じやなく個性と言つて欲しいもの
どの癖もわたしにすれば宝物

弘前市 岡本花匠

雑魚なりに生きた至福の道歩み

欲望の上塗りでした写経墨

残り火を静かに休め明日の種

愛燦燦孫抱き笑顔至福貌

紅葉風こころ急かせたぶらり旅

弘前市 高橋洋子

血のめぐり良い人だろう よく笑う

虫の良い夢ばかり見た二十代

形状記憶背なの丸さは親ゆずり

情報の海で目移りばかりする

北の海から秋刀魚が届くこの至福

さいたま市 星野育子

リセットされて新しい朝がきた

気軽でない責任あるボランテニア

気迫に満ちた若い友が目映い

ロマンも悲哀もある滝の伝説

仕事結婚出産そして介護

ドクターの勉強アメリカだそうな

マンションの犬は小さくてもおとな

お早うと言えばサラダとハムエッグ

サラダ菜に追つ払われたおみおつけ

民謡を身につまされて聞いて秋

横浜市 菊地政勝

定年を前に解雇と言う仕打ち

サーブ権握った妻に追いてゆく

お百度を踏んで結果を待つばかり

子の未来修正液が不足する

七難を隠すえくぼに気を許し

横浜市 小野句多留

身の上の歴史を刻むお立ち台 (ベラリン初メダル)

ガイド後の散策まずはカキ氷

炎天下すぐバスに乗る癖をつけ

自民党ネジレの悪夢また過ぎる

ほろ酔いに過去甦るネオン街

川崎市 三浦きぬ

日永一日網戸に止まる虫哀れ

今にして亡父の理解深さ知る

あの世への片道切符売場何処

春雨じゃ濡れて行こうは危険な世

あの世にも川柳塔の支部が欲し

静岡県 蘭田 獏 杏

人生に日傘雨傘使い分け

地に落ちて尺取のまだ余力あり

夏蝶の迷い込んでるローカル線

今日だけはいじめは見えぬ参観日

ぎしと鳴る籐椅子母のくぼみかな

大山市 吉田 幸子

ブルーベリーの豊作蜂と乾杯だ

涼風が癒やす血圧上げた夜

一瞬の闇は指令が行き届き

炎天下完全武装農作業

まだ怒り冷めぬ怖くて逢えません

大山市 関本 かつ子

汗拭いてあと二千歩へ遠回り

ピーポーがどこを曲るか身構える

節電を産後のように忘れてる

足腰の話が増えた立ち話

食卓のビールにはない飲み残し

大山市 金子 美千代

野良仕事用のファッション決めてある

採れすぎの野菜押し売りする近所

昼寝からさめて曜日を間違える

一雨が欲しい節電努力中

娘にはやつぱりなれぬ嫁の距離

愛知県 早川 遯 行

店頭にサンマが並び活気づく

安ければ賞味期限は気にしない

いのちには替えられませんが肝日

もう驚くことではない震度3

風は今脱原発へ吹いている

可児市 板山 まみ子

夜明け待ちコースを変えて半時間

高値なら思いいや増すうなぎ丼

新米のうまさにつられ意志崩れ

病得た母の歳なり七十四

国民を見てるのですか永田町

京都市 高島 啓子

四つ角の花屋閉まってから長い

二五〇円無休の弁当屋

靴下を四つ履いてる椅子の脚

正確な年齢美容院で知る

涼しくなって消えていた頭痛

京都市 榎本 宏子

脳みそのスイッチたまにオフになる

DNAに欠けてるものはド根性

夏野菜地産地消をモットーに

お笑いにワンテンポずれ笑う父

根回しの上手な娘の赤いバラ

京都市 坪井孝一

亀岡市 井上森生

聞き上手プラス志向で受けている

塩だけのおにぎり母の気を貰う

無人駅そこからきつと澄んだ川

素晴らしい青空誰が嘘をつく

地球儀を回すと煙立ち上る

京都市 三宅満子

生きるため三度の食事で流す

帰って来て悲痛な祈り拉致の海

山ガール日頃のウサを捨てに来る

幸せにするよと言って先に逝く

浪費出来るほど小遣いをもらえない

京都市 西村益子

無理せずにジム通いする医療エコ

シヤンと延びた気がするジムの帰り道

言いたいこと飲み込んだかな胃が痛い

ちやちやとおかず作れる人になれませんか

断った同窓会が気になる日

京都市 藤井文代

やる気あるが少なくなつたやれる事

夏バテの脳の妙薬五七五

頷いただけが気が付きや町会長

気を抜いた過ぎた時間はばやけない

手の内を見られても尚笑うだけ

歩く快 天保山も富士山も(天保山の海拔は4m)

博学の神が棲んでる広辞苑

月毎にぼくの話題を確かめる

念力かボケか不思議な明日がある

物忘れ多いとガンも逃げるとか

三日ほど笑ってないなかすれ声

力強い足跡ついてつてみよう

曼珠沙華波打つ稲を際立てる

赤とんぼ秋の気配を連れてくる

仲間だからテリトリーには踏み込まぬ

大阪府 神夏磯典子

思い出に埋もれて出るに出られない

空と言うキャンバス借りて描く老後

的を射る答え負けたなと思う

満点の人にいけずがしたくなり

ピフテキにキャビアを食べて齡試す

大阪府 吉村一風

珍らしい母のハミング米洗う

ふる里を歌うと老いの声達者

下手なうた歌う心の皺のびる

いつまでもプライド少し残ってる

古時計律儀に生きて低い音

大阪市 板東倫子

戦への無智と風化が恐ろしい
のんびりと呆けて居れない国と化す

老人も赤児も酷暑を耐えて秋

原発は安全神話でお茶濁す

私利私欲 私情を捨てた男の眼

大阪市 小谷集一

超スロー妻が魔球を投げてくる

体力と知恵を小出しにして余生

雑草の一本づつが持つ決意

人情に飢えてネオンの海泳ぐ

何気ないジョークに深い傷を負う

大阪市 升成好

夏ばての頃天より見舞梨や栗

金持ちは使わぬ才にたけている

お酒飲む手つきで薬のんでます

趣味ひとつ老いの突つかい棒にする

爛だけは任せず僕の守備範囲

大阪市 谷口義

八十歳の高倉健に会いに行く

想い出に累進課税ついてくる

さりげなく出来たら一人前である

御神輿を担ぐ男はすぐ決まり

瀬祭忌子規も嘆いているだろう

大阪市 熊代菜月

携帯の亡夫^{おつと}の番号まだ消さず

果実酒を浸ける私は下戸でした

恋やろかチョットどきどきしています

塞ぐ手のすぎ間で噂聞かされる

生きること忘れさせるないじめるな

大阪市 江島谷勝弘

あと十五万時間は生きるつもり

関電前僕も叫んでいる一人

コーヒーはブラック少し気取れます

いくらささやかれても無い袖振れぬ

僕の部屋たった六畳ビアノ付き

大阪市 笠嶋恵美

娘がくれる尊い諭吉使えない

初参加友が選する行かなくちや

盆の日は留守にしないで先祖待つ

だんだんに嫁が元気な顔で来る

うす化粧老いをやさしくカバーする

大阪市 岩崎公誠

欲しいものの半分にしてから元氣

はしご酒元氣の素とマイペース

雑字を磨いて明日に備えとく

推敲の一字で光る句が生れ

節電が終り妻から節酒令

大阪市 原田 すみ子

哀しみの澱がわたしを変えてゆく
張りの無い体の中も芯は有る
宝石もなすび一個も選びます
あの角まで次の角まで帰省子と
ジャージ着て腹も気持も緩み出す

大阪市 平嶋 美智子

余生まだ半ば明日をさがす旅
心身のなすがまま生きまた迷う
生家跡に立てば幼き日に戻る
感動だ故郷で会えた秋あかね
古里の今を丸ごと刻み込む

大阪市 小泉 ひさ乃

目が覚めて今日も喜劇の老いふたり
良い笑顔できますように化粧水
横文字で孫から届くエアメール
傷ついて回復力を身に付ける
猛暑の中見舞が続く長寿国

大阪市 池上 清治

散髪の椅子は夢想の時をくれ
風当り強くて飛べぬオスプレイ
そよ風にコスモスゆれる気もゆれる
風向で助かる灰の桜島
尖閣がアジアに風をまきおこし

大阪市 井丸 昌紀

ひたすらが鼻の頭に光ってる
実力はないけど名刺威張ってる
使えば使うほど増えてゆく笑顔
行き帰り同じ景色のはずなのに
暑いけど影はだんだん長くなる

大阪市 伏見 雅明

女房の重石で味の出た男
助手席でひたすら眠る里帰り
無理をしてたまに女房を喜ばす
嫁いだ子奥様ぶりも板に付き
金婚に互いに贈る努力賞

大阪市 津守 なぎさ

旅の宿言葉通じぬ女高生
若いねと言われてからの身だしなみ
たくましいゴーヤ炎暑をはねかえす
猛暑日の汗気の毒な警備員
パラリンピック涙あふれる金メダル

大阪市 田浦 實

打出の小槌世界の知恵を待っている
神話忘れた国は必ず滅びゆく
勤労奉仕あつて賀茂川鮎泳ぐ
なにわの宝淀川うなぎ甞る
カラフルな新すててこに替えました

大阪市 榎本舞夢

八十路来て次の自分を立て直す
二人して出歩く数が徐々に増す
年重ね孫のお守りもうまくなる
今日からはその日その日を楽しんで
どっち先逝つても悔いのないように

大阪市 佐藤忠昭

古稀迎えボケ対策に川柳を
句会後の懇親会で冷汗洗う
先輩の指導戴きボチボチと
辞めへんで下手でも仲間入れといて
悲しいよ僕に後輩未だ出来ず

大阪市 奥村五月

灯が消える妻が三日も黙秘権
もう無理と涙こらえて紙オムツ
誰の目にもすぎた妻だと他人は言う
趣味にこり少し落ちたか脳の錆
最近父も男と娘は嫌う

大阪市 山崎君子

ブーゲンビリア嬉しそうだな主婦
オリンピック閉会式はおごそかに
白い雲同じところで今日もまた
娘はやさし心の中で手を合わす
アロマして顔もつややかひとり笑む

大阪市 松尾柳右子

何もせず残暑きびしい昼下り
盆踊り見るだけになる七十路坂
省エネに扇風機様休みなく
物干しにシャツが並んだ大家族
猛暑に蝉も鳴かない狭い庭

大阪市 坂裕之

書きやすいペンに出合ったうれしい日
歯磨きとひげ剃りだけはやっておく
何にでも挑戦する気だけはあ
平均点あれば上等母の癖
あの人が来るとみんながほつとする

大阪市 寺井弘子

ストレスに拍車をかけた再稼働
職がないふらふらしてと言われても
職人肌叩き上げたる槌の音
ロボットに老後の支援頼るかも
無記名で本音あらわにアンケート

大阪市 津村志華子

意に添わぬ話はポケットに入れる
決断も思案もしますひとりぼち
鉛筆の芯はストレス溜めている
戴いたすだち秋刀魚を買いにゆく
褒められてセールで買ったとは言わぬ

大阪市 中村 叡子

節電にあの頃思い耐えた夏
貧しくも一丸だったあの頃は
血の熱い日本男子が見当らぬ
ひとり居に昨日は何を食べたかなア
ひよつとして明日があるかとしんどう日

大阪市 吉内 タカ子

熱中症に世間が騒ぐ控えとく
ナースの声癒える日を待つ医者通い
桐蔭高たくみな連覇まちの鞭
解散に何を選ぶの無責任
モカの香で目覚める余生むだ無くす

大阪市 近藤 正

昔より今が神話を多く生む
茫洋と見えて緻密にこと運ぶ
オスブレイド米安保あぶり出す
逆境を越えてゆつたりポランティア
惑わずに原発阻止の村がある

堺市 村上 玄也

詰めこんだ知識荷崩れ起こしだし
寒がりか冬がましだと言う猛暑
言い過ぎたり言い足りなかったり自戒
どん底も絶頂も経て昭和去る
老いた身を剥けば未だに五欲秘め

堺市 加島 由一

空に星地に花妻は台所
ろうそくの炎ぐらいの恋ごころ
海に出る川の流れのような老い
毎日が未知と遭遇するひとり
出会ったら別れるもんと言ひ聞かす

堺市 柿花 和夫

映倫ならカットしそうなワイドショー
来ぬ人を一途に待っているワイン
うつの日も匍匐前進万歩計
ああ不覚サスペンダーの要るメタボ
予想屋のおっちゃんみんな同じ顔

堺市 矢倉 五月

笑顔にも天然物と養殖と
外は雨仏とゆるりお茶にする
総理より通訳さんの顔覚え
裏方を称え打上げ盛り上げる
女神舞い降りてくれたか今日の運

堺市 奥 時雄

暴言が酒のせいだと思えない
人相で言えば間違ひなくホシだ
紅一点美人でないが良くもてる
子を付けた名前娘に恨まれる
絶対に許さぬはずの木戸を開け

堺市 荻野像山

鰻屋のエリア広げている団扇

年金の枠だ遠慮のいらぬ酒

蚊のキツスだけは御免蒙ります

恥を気にしてたら夫婦つとまらぬ

忙しくて時々チャックかけ忘れ

堺市 西村りつえ

簡素な服ぐつと美人を引き立てる

乗せられて苦手な人と握手出来

手を掛けた稲は喜びおじぎする

愛の巢にずっと憧れまだひとり

下心微かに匂う笑顔まき

堺市 宮本かりん

失敗もまだ生きていく証だな

飯の世をためらいもなく生きてきた

不器用に生きててもこの世楽しいな

惜しめない齢まで生きてきたこの世

姿見せずこおろぎが鳴く秋もよう

堺市 大隅克博

町なかのごちやごちやしてるところが里

脳みそを耕しながら今を生きて

長男に嫁ぐを避ける気は解る

熱帯夜なんて言うから寝つかれぬ

農耕の民族だけど肉が好き

堺市 遠山唯教

空腹になると湧かないリリシズム

灼熱に耐える力はまだ残る

熱帯夜の五輪で夜行性となる

ともしびに研ぎすまされてゆく時間

いざ傘寿じぶんの影を褒めてやる

堺市 澤井敏治

パソコン慣れ語彙がだんだん瘦せていく

こつこつと鈍感力を磨く日日

憎しみの石は四角い波紋呼ぶ

嫁が来る今日は掃除をしなくっちゃ

同居しても昼は変らず独り膳

堺市 大久保のん子

真心が透ける眼鏡がほしいもの

私を根こそぎ変えたいい出合い

老化へのカンフル剤が好奇心

傷残る古い手紙を捨て切れず

ふりむけば未練がましくなる私

堺市 内藤憲彦

好きでしたと言われ脳波が乱れ出す

どっこいしょ座った石が歳を聞く

初孫の抱いた温もり今も手に

いい喉だ大枚はただけはある

返信がない生きているのか電話する

和泉市 横山捷也

主治医も持病あるらし酒談議
ボロボロになる前引退しておこう
ストレスが溜り禁酒の枠を解く
約束をたまに反古して息を抜く
撃いだ紐母が締めたり緩めたり

茨木市 藤井正雄

よしこれで勝ったと読んだ駒の音
進学の孫逆指名する祝い

酔っている箸も小皿もみな楽器
産声は白で包まれ親子無事

回り道祖母に老舗の菓子を買う

茨木市 島田誠一

過去の傷決して責めぬ葉指
職引いた父は仏の顔で居る
もうあかん店仕舞やと売りつけ
輪唱のようにズレても五十年
もめごとの元は単純かけちがい

大阪狭山市 矢野 梓

予告なく友達れ去った彼岸花
坂道がだんだんきつくなる墓参
これからをどう組み換えるタイガース
裏技もあるばあちゃんの知恵袋
何もない今日一日が有り難い

交野市 森本弘風

浪費した穴埋めですか消費税
寝苦しい夜もぐつすりうちの夫
女房よ恐れ多くてウソなんか
欲しいのはあと一本の徳利です
安心は何時も財布にあるカード

岸和田市 雪本珠子

自己中が増えて優しさ欠けてゆく
泣き笑い人生まるで万華鏡

ストレスを逆手にとつて活力に
雑草に生きるエナジーもらつてる

脳細胞ブチブチ音を立てている

岸和田市 堤 檣代

そろそろと編みものしたい季節です
水やりをさぼりたいなと空を見る
太陽もおつかれでしょう休んでね
レシピには野菜と書いていたけれど
人並に歳を喰らつて鈍感に

岸和田市 森元 ふみよ

気まぐれな魔女の一撃喰らった日
病床で知ったナースの人情味
四人部屋慰め勇氣与え合い
好き嫌い言つては駄目と病院食
歩く事こんなはずではなかったに

河内長野市 村上直樹

名刺もない暮らしに馴れて好好爺

自己発電老萬ボルト耐忒杯

怨念を目玉に籠めて蟬の殻

ひたすらにしあわせごっこクラス会

流れ雲いいなお前は風まかせ

河内長野市 坂上淳司

脱二十年まだ磨いてる愛煙具

広言をしなきやよかった休肝日

虎の子の自齒と別れる日のショック

ジッパーもボタンもきつい一張羅

出監に悔しさ惨む師の目元

河内長野市 水谷正子

日本丸誰が舵取る曇天に

オスプレイ嫌と言うても決まってる

蟬時雨言うほど今年鳴かなんだ

雷が落ちた杉の木見物に

杉の木を拝んで貰いレッカーで

河内長野市 植村喜代

日中は犬も溝の中歩き

入院なのか友が電話に出なくなり

検査のはずだった入院友が逝く

残り少ない友に淋しさを思う

どの国にいても太陽は同じ

河内長野市 黒岩靖博

明日の糧よくよしてる閑もない

母の荷は昔ながらの紐結び

苦も楽も節目のり越え共白髪

手抜きせず妥協もしない料理人

遅れても大器晩成慌てない

河内長野市 木見谷孝代

描きながら嫉妬してます栗の艶

道草の好きな絵筆が止まらない

エアコンをつける言い訳してしまう

ストレスが溜まると口がよく動く

姿見の猫背にはっと身を反らす

河内長野市 松岡篤

シルバー割り有難いけど淋しさも

歳かなあ席ゆずられてしみじみと

大変だ言訳寿司を網棚に

効き過ぎた前宣伝がブレッシャー

地下街はややこしいから上に出る

河内長野市 梶原弘光

睨み付けてないと右脳は直ぐ休む

素人の顔で物言う専門家

年金の支給日仲間から電話

待ち合わせ時間ピタリに来る律義

歯車が軋み出したらバラ一輪

河内長野市 谷 久美子

吹田市 瀬戸 まさよ

一日の咎を燃やして日が沈む

指揮棒に酔って居眠り心地良く

目覚ましが急に鳴り出す午前二時

歯車に欠かせぬ母の潤滑油

歯車が錆びついてゆく日中韓

河内長野市 山室 光 弘

楚楚とした美女に似合わぬにぎり箸

女子力は我が家だけではおまへんな

坂道を下る日本が止まらない

とれたての野菜に光る父の汗

その内に楽隠居から認知症

四條畷市 吉岡 修

お似合いになりますきつと鼻メガネ

コンビニヘベンツでつかい顔でくる

オブラートでいつそ飲みこみたいお人

折り返えすここから逆風覚悟する

萌えたくてレッスンワンを読みなおす

吹田市 山本 希久子

平凡でよし秋の道萩の道

出来そうで出来ぬ身辺整理など

少々のミス笑ってすますが基本

やさしい人うしろ姿にも笑顔

目に見えぬ仕切りがあつて三世代

核の処理発見すればノーベル賞

活性化脳に役立つ回顧談

パンの耳好き端つこに深い味

新鮮な野菜は生で美味礼賛

島国の島ですお引き取り願う

吹田市 野下 之 男

懸念乗せまだ飛ぶつもりオスプレイ

混沌を破る名将いませんか

なでしこが芯の強さを見せてくれ

オウムさん好きな人だけ肩に乗る

コスモスが優しい秋を愛でている

吹田市 大谷 篤 子

妥協して私の彩をたしておく

調子いい女の声はよく響く

寂しさが不意に心をノックする

止水制限お風呂のお湯があふれてる

気付かないところで里が消えている

吹田市 木下 敏 子

絵手紙のトンぼ楽しく飛んでくる

ひとり居て防災袋抱いて寝る

触らないでください開く花の夢

舌下錠忍ばせ今日も生き延びる

聞き流すことが上手になった耳

吹田市 須磨活恵

欲ばつて滑つて落ちた蟻地獄
後悔をするより無駄骨折つてみる
迷いごと曼珠沙華の首を切る
木守柿夕焼いろになつて冬
しのびよる冬は爪先あたりから

高槻市 井上照子

土曜日は塾用ですか学力低下
ネクタイの無い国会の熱見えぬ
顔を見ておいくつですか何故問うの
青い鳥飛び出たままの二十年
コスモスの蕾に夫の笑顔見る

高槻市 指宿千枝子

風を迎え風を見送る盆まつり
砂浜のほてりを冷ます秋の風
涼風にビーチの恋をいやされる
嬉しかった今日のページに星マーク
生きているを実感させる悩みごと

高槻市 左右田泰雄

居座つて一步も引かぬ根比べ
溜め息をつくと明日が遠くなる
お座りが上手な犬のすまし顔
少し距離おいて浮べるうす笑い
思いやる心が胸に灯を点す

高槻市 富田美義

よう来たと気さくな里の生き仏
修正液残り少なく吹き留まり
孤老死の取越し苦労して暮れる
長寿とや先は我慢の山ばかり
のんびりと生きて限界迎えたい

高槻市 富田保子

なに食べてもビックリ顔のグルメレポ
年金者も貯めたい食べたい儲けたい
医師の敷くレールに乗って行く命
来た道は違えど嬉し古希祝う
秋風に同窓会の返事出す

高槻市 初代正彦

はしやぎ過ぎ鉢を飛び出た金魚くん
夜更しのツケを頭痛で諫められ
夏帽の紐締め直す尾根歩き
煙草屋の昭和の香り消えて行く
節電をコロツと忘れ五輪熱

高槻市 佐甲昭二

コーヒーのお代り愚痴が止まらない
言いたいこと言つて心に穴が空き
勝ったのは運につきると憎らしい
のろのろとしながら的は外さない
結び目が少し遊んできた夫婦

高槻市 安田 忠子

高槻市 島田 千鶴子

効能書き読んで薬が怖くなる
良い友を沢山持つている宝

待ち時間宝を探す古本屋

信号機の無いサロベツの青い空

美しいサロベツ原野次世代へ

高槻市 峯村 勲弘

高石市 浅野 房子

自然美を超えた巨匠の芸術美

日本人心に生きる真善美

黙禱に平和を誓う甲子園

飛来する鳥は自由に尖閣へ

笑いましう不思議と心浮きますよ

高槻市 片山 かずお

豊中市 水野 黒兔

先読みが過ぎて一步が踏み出せぬ

リスクばかり考え男小さくなる

飲もうかにすぐ来てくれる友がいる

飲んでいるときは滾っている勇氣

謙遜の言葉に驕りまぜている

高槻市 杉本 義昭

豊中市 藤井 則彦

この地球水と空気のある不思議

少年期子の出すサイン見逃せぬ

未練ある恋がいまだに一つあり

幸せの歩幅を広げ過ぎ滑る

ワンマンのボスが支える町工場

今日の愚痴ご破算にして米を研ぐ

音声つき家電朝から騒がしい

スランプを楽しんでいるメモ用紙

頬杖のため息恋の病です

迷い猫風の鳴る音聞いている

お隣は一番遠い他人さま

気にすまい臨機応変すればよい

飼い主のあと追うように逝った犬

よそ様のいさかいに口出すでない

プロ野球みんな仲良くガムを噛む

跳ねているつもりが妻のたなごころ

木製のスプーンが味の旅の粥

浮雲としばらく歩く坂の町

陽炎の中溶けながら歩道橋

すれ違う少女初秋の風の色

要するにみんないつかは死ぬのです

モノリザの微笑に探りたい本音

勝ち誇っても脚下照顧は忘れまい

ライバルに贈る讃辞もかすがち

名刺綴りに映る来し方五十年

豊中市 江見見清

根回しが効いたか波風は立たず
封を切るペーパーナイフ音はずむ
さだまさしも追つかけももう六十歳
もう一つの自分づくりに買う帽子
八月は孫にイクサの事も言い

豊中市 松村里江

紅筆を選ぶやさしい指先で
噂でも貴方の名前聞きたいの
羊より満天の星数えよう
どのネジを締めれば直るお人よし
こだわりとハテナが生んだすぐれもの

豊中市 松尾美智代

背中しやんと伸ばせば五歳若く見え
運のいい家だ花火が見える窓
毒だみ草人を助けて白い花
おみやげに笑顔を持つて友と会う
まつ直ぐに生きてこられたありがと

富田林市 中井アキ

響き合う鈴を持つてゐる 待つてゐる
二人三脚信じてくれたのはあなた
皺の掌が握る小さな自尊心
滾るものあつて両手でする握手
無から無の命に騒ぐことはない

寝屋川市 籠島恵子

似たようなケースと束にされている
後日談聞いて手紙を書いている
消印有効ちよつと一服してしまふ
結束バンドかけられてから反省
五十肩になつても孫を抱いている

寝屋川市 森茜

道祖神たつぷりお水さしあげる
生かされて白いページにある明日
遠まわりうなだれている向日葵も
古寺めぐり亡母の手帖を道づれに
いたわりが軽率だった玉手箱

寝屋川市 平松かすみ

暑いのにこころふんわりむくげ咲く
王様に尽くすわたしの二十四時
フラフラ三回回る喜寿の腰
お隣のことを逝つてもわからない
家族葬ばかりどなたが逝つたのか

寝屋川市 山本三郎

アルプスの山々白いバスツアー
故郷の香を包む宅急便
円満な家庭かしこい嫁がいた
昇進を妻に知らせる無表情
若者がビールかけ合う平和な日

寢屋川市 富山 ルイ子

還暦の娘長生きして欲しい
難病の友御主人が家事すべて
ひとり言先に逝くのは私です
外出が高血圧でこわかった
介護保険使わぬ幸に感謝する

羽曳野市 吉村 久仁雄

長生きは芸だと祖父に教えられ
一病に耐えると見えてくる美学
ほころびを縫っては夢を捨て切れず
自尊心半分減って丁度よい
妻の傘だけが豪雨に差してくれ

羽曳野市 三好 専平

鳴く蟬に愀気催す老いの坂
夏ボケに平和ボケまたよしとせん
ケイタイで人を殺して良い子ぶり
石ころにしかぬ命をもてあまし
くりかえすことが奇跡を生んでゆく

羽曳野市 永田 章司

本当に今こそ欲しい偉い人
神童も今はコンビニアルバイト
お互いに譲らぬ領土歴史観
弱点と見せて相手を誘いこむ
毛虫には誰も賛辞を贈らない

羽曳野市 福田 悦子

空白の無駄も人生数の内
無に帰る父は寡黙を守り貫き
氷枕熱をさましてくれた母
人の波に酔って自分を見失しない
文化の日勲章ニュースで盛上り

羽曳野市 徳山 みつこ

蝉しぐれ一日ひとひがいとおいしい
神さまの慈悲だろイエローカードくる
一枚のハガキにすがりつきもして
花束と元気をくれた見舞客
月光のシャワー私がすぎとおる

羽曳野市 安芸田 泰子

肩書の多い名刺がよく喋る
猫にまでバイバイをして孫帰る
炎天に出る決心つかぬ喫茶店
家中の要所要所に老眼鏡
長電話犬のことやら猫のこと

阪南市 森村 美花

健康な今に感謝の朝ごはん
おだてには弱い私とバレている
悔いのない今のわたしか問うてみる
あたたかい言葉は胸に秘めておく
虫の声聞いてどきどきしています

東大阪市 北村賢子

生命の讃歌奏でる夕茜

チロチロと燃えるものあり生きられる

美しい自然に棲んでいた悪魔

今日の出来事しゃべり合つてゐる夕すずめ

再生を誓う七万分の一の松

東大阪市 笠井欣子

アイラブユー遺影に一寸おべんちゃら

なんばまで一寸旅行の気がします

この蕾切ろか止めよか花鋏

大雷鳴知らずに眠り笑われる

月山に登つたこの靴捨てられぬ

枚方市 海老池 洋

ストライクゾーン広げて丸く生き

他人様を褒めて世間を広くする

人の世話できて幸せだと思ふ

太陽がさずけてくれた健康美

またあした夕日へ汗の手を合わせ

枚方市 寺川弘一

浴びるほど飲んで流せぬ罪障感

曖昧に動いて出世する男

強靱な紐でなかつた蜘蛛の糸

最大のライバルやはり親友さ

時が過ぎると老人になつていく

枚方市 伊達郁夫

ロゼワイン亡夫に少し注いでやる

ジャンプする助走を今も続けている

八日目の蟬が網戸にしがみつく

便利さが五体を劣化させる鬱

老夫婦喧嘩の種を乾してます

枚方市 小林わこ

顔洗う優しい笑みをとり戻す

少しづつ蓋をずらせば見えてくる

長い眼でみようとにかく知らぬ振りをして

強がつたあなたのそこが弱いところ

母や妻にならず楽しむ日曜日

枚方市 丹後屋 肇

デパ地下で舌舐めずりをグラム買う

亡妻のパッチワークが褪せている

生態系壊して淋しがつている

原発の廃墟にすだく虫の声

月命日位牌に自問自答する

枚方市 二宮山久

使つてはならぬお金のある財布

剣山きわめて雲の速さかな

人生をこよなく愛す妻がいる

岩清水飲んで休憩山登り

朝顔の一輪咲きて日本晴れ

枚方市 二宮紫鳳

夏バテも夏瘦せもせず秋迎え

しなやかにコスモス揺れて里帰り

虫の音とともにさわやかウォーキング

満月の光が癒す夫婦酒

何事も笑い飛ばして生き上手

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

秋の家運動靴が脱いである

コスモスがいつぱい咲いているコラム

弟へ笑顔以外はしてやれぬ

過去は過去上手に思い出している

いつきに秋まとめたくなる身のまわり

藤井寺市 太田 扶美代

ロマンスの欠片ぐらいいは抱いておこ

ナスキュリみんな味方で夏を越す

薔薇の花咲いたぐらいいで娘に電話

コラム欄に時々現れる真珠

謝らぬ夫はなかなかのお人

藤井寺市 鈴木 いさお

育んだ娘が新しい生命産む

臨月の鼓動は母子の二重奏

佐渡紀行朱鷺の墓へも花供え

精一杯生きて美しく老いる

さすが路郎やはり水府と讀え合う

藤井寺市 津田 シルク

応援団もほめてあげねば暑い中

外国の松茸一応かいでみる

木の下に秋は近いと蟬果てる

木の家に住んで高層あこがれる

もつと若けりやきつとしているボランティア

藤井寺市 若松 雅枝

剪定の嫁に文句をつけられず

美しい朝だ柘榴の実が赤い

裸婦像をそつと上目で見る画展

リハビリで嫌われまいと髪洗う

死亡欄また懐かしい人が逝く

藤井寺市 増井 ヨシ枝

休耕田極暑尻目に虫集く

眉を描く真剣勝負のかまえにて

台風形でやつて来た訃報

雷雲今日も水やりお願いね

距離おいてみようよこれも親心

藤井寺市 俣野 登志子

長電話ドリンク剤に似た効果

停年で甘いマスクも置いてきた

猿山で似た顔見つけほくそ笑む

旧友と喋り明かしてまだ足りぬ

長椅子にゴロリテレビを見る至福

藤井寺市 吉田 喜代子

暑過ぎて月一の会日を忘れ
猛暑日に冬瓜とろり胃に落ちる
夏休み終わり我家が広くなる
喜寿うれし市から祝を頂いた
活断層家が建つて言われても

箕面市 広島 巴子

フルムーン湯布の湯煙ほっこりと
襟正し感服知覧武家屋敷
砂風呂に心中のように夫婦寝る
桜島別れを惜しむ噴煙よ
独り寝の母にも届け虫の音よ

守口市 井上 桂作

今年こそゆつくり五輪テレビづけ
見おさめかロンドン五輪夜半まで
生きるとはこの世に享けし吾が命
生きるとは悔いを残さず使い切れ
急ぐなよ死ねば誰でも土かえる

八尾市 宮崎 シマ子

カーテン一枚本当が嘘にすぐ変る
無事酷暑越えた私も向日葵も
同じ模様ばかり老いの万華鏡
蟻の列どれが先頭なんだろう
七光りの中に渋いの一二本

八尾市 村上 ミツ子
食べて寝て一句捻ってまた食べる
一応見てるテレビの星占い

遠慮なくデートのできる夢の中
うなぎ屋の前を行ったり来たりする
昔の方がよかったなんて思わない

大阪府 初山 隆盛

日の本の万世一系菊薫る
彼岸花女の性のかなしき朱
不夜城にまんじともえの恋が咲く
カラオケでスポットライト浴びてくる
船中八策風を前に船出する

大阪府 米澤 淑子

猛暑去りお疲れさまの夏帽子
今にして消したい恥の二つ三つ
無防備な耳は雑音ひろい過ぎ
指一本スマホが答え脳退化
生きている証愚痴出るゴミも出る

大阪府 桑田 ゆきの

永田町何やら怪しい風が吹く
一徹の父は腕組み解かぬ儘
蛸が拉致解決へ哀歌とも
ままごとの一膳にあり百日紅
水打てば庭の陶狸が目を覚す

大阪府 野田 栄 呼

神戸市 白川 淑子

葉の数競い合つて旅の宿

外出の前は大事と休養日

辛口で熱中症を遠ざける

生まれるも死ぬのもひとり怖くない

草抜きが趣味で退屈しない八十

神戸市 伊勢田 毅

元部下の上司によいしよ自己嫌悪

のほほんと議席で眠る金バツジ

のほほんの女で無精卵を抱く

マニフェスト有耶無耶にする二枚舌

クラス会自慢話にまじる嘘

神戸市 山崎 武彦

逢うだけで足りる少女の薄化粧

パン好きの妻がおいしい飯を炊く

チンだけのカレー旨いと言われても

脇道に逸れて気付いた手の温み

十月の木洩れ日にある小さい秋

神戸市 木村 貴代子

電気より先ず守りたい土と水

内定の電話待つ子に法師蟬

やつとこさ取った電話に悩まされ

雲つかむ話政治も外交も

非通知の電話は取らぬ老いの知恵

一人でも独りと違う箸二本

どくだみもアロエも効かぬ恋の傷

貸したのはお金では無くハートです

古希過ぎて回すボールが弾みすぎ

やる気ないダメ虎に飛ばす風船

神戸市 山田 婦美子

一度しかない人生の姑介護

ささやかな気配りされて生きかえる

夫も居て子も居てなぜか淋しい日

ストレスを抱えたままの重たい手

百日紅の紅に亡母がそつと見え

相生市 中塚 礎石

風評を路地裏で聞く涙

円高のたつた一円泣き笑い

粥に梅貧乏のころ思い出す

ど忘れを痴呆症だと孫が言う

休憩をせよと軍手の汗が言う

明石市 糀谷 和郎

振り上げる拳に明日の音を聞く

起きてから今日の予定を立てている

若き日をダブらす旅の老い二人

息止めて生きているなと死を思う

一言を言う前ひと抱きしめる

芦屋市 竹山千賀子

観月に雲がベールをかけに来る
紅葉狩りポッケに秋を持ち帰る
ギブアップしたくないから無理しない
無理するな仏の声が飛んで来る
漫画読む男の顔に敵がない

尼崎市 山田耕治

父と子が同じバジャマで坐つてる
買わんでもあるはずですと出してくる
お疲れ様裏方さんの紙コップ
一合か五勺か医者を笑わせる
高画質テレビで見るコマーシャル

尼崎市 軸丸勝己

なみなみと注げばニコニコも一杯
湯上がりには確かめてみる美人の湯
自動ドア手で確かめるガラス張り
ジェネリック変えて薬がややこしい
断りに歳のサバ読む電話口

尼崎市 林昭三

ゆつくりとトイレで思索いつ退院
新聞は表裏まで読みまた入院
妹からの恙が無きやに里の梨
ご婦人に劣らず男よく磨く
よく磨く努力の甲斐で美しい

尼崎市 加川靖鬼

マンボウの顔ぼつかりと雲も秋
若いつていいね五輪の汗光る
水茄子の彩艶やかな漬かりごろ
夜明けのスキヤットさおりの唄が浸みてる
うっかりと噂流したパンの耳

尼崎市 藤岡りこ

ポックリ寺のお守り嫁がくれました
階段の手摺は見栄で掴まない
掴まり立ちやつと出来たと手術後
朝顔の観察日記夏は逝く
賑やかな病歴自慢クラス会

尼崎市 市坪武臣

蟬の声天下を取ったように鳴く
蟬時雨今日も生きると鳴き叫ぶ
自信句が選からこぼれショックです
不祥事を謝ることの不恰好
まだ古稀です枯れてませんと見栄を張り

加西市 金川宣子

給料日常生活保護費貰いたい
機嫌よく切ったカードに絞められる
貸金庫無駄を預ける権利持ち
修正を効かすカメラに顔託す
娘が期待老いてはならぬ孫の世話

ストレスを発散させる百均屋

川西市 西内 朋月

剪定の庭を眺める秋日和

一言が勘にさわつたらしい耳

島ひとつ丸くおさまることはない

震災を忘れ原発再稼働

川西市 米原 雪子

お久し振り明るい笑顔少し古い

秋が来たクラブ活動メール来る

とんとんと仕事捗り気も弾む

老いて猶おしゃれ上手な友を持つ

友の電話明るい声に救われる

篠山市 酒井 真由

人の世の闇をみている暮

ぬるま湯につかり迷路をぬけだせぬ

古民家売ります星空も売ります

研ぎたての鎌月光を吸っている

瓦礫処理重い鎖をひきずつて

三田市 石原 歳子

鳴く虫へおかまいなしに草を刈る

会いたいと日にち数える友と会う

物思いしながら虫の声を聞く

病院の待つての間足湯する

多忙でも買ったことない無洗米

断捨離に未練昭和が語り出す

高齢化敬老会が繰り上がる

涼風に会うと優しい気になれる

お月見で想うかぐや姫のその後

老人が集うお部屋が狭くなる

三田市 北野 哲男

善人の首を並べた遍路バス

透明な杖が時々欲しい歳

電柱のビラで就職した昔

新機能増えたら困るメカ音痴

ご本尊存知ませんが紅葉なら

三田市 堀 正和

大寒の生れで猛暑には弱い

マンションの隙間から見る大花火

故郷の祭りで悪ガキに戻る

打出し太鼓笑顔のままで寄席を出る

川柳を作るだけが腹は減る

三田市 田中 章子

さざ波で終らす術を知る夫婦

メロンパンのように兎らに好かれたい

もらせない話ひとまず忘れます

飲みこんだ針が時時痛みだす

おをつけて下品になっていくことば

三田市 尾崎 一子

生も死も人の定めの内にある

天災も人の命もままならぬ

不老長寿医者で足りずサブリ飲む

切ないね夢まぼろしの差し向い

頑張った分だけ君の宝物

三田市 福田 好文

百歳が珍しかったのは昭和

コンビニが出来て留守番好きになる

古稀記念孫引き連れて富士登山

富士山頂孫三人とハイタツチ

富士山頂三百円で行くトイレ

西宮市 山本 義子

ここ一番天はいつでも味方なり

今のうちいっぱい遊ぶことに決め

いま元氣明日も元氣と竹を踏む

鏡のなか納得いかぬ顔がある

夢だつていいのです人恋し 秋

西宮市 秋元 てる

手ぶらで来手ぶらで帰るこの世善し

頼り切りを操作上手とあつけらん

積ん読も時を稼いで様になり

石が好きゴロツと裸でそこに居る

こじんまりはすぐに出来ると思つてた

西宮市 牧 渕 富喜子

何もない所ですけど蛍舞う

落ちつこうオリンピックも済んでいる

勘違いさせてはならぬ国境

今日もまだ三十五度ぞ 雲は秋

長電話領土尖閣まで及び

西宮市 緒方 美津子

米ばなれパンになったら目が食べる

横にふる首を持たないがしんたれ

ぬくもりと残り香母のチャンチャンコ

その時は母をはなさなかつた父

律儀者案山子は決して座らない

西宮市 亀岡 哲子

6センチ伸びて日焼けの新学期

内定が出たぞ春までのほんと

熊だつて近く絶滅危惧種かも

消費税貧乏神も付いてくる

私を励ます秋の入口で

西宮市 片山 忠

いつまでも大事にしたい母の味

外人の着物姿にいとうれし

これだけは譲れぬものに旨い水

慰労する私も深い傷がある

おひとりで行つて来てはと突き放す

西宮市 藤本直

挨拶もそこそこになる炎天下
散歩好きの犬も出歩く日が続き
親と子の絆の形丸い鍋
大学は出たが明日は霧の中
虐待に欲しい子育て免許証

西宮市 足立茂

九官鳥に妻が教えた「遅いわねえ」
玉の汗が充実感になる稲穂
紙と鉛筆何か足りない秋の夜
ウインクで顔面神経痛になる
嫌なこと他人に言わせて身を守る

西脇市 七反田順子

涼しさを渡り歩いて猫優雅
柳誌の音高らかに呼ぶポストです
最後の日宿題燭る親と子が
コマーシャル子役が跳ねている世界
鬼灯が好きだった母手向けよう

姫路市 古川奮水

パラリンピック凱歌万歳おめでとう
忘却は出来ぬ八月キノコ雲
夜遊びがすぎて物干しまた湿る
戦争を知らぬ世代へ鐘鳴らせ
ジャンボくじ当たったらしい姿消え

奈良市 米田恭昌

熱血漢なんぎなことにすぐ切れる
半世紀何度もあつた曲り角
おもらしをした関白の哀しい目
病み上り体重計に劳られ
政界にうねる維新の関の声

奈良市 岩本浩二

タイガース矢張り張り張りの虎なのか
日本の弱腰突いて中韓露
痛いところ突かれ思わず目が泳ぐ
プツと種飛ばしたくなるサクランボ
親の後継ぐに躊躇の町工場

奈良市 加門萌子

絶滅の品種も増える地球危機
この猛暑あおる節電政治闇
このところ喪の儀式だけ続くこと
民衆と政治誠に乖離する
当り前と思う油断に穴が開く

奈良市 辻内げんえい

骨のない若手に今日も喝入れる
目を閉じて思い出巡る通夜の席
水風呂も孫にはプール嬉しそう
高齢者には節電も命懸け
筆持てば背筋が伸びて凜とする

奈良市 阿部 紀子

トランペット秋空響き師を送る

オセロのよう日々の世相が入れ替わる

比叡山四方の山河我が手中

穂高から孫の写メール楽しくて

友と会う悩みは尽きぬ秋深し

生駒市 飛 永 ふりこ

五臓みな点滅しだし無理できぬ

哀愁の余情健さんのスクリーン

入院の窓に見守る蝶の舞

編笠に包む恋です風の盆

底の底するくなくから越えられた

香芝市 大内 朝子

ありがとういっぱい積んでいる余生

人情に触れて孤独の風を抜く

ひよいと恋血肉の踊り出す命

あの人もこの人もみな丸うなり

生きいきと御洒落狐で生き延びる

橿原市 居 谷 真理子

ぐりぐりがあつて素直になれないの

見つけられなかった無いことにしとく

幸せの適量だろ一掴み

揺すれ揺すれ何か零れるまでココロ

磔刑の十字で飾る白い胸

大和郡山市 坊 農 柳 弘

高望みしない男の土踏ます

何気ない仕草に愛が溢れてる

生きたくて虚飾の秋を食べ尽す

名月にお誘いがある夜明けまで

逆らえぬ位置で煙草をそつと消す

和歌山市 岩 本 美智子

迎え火を探し求める兵の霊

送り火のゆらぎ夫の影を見る

原爆忌碑に刻まれる名は絶えず

終戦を忘れていないオスブレイ

十メートル杖と挑んだポストまで

和歌山市 福 本 英子

異状気象でも時季が来て花が咲く

上手下手厭きさせぬよう美術館

私が死んだら国費少し減る

順番に逝けず残った者の負け

満腹の朝昼晩にくる睡魔

和歌山市 古久保 和子

ぶどう一粒口づけのリハーサル

オムライスきれいに包む嘘もある

コンビニのおでんは策士だと思ふ

ケータイのカメラへ老父を押し込める

すずめチョンチョン実りの秋を楽しげに

和歌山市 田 中 み ね

いったんは止めると決めたその道が
茶柱が立ちましたけど何も無い
立場上きらわれ役も買って出る
不眠症と戦いながら夜が明ける
肩書はいとシンブルな人が好き

和歌山市 木 本 朱 夏

まなうらに十七歳の夏がある
みずいろのリボンで夏の日を結ぶ
門限には帰る子猫を待っている
除菌するたびにわたしが消えてゆく
路線バスでゆつくり秋のスケジュール

和歌山市 武 本 碧

殻脱いでみようブランコ高く漕ぐ
誤作動かダイナミックに変わる風
弱点に他人はピント当てたがる
アナログの人生せてリズムカル
バラの花で埋めつくしたい終い風呂

和歌山市 玉 置 当 代

人生のでこぼこ道に鍛えられ
心根はみんなやさしいかごめの輪
子どもたちの荷物にならぬよう歩く
つまずいた石からアイデアを掴む
夏バテの脳にアイデア浮かばない

和歌山市 松 尾 和 香

宮島の潮の満ち引き亡夫偲ぶ
さざ波の萩の浜辺にさす朝日
秋吉台流れる雲に亡夫偲ぶ
四十年前に戻りつ母子旅
波しぶきわたしを包む熊野灘

和歌山市 喜 田 准 一

味付けた噂直送されて来る
イケメンの値打ち下げてる軽い口
徹ちやん議員半減とは立派
きれいな事だけで世の中回らない
挨拶の交わせる位置に居て無難

和歌山市 福 井 菜 摘

人情に触れてほころぶ路地の花
荒れ地にも未来を願うこぼれ種
格差などないおふくろの塩むすび
宝ものなくて笑顔を持ち歩く
拾い読むコラムに脳の錆落す

和歌山市 松 原 寿 子

胸熱く趣味のひとつに灯を求め
落ちこんだ胸にカンナの朱が迫る
のせ上手な人へうっかり本音吐く
生も死も苦汁病とする戦
女同士充電をする酒がある

和歌山市 堀

富美子

子の目には危なっかしく映る老い

私の尺度で今日を熱くする

斜めから見れば誰より弾むらし

試飲した限定品に乗せられる

レンチャンで歌に嵌っている私

和歌山市

土屋 起世子

独り暮らす喧嘩相手のない辛さ

いつの日も倅せ母と比べたら

オレオレにいつもの私どこえやら

年齢に合わせたレシピ家風です

仲人は大器晩成言ったけど

和歌山市

柏原 夕胡

ギリギリの所で息をしています

傷も良い人にやさしくなれるから

ペット禁止のマンションで飼うぬいぐるみ

黄泉までもついて行きたい人だった

意のままになるから興味ない男

和歌山市

坂部 紀久子

陽が落ちてやっと働く主婦となる

一人住み猛暑に負けぬメニユーよる

植木鉢海になるまで水をやる

とうもろこし剥けば笑顔がこぼれ出る

座敷まで来るから蟻よ潰される

岩出市 藤原 ほか

見逃したサインの重み思い知る

飾らない君の生き様胸を打つ

ピリオドを打って再び歩き出す

イメージが湧くとすんなり回り出す

語るには語りつくせぬ母の道

海南市

堂上 泰女

孫へ説くメダリストらの心意気

震災のシミュレーションに身が縮む

ジェラシーを誘発させた花の罪

メタセコイヤと孫のパワーには負ける

ヒトウオッチング茶店で残暑凌ぎつつ

紀の川市

北山 絹子

咳払いいつも気になる父の癖

這い上がる勇気をくれた土手の草

幸せが扉を叩く日も近い

赤札に何故か未練が付き纏う

天下無敵そんな男がいてもよい

田辺市

岡本 昇

貯めた金あの世とやらで使います

少年期道草食った付けがくる

片棒を担いでくれる妻が居る

合コンの相手テンション高すぎる

先ず我を許して相手許します

橋本市 石田隆彦

知らん顔出来る都会の薄情け

曖昧な告白受けて共白髪

曖昧な色しか見えぬ近未来

過去の事実今の実状揺れる基地

デモ隊の心をハイに反戦歌

鳥取市 土橋はるお

息吹きかけた庭木を切ったのは誰だ

問責をされた総理は高枕

花は咲くみなが寄り添い歌つて

へそくりを多く溜めてたので許す

気配りも迷惑がられないように

鳥取市 加藤茶人

結局はバクが食うたなマニフェスト

不便にはなるが不便でまた都

根性も意地も忘れた愚痴と酒

チャンバラが似合う昭和の裏通り

枯れて尚棘は生きてるバラの意地

鳥取市 西川和子

この味は猛暑を耐えた梨だから

熟れ過ぎた果実にもある使い道

梨に柿林檎蜜柑と秋深む

入れ歯にもつるんといける梨ゼリー

瑞瑞しくて可愛いときもあった筈

鳥取市 吉田弘子

母の齢生きたとすれば十五年

好きな事齢を忘れるほど夢中

左手で描く絵手紙の上手下手

病名を質問形に問う勇氣

幸せを運ぶ笑顔を絶やさない

鳥取市 春木圭一郎

頑張れば記録の伸びるうれしさよ

さわやかなあいさつその日軽やかに

人のため嬉々と働く人目指す

懸命に取り組む端役光増す

目標を持てるだけでも幸せか

鳥取市 前田楓花

水やりが花と私の無言劇

いい朝だ花に挨拶しておこう

しつかりと今日を生きたら明日が来る

残り火が手の中でゆらゆら燃える

幸せの予感隣に彼が居る

鳥取市 竹口清信

俺のこと何も知ってるお月さま

見られても月は誰にも喋らない

月も鏡だ笑えば笑う泣けば泣く

月並なことが月にはわからない

月ばかり責めても月は知らぬ振り

鳥取市 平尾菜美

遠ざかる昭和史はるか目にかすみ

道連れは後世大事にするつもり

信じてる神と舵取る父の舟

神ならぬ身にはやっぱりボランティア

おだやかに舵取る父は無位無官

鳥取市 鈴木一弘

スコップを握り復興ひと掬い

清流に石投げてみる喜寿の岸

ゴキブリは貪欲だから自滅する

ほどほどに磨いておればでぬ地金

思ひ出は一期一会の簞に満ち

鳥取市 横田春名

老いていく栗はさんだ本が増え

メダカまで絶滅種とは悲しいな

古漬けも老いもいい味にじみ出す

沈黙の背中やんわり手を添える

すれ違う息子他人の顔のまま

鳥取市 岸本宏章

鳥取の地名猛暑のたび売れる

酒量にも限界下戸は下戸でよし

苦労性やつぱり向かい風が好き

舵取りが甘い創業家の社長

季承晩ラインのことは忘れない

鳥取市 夏目一粹

宝くじ勝ったことないのに嵌まる

八勝をすれば七敗まで許す

男は辛いなんて女も同じこと

枯れ果てた亡母の涙を知っている

惜しまれる人になりたく善を積む

鳥取市 中村金祥

就活へ真剣勝負する覚悟

乱立へ民の心がまた離れ

振り子時計喜怒哀楽を忘れさせ

草刈りの合間にナスやトマト取る

スマホ繰る自分自分でないみたい

鳥取市 福西茶子

手料理も掃除も苦手だが主婦だ

角のないカーブミラーの顔が好き

二日月きょうのわたしを映すよう

原発の賛否軽々しく言えぬ

百均の器に薔薇が妥協せぬ

鳥取市 深澤千恵子

お互いの弱点知って縮む距離

勿体ない言ってぜいたく避けている

連れている犬よりマナー悪い人

節電で脱原発へ舵を切る

地図にない道ほど行ってみたくなる

鳥取市 有 沢 せつ子

猛暑でも三食ぬかりなく食べる
夏の花押し退け秋の花が咲く
この夏は西瓜いっぱい頂いた
敬老会八十までは休みます
炎天に世話なく咲いた藤袴

鳥取市 池 原 天 馬

台風前燕飛び立ち村静か
林立すビルの色は墓地に見え
災害は科学の進歩チェックする
信じられない孫は言うけど経験だ
失敗は成功のもと俺は別

鳥取市 永 原 昌 鼓

なつかしい顔を見たさにペダル漕ぐ
誕生日せめて赤飯チンをする
招かざる老化どんどん追って来る
へこたれておれぬ介護はまだ続く
まだともう上手に使う老いの知恵

鳥取市 池 澤 大 鯨

脳分解埋蔵量を調べたい
分解掃除しても部品が不足がち
人間ドック調査しきれぬこと多し
日本酒がやっぱり俺の性に合う
ときどきは日本人で着物きる

鳥取市 高 浜 勇

ペアの朱鷺子育て立派耳痛い
列島に住めなくなるぞ再稼動
ズケズケと忠告されるありがたさ
自分色なくてふらふら目移りす
醜いが言い訳だけはやつておく

鳥取市 中 宇 地 秀 四

真実は心の奥にかくれんぼ
想い出を涙に溶いたいぶし銀
正論は桐箱に入れ床の間に
おだやかな妻のリズムで波立たず
その昔指切りをした女に会う

鳥取市 石 谷 美 恵 子

草の実は風のいたずら待っている
アドバイスして後始末して帰る
お若いといつもびつくりしてあげる
雲は流れて逢いたい人も疎遠がち
今日よりは若い日はない頑張ろう

鳥取市 齊 尾 くにこ

背伸びして手につかめないものの数
呑み込んだ拳がパーもチョキもする
タイミングなくした頃に出る涙
愛された記憶に染まっている夜
劣等感ボレロとともにやつてくる

チラシの白い裏は私のノートです
鳥取県 深田 久

炊飯器私の癖を知っている
豊作のお米神様召し上られ
猛暑日を思い出してる雪の朝
一人つ子寂しさ親は気がつかぬ

鳥取県 山本 正光

精一杯ひらいた花に嘘がない
初生りの蜜柑と出来を語り合う
竹島が手玉にされているようだ
生かされた人が汚れている地球
逃げ場ないマグマの上で暮らしてる

鳥取県 細田 裕花

脳細胞瘦せないように夢食べる
未来図の卵の中の突然変異
スコップを突き刺しておく無人島
玉のかんざしたおやかに咲き秋匂う
ストレスを発散しようデモ参加

鳥取県 岩崎 和子

携帯もなくて拙い筆を取る
この暑さ過ぎし公園歩く夢
添って今やつとほめられ指動く
読書中ふと眼鏡置き拍手する
咳をして自己主張する夫と居る

咲く美散る美教えてくれる花であり
自分史へ喜怒哀楽の詩を積む
鳥取県 西谷 悦子

甘え許さない自然についてゆく
わたくしに足りない色が増えてゆく
風の声聴き分けている耳である

鳥取県 松川 行男

冷蔵庫賞味期限で叫んでる
残暑にもビールの友がまだ欲しい
歌えない喋れないからテレビ見る
聞いてから嬉し涙を飲みこんで
納涼祭稲穂も垂れる月明かり

鳥取県 竹信 照彦

漫画王国通る汽車駅にも漫画
魚釣りがてらに水木ロード行く
コナンの街隣の町だがやや淋し
昔から読書の中に漫画無し
いつの間にか漫画がアート権を得た

鳥取県 山下 節子

折々を百面相でのり切った
過去悔いることより明日を考えよ
職退いて庭の草取りまかされる
伝統芸神楽面付けなりきれる
雑草の花精一杯の自己主張

倉吉市 山中康子

相當な覚悟で挑む目の手術
くもりから抜け出たような青い空
またこれで一山越えて欲が出る
癒えた目を疲れぬように小出しする
相棒の気持ばかり重んじる

倉吉市 猪川由美子

どんな鍵なら君の心が開きますか
メダル最多でパレード各地盛り上る
予防接種素直に受けて病得る
エッ組閣アイドル界もやっており
一匹狼じつは不器用シャイなだけ

倉吉市 山本玲子

長い目で見てやれませんか八十路坂
この里が好きで長居をして仕舞う
芋煮会クレーンで鍋備え付け
勿体ないもつたいないで激太り
おいしいね言葉に弾む皿洗い

米子市 竹村紀の治

お帰りと冷蔵庫から呼ぶビール
酒控え副菜多くなつて無理
お先にと奥歯が暇乞いに来た
地ビールでふる里色に染められる
敬老の日自分にエール贈ります

米子市 高田振作

まだ七十路趣味も笑いも満開だ
ゴミ仕分けカラス上手にやってます
本物のビールやつぱり旨かった
秋ですか読書食欲縁がない
ドアチェーンの隙間で話すおことわり

米子市 中原章子

朝一番量る体重笑顔出る
先が見えもつたいなさが薄れゆく
頑張れと言わず気楽にいけと言う
若かりし写真お互い魅力的
顔向けぬ医者の中に話しかけ

米子市 後藤美恵子

早ばやのバーゲン季節急がせる
バス間引かれ動脈硬化おこす村
爪のびるまるで横着なじること
オアシスを求めるように友集う
理性一つ薬や毒に化ける酒

米子市 成田雨奇

名も知らぬ虫が鳴き出す秋だなあ
目覚しが鳴る前に起きい朝だ
これからが大事なところ黙つとれ
何もしないあれが一番偉い人
無防備に生きてあやういもの知らず

米子市 後藤 宏之

さだまさし亭主関白歌詞直す

飼犬におどけていないいいないバー

人様の評価ばかりが気になって

雑草が咲きほこる花見て笑う

ひげをそり風呂に入って同期会

松江市 松本文子

猛暑乗り切り陽焼けした顔が寄る

賑やかな人の隣で飲んでいる

クロスカントリー孫は元氣に出て行った

三人寄って姦しく生きている

痩せ我慢だった淋しい送り盆

松江市 三島 淞丘

折れそうな心支える妻の杖

酒あればシャンソンもよしジャズもよし

核心に触れないままの長電話

助手席の妻の指図でひた走る

出雲路を夏と秋とがすれ違う

松江市 川本 畔

宍道湖が考案をした大夕日

佗しさを演じています秋の影

いたずらをする子も遠く天高し

遅咲きの向日葵うつ向いた風情

入道雲にまたさらわれるかき氷

松江市 小川 注湖

雨を待つ熱中症の野菜たち

遊園地ぶらんこ揺れてさようなら

新卒の靴のちび方褒められる

町内地図交番隣に在る余裕

敵味方中間派まだ動かない

松江市 松本 知恵子

乳母車やさしくなったお日さまと

五千歩を歩き回ってふっ切れぬ

ゲリラ雨降って消したい胸の内

拡げてはならぬ翼は胸の底

のらのらのリズムに合わせ母と居る

松江市 錦織 禮子

蜷舟白い湖面は活気ずく

暑さにも負けじと日ごと咲くむくげ

懐しの邦画昭和に浸りきる

向き不向きあつてバランスなのかなあ

気どらない店創業時から知っている

出雲市 竹治 ちかし

たんぽぽも私も生きている宇宙

片付けをせねばせねばと過ぎる日々

辛いけど生きて楽しいことに会う

若い二人日に三合の欲で生き

私の辞書大正が消えた夏

出雲市 伊藤玲子

赤トンボガイドの如く前をゆく
従姉妹会秋の味覚と輪が弾む
この星に生きて感謝の陽よ雨よ
日の丸の揚った空は美しい
エッサヤッサ一途に歩き八十年

出雲市 富田蘭水

しっかりと稲佐の浜で裸する
八十路いく感謝と別に嘘のよう
酷暑には熱いお茶など向いている
竹島を巡り日本肚強く
真実はどうあれ事件動かない

出雲市 小白金房子

縄張りをもたぬ上空雁渡る
金で済む話きいてた昼の月
借景の滝に佇む秋の風
流木の温み菩薩へ手を合わす
出稼ぎの父をむかえる土間の風

出雲市 多久和敬子

亡母の部屋覗くと母の匂いする
姉妹会腹の底から大笑い
夏バテもゴーヤ料理でグッドバイ
今日もまた不携帯だと責められる
子や孫を集め自慢の西瓜切り

出雲市 岸桂子

指を痛めて指より重いもの知らず
手の皺にわが遍歴が浮いている
目の前の他人の土地に柿たわわ
どろ沼に露を宿して蓮の花
水うましこれが生きてる証かも

島根県 伊藤寿美

やまなみを越えて歩いてきた希望
ときめきのページに挟む花葉
力にはなれず一緒に泣いただけ
ジープの穴イマジンを聴いている
鱗雲人情嘶聞かそうか

美作市 大石あすなろ

いつだって母は平和の旗を振る
酒代を削ると妻が手を叩く
一步出るその決断にまだ迷う
哀歓を乗せて記憶の貨車が行く
言い分を聞いてまとめる床柱

竹原市 岩本笑子

氷ガリガリ夏を乗り切る妻である
猛暑続くとしても赤いトマト達
決算を終えてまあるい月である
アメリカからメール免許を取りました
しっかりと食べてしっかりと薬飲む

竹原市 石原 淑子

せめぎあい入道雲の勝ちらしい
赤トンボ秋の真ん真ん中に佇つ
すぐそこと聴いて来たのに行き着かぬ
コスモスの揺れて笑顔の姉をみた
菊日和弾むもの有り日日新た

府中市 藤岡 ヒデコ

食欲を促すための缶ビール
横着なわたしで嫁は忙しい
涼風にやつと寝不足取り戻す
遅すぎる秋がやる気をつれて来る
虫の声涼しく聞いて人心地

宇部市 平田 実男

兄のよな人を奪ったちぎれ雲
特級も二級も同じ僕の舌
百均はやはり百円だけの価値
税収の倍の予算が恐ろしい
相応の皺と白髪で丸く老い

東かがわ市 清川 玲子

書画巡りする度心洗われる
クレオパトラはどんな香りをつけて居た
香水と肌が合わないサロンプラス
サプリメント若さ戻ってくるかしら
老人の力も決して侮れぬ

東かがわ市 川崎 ひかり

清め塩明日の我身の生命など
庶民的思つたドジョウのしたたかさ
老人の愚痴がおちてる待ち合所
時効には出来ぬ思いが胸にある
秒針と一緒に目減りする生命

松山市 宮尾 みのり

人の輪にいないと不安スケジュール
打てばひびく一筆箋のお付き合ひ
引き際の美学の汗を光らせる
グーチョキパーパーばかり出す甘え癖
甘い水に寄らねば非力生きられぬ

大洲市 中居 善信

解散解散九官鳥が言っている
純真で臆病だった人が逝く
灰汁のない男が白く枯れている
人の赴へ残り時間の指を折る
あれはまだ残暑厳しい秋のこと

西予市 黒田 茂代

拍手打って境内通らせて貰う
賞品のお酒しばらく仏壇に
診察まで柳誌が読める待ち時間
アイコンタクト毎日庭先のばらと
古希半ばそろりと秋の入り口に

高知市 小川 てるみ

唐津市 山口 高明

走るのは無理と悟った避難場所
ATMのカメラへ笑顔見せておく

一族のホットニュースよ従兄弟会
避難民シミュレーションでまた威す

人の目が気になるうちは女です
幸福度測る女の目は確か
価値観の相違奥歯をかんでいる

心配の種が頬骨とがらせる
今も尚ゴーストタウンチエルノブイリ
平成のおんな鍋釜さげませぬ

高知県 小澤 幸泉

唐津市 樋口 輝夫

酒一升置いて電話の友を待つ

前科ある南海トラフまず避難（死者三十二万とは）
真つさらの門標そつと撫でてみる（韓国領 独島、大統領）

愚痴ひとつ言わぬ夫の眼が恐い
すずやかなまなざし苦勞の峠越え

国旗略奪尖閣島で熱くなり（犯人を英雄視）
日朝会談いよいよ埒が明かぬなり（拉致問題）

ふりあげたこぶし笑顔で肩すかし
運命の坂乗り越えよう車いす

電動自転車か喘いで登る八十路坂

唐津市 井上 勝視

熊本県 岩切 康子

紙オムツ思いたくない卒寿です
矢印の先がなかなか描けない

少々は苦しいけれど腸検査
先生を真似て唇火傷した

自分史を辿れば悔いの海に着く
寒卵に母の命を賭けている

仏像の本を戴きこれからに
無料券頂き夢を膨らます

物思い線香花火燃え尽きる

倅せが続き血圧安定す

唐津市 坂本 蜂朗

（前月分）東大阪市 米田 水昇

青春の夢がむしやらに組む足場

オリンピックにあやかりバラの小たば買う

昨日より前に境界線を引く
浜風の中大声でプロボース

夜おきて昼は寝ている気ままな日
孫十歳持てる力がほの見える

転落の元を辿れば無礼講
上辺ばかりの友は散り散り

送迎の車で憩うデイサービス
大雷日本列島喝入る

川柳塔の

川柳讃歌

95

木津川 計

オバチャンですオバハンなんて言わないで

大久保 眞澄

「はん」と「さん」に区別がある。「あのひとと三味線のおっしょ（お師匠）はんでんねん」に敬意はないが、弟子は師匠を立てるから「おっしょさん」と呼ぶ。

「芹屋の伯母様」京都の叔母さん「大阪のオバハン」の違い分けたが、眞澄さんは奈良のお人だから「奈良のオバチャン」と呼ばれた。が、「大阪のオバチャン」となると、下品で厚かましく喋り倒す、かなんなもう、と言いたい女性。都市性の違いである。

だんだんとそんなもんやが増えてくる

江見 見清

「朝夕楽になったねえ」と小学生に言われたら、そら何を言うねん。あるいは「それが人生というもんやないですか」と二十代に説かれたら、なにをござかしい、となる。年相応のものの言いがある。男の中年には「どんなもんや」の見栄や自負があるが、「そ

んなもんや」を口にしたら始めたら、見清さん同様、僕も厭がられの年齢である。と言うて、「てなもんや三度笠」の旅にも出られず。そんなもんや世代。はつらいばかり。

妻と二人しみじみ夕刊の薄さ

柴原 道夫

大著「麻生路郎読本」編集の主軸だった道夫さん宅の愛猫が家出したのである。山ほど蓄えている路郎の逸話を語りもやらず、薄い夕刊を読んだあとの所在なさ、しみじみ孤独を覚えるというのである。

錢であった猫の不在に、ぱっくり空いた夫婦の距離と寂寥をとらえて秀逸。道夫さんは高校の、俳人・杉田久女の夫は中学の教師だった。道夫夫人を察しながら久女も思う。

足袋つぐやノラともならず教師妻（久女）

コンビニを出ると人生闇ばかり

牛尾 緑良

コンビニは二十四時間開いている。夜、買い物を買って外へ出るとまっ暗、では句にならない。人生と重ね合わせたから意味を持った。鶴田浩二の「傷だらけの人生」は極道の述懐だったが、事実を衝いてもいた。「今の世の中、右も左も真つ暗闇じゃござんせんか」。

極道の対極で小林多喜二は生きた。春を

ひさぐ田口たきを励まして、「闇があるから光がある。そして闇から出てきた人こそ、一番ほんとうに光の有難さが分るんだ」と。

政治家にするには惜しい人格者

大隅 克博

すべての政治家とは言わないが、あらかたを撃つて克博さんは痛烈である。

人格者だから政治家であるべき、が当節の何という軽さと破廉恥。フランスの政治家・クレマンソーは、「あなたの知っている最悪の政治家は？」と聞かれ、「さよう、最悪の政治家を決めるのは実にむづかしい。これこそ最悪と思ったとたん、もっと悪いやつが必ず出てくる」。いわんや日本においてをや。

成績順いつも下から名を探す

足立 茂

蹴落とすための競争社会になじめなかった。ゴマすりのうまい奴に呆れてばかりいた。倒れて傷つく後輩を気づかった。体制側をよしと思えず、在野精神の旗の下に身を寄せた。多数派より少数派の誠実さに心を打たれた。要領は悪く、上司の覚えめでたかう苦もなく、査定は下にな下がつた。二次会に誘われること決してなく、いつも一人で帰る、そんなミスターXに僕は加担する。

（上方芸能誌発行人）

自選集

小島 蘭 幸

仁 部 四 郎

みずゝ展みんなやさしい眉になる
負けておくことだ言わせておくことだ
注連縄を張るためだけにある脚立
おじいちゃんになった犬の献立表ですか
午睡しておく 忙しくなりそうだ

土 橋 螢

波多野 五楽庵

霧晴れて慈悲心鳥の鳴く峠
貧しさの穴を大きくするばかり
二階から知らぬ男が降りてくる
勝つための大和魂金メダル
歳月を笑い話で語り継ぐ

西 出 楓 楽

林 瑞 枝

本心はマナーモードにしておこう
人生のあちらこちらに水溜り
向田邦子開き昭和に会いにゆく
ケチンボとエコを一緒にする勿れ
富士山もトラフもどうかお静かに

割り勘と酔った課長が失言す
割り勘の女子会トラが隠れてた
割り勘に締めを入れているウーロン茶
寺の金先ずは均等割りを決め
割り勘の精神なのだ消費税
螢火や僻地住まいの教師かな
紫苑咲き静かに今日も暮れてゆく
ちちははと住んだ道あり山があり
それとなく人と別れて川魚
人知れず咲く野の花で蝶蜻蛉
ゴージャスな気分で仲の良い喫茶
手を合わすと不思議に飢える仏
憧れの今もまぼろしの原節子
忠霊塔の兵整列す葱坊主
ご先祖がひらりと馬に雲の中

前 たもつ

ダイジョウブ

八木千代

列島広し豪雨の被害水不足
かき混ぜて時々脳の錆をとる
弟の元気に譲る登山靴
自転車で医者の子をやる元氣
神さまが造った五体不要なし

政岡 未延子

八十田 洞庵

強がりもここまで喜寿になったから
私を飾ってみてもお年寄り
誕生日嬉しくないがお辞儀する
風紋のひとつに私らしい顔
一步一步老いへと向かう時刻表

三宅 保州

両川 洋々

ガンパロー日本耳に心地良い
測りたい草食系の骨密度
バリアフリー敷居は低い方が良い
笑つてる遺影を泣きながら選ぶ
戸籍簿にそんなまさが載っている

宮西 弥生

板尾 岳人

雲一枚剥がすと揺れる秋の章
逆転劇必ず来る摩訶不思議
暑くても白いごはんは欠かせない
極楽も地獄も過密して行けず
心臓に悪い深夜の救急車

ありがちなことで旅には俄雨
ダイジョウブわたしの傘はワンタッチ
半開きのまま骨折をした傘も
土砂降りをくぐった傘を干している
旅千里もしもの傘を杖として
保育器で眠る天使のさわやかさ
官庁街権利の牙城立ち並ぶ
嫁ぐ娘のあしたは居ない星月夜
もつともらしく探り入れている占い師
手作りの人形だった母子家庭
ミスマツチああ原発は人災だ
男一匹リストラ案に呑みこまれ
あの日から海と向き合うのが恐い
もがいても輪廻の渦が抜け切れぬ
目口鼻配列ミスの妻である
あなたへ肉じゃが炊いて待ってます
あなたへ月はとっても綺麗です
あなたへ陶治と言う意味有がとう
あなたへ下手な漢字で有難う
あなたへ陳者元氣ですか敬具

奥田みつ子
ドキドキとさせてそのまま消えた人

大切な人の笑顔が浮かばない

あの雲は彼が怒った時の顔

のほほんと今日も命の無駄遣い

今更ともこれからだとも思う歳

河井庸佑

反対意見出して相手の出方見る

最悪を仮の話として論ず

過信したばかりに嵌まる落とし穴

平常心揺れてる隙を突いてくる

手の内は読めたが暖気にも出さず

川上大輪

秋ですね影も太ってきたようだ

いい味を出しているのは皺の数

家事都合ですかバチンコしてるのも

とんがった心を削る写経筆

所在地は騙し絵の中永田町

木村あきら

やすらぎの心を呉れる石地蔵

セールスが開けると喋り出すカバン

旗日には日の丸老いの意地を見せ

俺だつて猫が帰りを待っている

雲一つない碧空へ万歩計

小西雄々

秋最中今日も歌った赤とんぼ

灰を撒く良い爺さんを見習おう

雨の日は健康の本読んでいる

タンゴならまだ踊れるが酒が要る

スマツシュが効いたか彼女振り向いた

斉藤 効

この土の道しか知らぬ足の裏

種なしの柿にしたのは人間だ

りんご樹の一本ずつが抱く宇宙

一滴の水一粒の芽となりぬ

シャガールの青にいのちを遊ばせる

塩満 敏

年末だばちばち賀状の準備しなければ

ありがたい傘寿を一つ越えました

アメリカと財閥の代理する維新党

来年はきつと墓参りしたいもの

大阪に川柳図書館出来た夢

新家完司

苦さいろいろ雨の味風の味

髪の毛はどうしたのかと言うカラス

墓墓墓で埋まっている墓場

お互いに慰め合っているお墓

竹島のことを思うと気が滅入る

第133回 大阪川柳の会

日時 12月3日(月) 午後5時開場・6時締切
会場 ホテルコムズ大阪 地下1階アーバンホール
宿題と選者(各題2句・席題なし)
△「柄」 平山 繁夫 △「投げる」 森中恵美子
△「シフル」 河内 天笑 △「願う」 磯野いさむ
会費 1000円 欠席投句 12月1日まで 本田智彦宛
〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4-706

する事がせわしくなつて老いすむ
泣き出してまた困らせる知恵がつき
声だけは達者卒寿の風が吹く
よたよたとしても句には現れぬ
あの頃の元気が夢の中に出る

日々好日命日はアンコ餅
許される範囲でナビと喜寿卒寿
八百年大修復の智恩院
三寧坂生八つ橋が好きと言う
東屋がありラッキーなゲリラ雨

ふる里は山崩れ無し津波なし
オリンピック終り地球は秋になる
無死満塁まだ切札が二枚ある
父の汗晩酌一本あればよし
一と雨が無くして仕事がかどらぬ

恒松町紅

津守柳伸

遠山可住

温故知新

『清水白柳遺句集』より

マイペース他人が言えば狂気じみ
小商い方言でよいものを売り
新聞を敷けば招待席が出来
鞆も置かずに友達の不平言う
万葉の言葉で口説く面白さ
麻雀に煙草の灰の落ちどころ
タクシーを遠くで降りて借りにくる
上方をはめる男の稲荷ずし
文人墨客として木枯も金にする
梯子段上るに女横になり
お悔みをしびれ切らしたままで受け
子を抱いて彼岸の雪に濡れんとす
雑踏の二階三味など弾いて居る
声ふつと途切れて木立通り抜け
素通りは出来ぬ墓だけある故郷
ダブル着て折らずに入れる財布持つ
病室へ桜はげますように咲く
ゼロ二つなけりゃ買えるがなと思ひ



西出楓楽選

高槻市 田中 由美子

真ん中に鼻が座っている笑顔

紐つけて夫遊ばす守備範囲

ポケットのほころび妻を恋しがる

土曜日はゆとりの筈の塾通い

ポケットの中でゆつくり解くこぶし

思い届かぬトマトが青いまま朽ちる

岡山市 藤成 操 江

丁寧な言葉でいねい語で返す

頬杖の先にまだ咲く百日紅

負かされた言葉を溜めている袋

向き合せて話せばきつと溶け合える

遅咲きの花だと信じ水をやる

浅知恵でともかくにも生きてきた

西宮市 泉水 冴子

南海トラフ家を買うのも賭けだろう

開発はもういい列島が沈む

人間の英知も自然には勝てぬ

体力と知力もやはり要る句作

A K BにS K Eとややこしい

骨抜き魚は味気ないだろう

此の暑さ思考回路が行き止まり

去来する年月偲ぶ夕茜

鬼皮にいどみ傘寿の栗御飯

簡単だがなかなか言えぬごめんねと

鬼配りが過ぎて誤解をされている

脳味噌に欲しいと思う防腐剤

今更ながら大きかったな父の背な

浮き沈み時々浮いて良とする

お袋のにおいも添えて芋届く

筋書きのない九回裏にあるスリル

思い出せない知人と駅ですれ違う

かがやくと思つた老後まぼろしか

宇部市 高山 清子

寝屋川市 岡本 勲

横浜市 川 島 良 子

相性の合わぬ同士だよく似てる
どの顔が日本よくしてくれそうですか

期待する期待はしないマニフェスト

愛妻家だった義兄にありがとう

戒名に和尚のセンス織り込まれ

虫の音にひとり枕を濡らす夜

唐津市 北 村 松 風

蜘蛛の巣に宝石光る朝の雨

酒席抜け君と僕との三次会

故郷の訛りが主賓県人会

接待に唐津はイカの生造り

体温を越える暑さは脳もボケ

五十年初校歌聞く甲子園

富田林市 古 田 千 華

寂しさと侘しき暮る秋の入口

組板の上でひと跳ねいじらしい

面白ほどよく眠り風邪治る

農に生き土を家族といつくしみ

羨まし土と話せる人がある

紀の川市 楠 原 富 子

雷の直撃避けて借るひさし

青い実がはげて大人の仲間入り

妥協して流れ続ける妻の川

約束を守って足をすくわれる

綿菓子で過去の思い出つれてくる

足音にまだ収まらぬ怒りあり

辛抱が死語になりつつある世間

高槻市 島 居 宏

昭和史に殊に悲しい夏の雲

蝉しぐれ読経のように八月忌

二週間五輪がテレビ独り占め

シニアの誇りゆつくりと歩をはこぶ

若者に立場を譲り腰掛ける

愛情を込めて自然を描き上げる

佐賀県 真 島 久美子

嘘つきの顔で迎えに来る男

空映すばかり更地の水たまり

音信不通そんな手段もあるなんて

夏の恋あつけらんかと裏返す

口角をしつかり上げて戦おう

月明かり心の傷も売りにする

豊橋市 藤 田 千 休

全没に錆びたナイフを研ぎなおす

埋もれ火を時の流れが消していき

耳穴に備蓄している妻の愚痴

午前様脂粉の香りまず除染

稟議書に不請不請の判二つ

畔道に一人舞台の彼岸花

奈良市 前田弘恵

和歌山市 福呂秀子

ドラマでの電話のベルに惑わされ

万博の思い出写真ミニドレス

お婆さんと呼んだ店へはもう行かぬ

スピーチは短い方が場が締まり

一円が足りない為に札を出す

和歌山市 北原昭枝

追憶のドアを開けてる日記帳

うんうんと聞いて愛想をつかして

どこまでも一緒だと言う影法師

信じてる手が柔らかい秋の午後

ゆつくりとまだ回ってる夫婦独楽

和歌山市 さかたきく
(坂田喜久子改め)

ポリポリとたくあん食べる音も味

年金にもたれかかった命綱

シングルも子は鎧と知っている

コースターに冷えたグラスの汗にじむ

使い捨てのアイディアいつも持っている

和歌山市 平田元三

安い店俺が奢ると見栄を張る

久し振るむしろ濡れ度雨ぼろり

紅葉する桜が好きで行く名所

白内障手術した目に星月夜

大記録やれやれというのが本音

蟬時雨ブラームスには負けまいと

野の花の小さく可憐去り難く

変り継ぎつくつく法師秋を呼ぶ

真夏日に旗が眩しいかき氷

百日紅夏の終りをソフトにし

岩出市 村中悦男

大の字で旅の疲れをとる我が家

いい疲れ予定の仕事うまく出来

大あくび出来る我が家の温かさ

コンビニの範囲で生きる時もある

蜂蜜に花の香りがとけている

田辺市 小川イセ

朝顔が笑って元氣くれました

生きてきた喜怒哀楽を道連れに

久びさの雨に野菜の深呼吸

いつの日か旅立つための羽繕い

鍬洗うがんばったねと日が沈む

和歌山県 森下よりこ

七十の妹いまも甘え過ぎ

オリンピックいつもと違う夏に変え

汗止めのタオルを腹に巻いて野良

成せばなる老人力を育てよう

膝に止まったトンボとしばし時忘れ

鳥取市 坂本 とも湖

背に腹は変えられません再稼働
いつの世も戦争はイヤ核はイヤ
殺生な宇宙のゴミに地球泣く
夏バテの素肌エステで生き返り
茄子の肌あんたもエステしたのかい

鳥取市 津村 律子

オーバーな宣伝文句見るテレビ
効くのかなグルコサミンにコラーゲン
明治から平成の道百二年
学ぶこといっぱいもらう百二歳
百二歳大往生の模範生

倉吉市 岡崎 美知江

自己紹介ついプライドが先に出る
丸書いて三角書いて力抜く
方便もつもれば都合悪くなる
寝不足という母昼間よく寝てる
肩を抱くやさしい腕にほれました

倉吉市 中村 毅

田舎でも世話を焼く人減るばかり
仏にも神にも見放されたくじ
おじいさん他人に呼ばれ知らん顔
記念日は偶数月の十五日
叩かれる前に飛び立つ癩な蠅

米子市 小野 鶴子

盆行事終えし安堵の休み
軽くて小さな包み似合う歳
海鳴りの宿で友等と蟹づくし
老いらくのハート少しの火を残す
年老いて否応なしの傘の下

米子市 野川 宣子

平凡な暮らしにあつた裏事情
今日を大事にのらりくらりと遊んでる
五欲抱えて遊び足りない手も足も
女滝雄滝互い引き立て対になる
飛沫浴び冷気頂く滝の前

鳥取県 飯野 菖子

我慢して残した金が役に立つ
音をたて後ろへ回る蚊の憎さ
溺れない山河の道を生きてきた
何もかも投げてしまえばなお老いる
影法師スリムな余生作ろうよ

鳥取県 大塚 美代子

一日の区切りに日記を書いておく
一仕事終えてひとまずお茶を入れ
一区切り読んで付箋を挟み入れ
事件だあーごきぶり出たと娘の悲鳴
サイレンの音にギクツと胸騒ぎ

鳥取県 下田 茂登子

三食にビールも付いて老い二人
秀句には届かぬ句でも命がけ
冷房なし自然の風が来る過疎地
体力はないが智恵なら貸す八十路
認知テスト満点だった酒を注ぐ

鳥取県 橋谷 静江

生きるにも人の温みを噛みしめる
孫の顔見れば心も穏やかに
夏バテを元気に誘う青野菜
夫婦して欠点見付け仲直り
人生のドラマ泣いたり笑ったり

鳥取県 吉野 いさお

二次会で男の器量見る人事
独り居は座り羅漢で本に酒
間を置いて笑いを誘う粋な洒落
驕っても何れは箸で拾う骨
矩越えた南瓜の蔓を連れ戻す

松江市 相見 柳歩

空つばになるまで恋の話する
大発見粒と粒とをつなぐ粒
迷ったら仏に近いほう選ぶ
急がないやがて来世はやつて来る
「ごめんね」と言えば「ごめんね」みすゞ咲く

松江市 武島 ちよえ

まだ女朝の鏡を拭いている
役果たしゴーヤの棚も傾いて
晴れる日があるから耐える雨風
溝一つ跨ぐに勇氣要る歩幅
薬草を雑草などと呼ばないで

松江市 藤井 寿代

バラの種拾つてからの偏頭痛
疑問符をつけたまま熟れてゆく桃
大切なつつかい棒が疎ましい
転んだ事も気付かないあわだち草
秋夜長光源氏に首つたけ

安来市 原 煩惱児

メダル手に輝いているいい笑顔
遅しい大和撫子底力
ロンドンの大和男子はしなやかに
北島がリレーで見せた男意気
日本の力夜昼テレビ前

岡山市 工藤 千代子

秋なのに今も引きずる言葉尻
つつかい棒ください背中寒いの
母というページ女という葉
坂道の途中何度も飲む薬
わたくしの翼が落ちている厨

岡山市 前田 恵美子

過去形で話するのはやめました
会いたいと思える人を見つけたよ
手の上で踊っていたい時もあり
蒸し暑い夜も虫の音聞こえてる
さぐり掘りもうサツマイモ入ってる

瀬戸内市 東 楨 ますみ

三面鏡の中で記憶も丸くなる
しゃぼん割れ指の先から秋になる
仲間には元氣なふりをして見せる
自然体風の噂はやり過ごす
補聴器へ噂話がよう溜まる

広島市 岸 本 清

ライバルがいるとテキパキ振る舞える
終末をずばらに過す無精ひげ
終末は孫が笑いを提げて来る
終末は小原庄助そのまんま
派手な服着ると背筋がびんと伸び

竹原市 國 實 力

消しゴムも使わず消えたマニフェスト
次の世の話そこまで暇じゃない
倅せな暮し引き算での暮し
褒められて三度も持つて行くオクラ
脳バッテリー売ってるお店ないかしら

竹原市 土 井 輝 恵

暗いニュースに合わせた声のアナウンサー
倅せのお面被ってクラス会
美容院だけは家計簿振り向かぬ
長老の体験談が胸を打つ
機械音ばかりで建った一戸建

竹原市 若 年 幸 子

すり傷を撫でられてから不眠症
搦手はあくまでソフト優しい
オレオレがほろつとさせる事を言う
地鎮祭夢と希望の鍬を入れ
日本の憂基地と竹島尖閣と

阿波市 三 浦 千 津 子

控え目な言葉遣いに深い味
限りある日々へ合わしている命
物差しの違いを埋めてゆく絆
喉越しのビールで癒す今日の汗
恋序曲愛の怖さはまだ知らぬ

松山市 神 野 きつこ

影伸びて独り縁側物思い
雨の日は思い切り過去広げてる
ドラマ見てテレビが来た日思い出す
湿原という天国に集う鳥
暗闇で指折っている更年期

今治市 渡邊 伊津志

芸のある人はテレビの外に居り
見栄とけち上手に捌くエコ暮らし
火の車補助輪だけで来た走り
七難を隠し通した笑い皺
服らんだ自慢話の有頂天

四国中央市 篠原 久

躰いた小石お前は悪くない
一日が無言で暮れた妻の乱
キザな男に針千本のプレゼント
父の貨車車輪とどころころ錆
秋茄子の浅漬け嫁の大好物

香南市 桑名 孝雄

大阪の票に託した日本丸
東京五輪反対五割とはいかに
長生きの怖さに怯え切っている
人生八十年もういいような気もするが
この辺で散れば拍手の二つ三つ

宿毛市 増田 純子

しんしんと淋しがり屋に星が降る
底抜けに笑って鬱を追い払う
生きてゆくまざかよもやを潜り抜け
やがて過去いつか過去だと食いしぼる
にんげんになれるいつばい泣く笑う

福岡県 本田 さくら

なすが来る又なすが来る今が旬
亡父亡母は元気かでんわしてみたい
動物の赤ちゃんたちに癒やされる
十ヶ月孫の未来がキラキラと
日本産と思いつたが中国か

シドニー 坂上 のり子

ストレスと言う見えぬ痛みに耐えてる身
邪魔されず花と語って今日も暮れ
わが道を行く猫は気ままな自閉症
友人と言う語が秘めるセンチティブ
生活の目処が立つのと問う離婚

弘前市 肥後 和香子

月下美人そなたが放つ宇宙感
いつだって男は夢の途中らしい
白桃の心がわかる孫といて
句を作る時は自然に正座です
裏道も悪くはないねねぶたの夜

塩竈市 木田 比呂朗

仕舞湯で流しきれない今日の鬱
晩酌が今夜もぐちに流れ着く
昔を語るジョニ黒のハイボール
謀反かな言うこと聞かぬ削除キー
我が家でも予算執行政府並み

福島県 七ツ森 客 山

鰻焼く前を素通り出来ません
群生をしてからハーブ我がままに
レシビなど知らぬ炒めが丁度よい
ギブアップすれば気楽な炎天下
飲み友の軽い友情それなりに

東京都 高岡 弥生

負けないよ何でも来いよ我が人生
泣いてても鏡の前で微笑んで
私でも世界に一つだけの花
今日もまた猛暑が続く夏元氣
いいところ悪い所も私なの

相模原市 赤木 妙子

なでしことコートを駆けた熱帯夜
ロンドンも終り落語で夜が更ける
蟬の骸拾い大きな木の下へ
またあした夕日よ今日をありがとう
亡母の団扇か風が一筋通り抜け

富山市 有澤 嘉晃

左手の指輪外して飲みに行く
手加減をしたな年寄りだと見たな
陰口が怖くて席を外せない
あらぬこと口にするから眠れない
心配をさせてる方がよく眠る

静岡市 渡辺 芳子

何も彼も解り合う幸同窓会
八十三歳歌う校歌の若き声
口だけは達者つきせぬ笑い声
一年後逢う約束は不安定
動物のまねして欲しい親子愛

熱海市 三谷 圭角

珍しい湾一ぱいの虹の橋
まあまあと冷えたおしぼり生きかえる
お帰りと迎えて呉れる幸せよ
メダリストお手柄半分縁の下
巧言の不仁が仕切るこの世かな

江南市 脇田 雅美

切手貼る別れの予感斜め向き
揺れ具合眠気を誘うハンモック
花の向き朝日を浴びて真つ直ぐに
ユニホームに職人氣質滲みでる
ボーリング二千メートル町おこし

京都市 清水 英旺

盆に祈る新仏の君安らかに
迎え火を焚いているから会いに来い
蚊も言い分あろうがゆるせ必殺打
熱帯夜狂気じみてる赤い月
人生を達観なんて柄じやない

大阪市 浅井公平

大阪市 前川善之

呑みたさを辛抱出来た今日は勝ち

人のこと我が身となれば目がかわる

命日は後悔する日親不孝

川柳を始めてボケが逃げ出した

地下鉄は若者達のメール室

大阪市 柴本 ばつは

これからはゆらゆら揺れて甘えとこ

あしたの米ちゃんとりあります大丈夫

ちちははの半分ずつをありがとう

正論を吐いて仲間に疎まれる

常識で迫る方ですしんどそう

大阪市 高杉 力

恋に恋していた頃の日記帳

たこやきが焼ける間に友となり

百均が引つ越してきた台所

羊羹もハムチャーシューも端が好き

腕ひとつ組まず歩いた御堂筋

大阪市 栃尾 奏子

マイペース涼しい顔で最後尾

良いご縁でした優しい雨でした

姉妹みな並べて母の落とし蓋

父帰宅キリリと居間がかしこまる

一秒で生まれ変わった深呼吸

負けまいと気負えば負ける勝負事

メダルには努力の汗が染めている

原発と命の重さ計れまい

しっかりと食べて熱中症に勝つ

笑顔見て福も笑顔で寄ってくる

大阪市 松田 聰

不景気にすっかりなじむ日本丸

賞味期限過ぎてはいるが食べれます

マナー違反しても便利さ優先す

携帯で大きな事故が起きそうな

飼主と同じ顔しているペット

池田市 上山 堅坊

ストレスを溜めないための酒二合

ITの進化へ傘寿の汗をかく

往年の錆を拭きとる老いの恋

仏壇へ育てる 小さなひまわり

ぼろいのか世襲の多い議員さん

貝塚市 吉道 あかね

バーゲンにいつも財布が踊り出す

たくさんの恥がおとなにしてくれる

妥協する耳はいつでも聞き流す

喪服揚げ集うばかりの本籍地

いい音色背筋をピンと張っている

河内長野市 大島 友子

山ガール無理だと膝が大笑い
ご親切にでもお節介りません
薄絹を着せてはんなり言う本音
白白と夜が明けホッと一眠り
はなむけに言葉は一つ幸せに

河内長野市 山本 エミ

節約で扇子の風のお裾分け
金貸して不愉快そうに返されて
人生の裏を覗いて顔洗う
つまようじ一本くわえ出る屋台
狭き門願ひ叶うと要る学費

岸和田市 中岡 香代

ドタキャンでカップル席に独り居る
結論を急ぎむなしく蟻地獄
ポジティブでドライだけどすぐに泣く
ボクの脳どこかのネジが緩んでる
騒ぐ子の声より親の怒る声

岸和田市 増田 隆昭

祝いもの解く包みに期待の目
孫の宿題見てあげたいが手が出ない
朝と夕身長の差が一糶
プロ野球ない日は街の温泉へ
定退はしてもローンはまだ消えぬ

岸和田市 宮野 みつ江

真夏日の中にそれでも彼岸花
名も知らぬ野の花一輪仏前へ
白日夢亡夫亡父母会いにくる
読経よりシャンソン流し秋彼岸
カフェオーレを熱くし亡夫と朝食を

堺市 近藤 治子

シンプルな暮らし生き生きキビキビと
浅はかな親切心が宙に浮く
しっかりと顔見て交わすごあいさつ
しあわせ度考え方で誤差がでる
はつきりとノーと言えずに胃が痛む

堺市 大和 峯二

廃炉まで気が遠くなる時と金
国民の目線が欲しいマスメディア
混迷を生きぬく力子や孫へ
年金の暮らしに慣れてこじんまり
この国を州の如くに無理を言い

高槻市 原 洋志

すり切れた靴下故郷ばかり向く
朝の窓開けて青空まず食べる
棚ボタはいつもとなりに落ちてくる
絵に描いた餅で一食我慢する
デジタルに一周遅れ気にならず

豊中市 荒巻 夢

オリンピック感動しては昼寝する
わが心引つ張り出して土用干し
やり水にあわて跳び出るバツタの子
ふるさとの家も絶え果て蟬しぐれ
大夕立生きる不安を告げて去る

豊中市 池田 純子

カミナリが鳴つて思うは父の膝
あんなならやれるとヨイショ妻の技
素麺も黒帯しめて位上げ
メールにはクセ字達筆ありません
裏庭のススキ名月待つている

豊中市 貝塚 正子

真夜中の秒針の音夢はこぶ
さあやろう はやくやろうで日が暮れた
育てたが心の中は計れない
幸せは無事なことだとかみしめる
初ものを先ずは仏に召しあがれ

富田林市 山野 寿之

無駄話ばかりが集う耳の奥
折鶴の背中で指を折る祈り
ライバルにオウンゴールを献上す
カーナビは恋人旅はまだ続く
萎まぬよう男はロマン膨らます

羽曳野市 藤原 大子

しよげかえる肩におかれた手の温み
弁解が頭の上を過ぎていく
口にチャック言い聞かせても出てしまう
ご縁かな今日もバツタリ顔合わす
混ざり合い紡いだ糸で四十年

東大阪市 西田 いくひろ

真実は一つ揉めると火花散る
ストレスが溜まり嫌味を口にする
若い頃時々想う古稀の坂
蛇行して生きた夫婦も恙無い
感性がプラス志向で気が若い

枚方市 松原 保

世の中は不平不満が入り乱れ
国民の生活第二この党も
パイロット不安無いかオスブレイ
新党が増々ふえてまとまらず
学者さんここは何年住めますか

藤井寺市 田付 絹枝

芋づるが御馳走だった疎開先
目を閉じて辻井ピアノに聞き惚れる
里山に虹のトンネルバス徐行
冷え込みに蹴った布団を手繰り寄せ
数万のシーサー睨むオスブレイ

箕面市 寺井柳童

アーチェリーに負けじと鉄砲百合の花

かぶと虫もらい手がない過疎の町

原発事故おろおろしてる学識者

古都散策歴女に出会う楽しみも

スカイツリー江戸が其所此所新名所

八尾市 田邊浩三

向日葵の迷路を泳ぐ夏帽子

これ以上暑くするなよ油蟬

ひぐらしが呼んでる里の母独り

電話では言い訳できぬメール打つ

朝顔もゴーヤに負けた温暖化

八尾市 前田紀雄

錆びた脳一夜漬けてクリーニング

大地震総選挙近いうちに来る

渾身の一句が抜けて鬱治る

欠氷メロン苺で迷ってる

三食を日記に綴るボケ防止

八尾市 山根妙子

玉音に伏したあの日の雲の峰

国盗りの燦る火種いつ消える

マネキンはブーツとファーで暑そうな

秋めいた風に思わずありがとう

自分宅とつさに番号出てこない

大阪府 神野千恵子

今日一日短かったと思う幸

短気だと言われる人の長つ尻

母という奥の手がある女とや

写真館頑固おやじもハイチーズ

甲子園やつぱり暑い日が似合う

大阪府 西川冷子

五感に沁む味覚三昧秋に入る

説法聞く孫も汗して盆供養

苦勞して為し遂げたもののほど貴重

不可能と言わず視点を变えてみる

案じつつ生きて同じ老いの日び

神戸市 長川哲夫

風評と気楽に過ごす老人A

思惑はフィナーレ飾る道化役

友情も途絶え秋刀魚がほろ苦い

DNA恋うふるさとに立ち帰る

遺す一句は人を待ち時を待つ

神戸市 木村忠義

生きてきた歳は財産だと思ふ

平等な時間をむだに遣うまい

戦争は語りたくないのが本音

御苦労様トイレ掃除の小母さんに

虫の音が癒やしてくれる脳疲労

神戸市 玄 番 美恵子

天性の明るさやはり運掘む
百千の思い写経へ込める筆
千鳥足月が青いと遠まわり
絵手紙の熟れてる柿に里想う
句集から温もりもらう風の彩

神戸市 能 勢 利 子

外人に教わる日本のいいところ
テレビ音誘眠剤に心地好い
観光地日中韓の人集う

きつちりと靴揃え孫褒められる
川柳から滲み出ているお人柄

尼崎市 小 池 幸 子

日の丸を背負う選手の意地の金
涼風に団扇ばたばたエコ昼寝
あいまいにまあまあですと躲してる
塩むすび日本の米にある誇り
花火師の技の競演空翔る

篠山市 佐々木 勇

すすきにも私も伸びる夢がある
群生のすすきに宿る少年期
影法師別行動は無理ですか
毎日が日本晴れです僕の家
仰ぎ見る世界の空は皆同じ

三田市 上 田 ひとみ

心配はばくばく食べてよく眠る
花が咲く鳥が訪ねるうれしい日
研究の途中なんですそつとして
それぞれに頑張っているから拍手
隅っこに座って光る人がいる

三田市 雑 賀 一 泉

点滴の粒を睨んで明日を読む
胃の中に葉いろいろ小競り合う
朝ドラを見終えるごとに老けていく
朝帰り子供達にはパパ仕事
ダメ虎に愛想尽きつつもしかして

三田市 辻 開 子

ベルト穴流した汗が結果出す
旅土産一泊なのに両の手に
歳重ね好みの色は若いまま
ダイエット猛暑の助け食細る
鳥の群れ柿の豊作先味見

宝塚市 丸 山 孔 一

古稀にして帰るふる里人も無く
あの山が俺の生い立ち知っている
外は雨守宮の子ども壁に居て
時は金思いながらも昼寝する
わざとらし折り目正しい防災服

過去は無い分かつちやいても振り向くよ
奈良市 尾 畑 なを江

家事こなすこれが私のダイエツト

迷惑はかけない主義の独り言

ここから勝負と靴を履き替える

奈良県 谷 川 憲

飼主とともに愛犬歳をとり

偽物はいくら真似ても品が無い

誤字脱字文字化けの所為には出来ず

国言葉友の電話に弾み出し

和歌山市 磯 部 義 雄

時々は他人に戻つてみたくなる

老眼が冴えてどなたも美女に見え

秋深し脂ののったイワシ雲

味噌醬油米の貸し借りする隣

和歌山市 坂 部 かずみ

シミシワに効くと信じた試供品

バーゲンで来年用を買い並べ

横になるとあらくちんと寝てしまう

入浴を終えた至福の小ビール

田辺市 大 峠 可 動

日韓の挽歌潮騒を聞きにゆく

わたしにも言葉下さい蛇いちご

大地から炎が逃げて夕闇よ

運命線無数の傷を溜めたまま

あかね空古里はもう稲を刈る

笑むだけで発言しない彼マーク

不況風生きる気力をテストする

沸点を一度下げても丸く住む

鳥取市 近 藤 秋 星

夾竹桃敗戦の日も咲いていた

夏呆けの頭修正する九月

向日葵が何か言ってるコスモスに

キャリアが長いだけでは自慢にはならぬ

倉吉市 田 中 紀美恵

極楽へは騒ぎさわいで行くつもり

妻騒ぐ先に謝りスタコラさ

場数を踏み今の自分があるような

旅の宿隣の軒寝つかれぬ

倉吉市 堀 かずこ

手術後の一步が出ないもどかしさ

ひとりでは渡りきれない戻り橋

慈悲深い仏の顔に癒される

夕暮れにとんぼ急いでどこへ行く

倉吉市 前 田 喜美子

寝不足にほのかに匂うお味噌汁

一週間でスリムになるとコマーシャル

子供よりすぎる年金高齢者

日本丸舵が多くて渦を巻く

米子市 池岡 たけし

雷が遊び心で豪雨呼ぶ
炎暑日に儚い命蟬の声
長らえてびったり合った老夫婦
言いたいがびったり閉ざす固い口

米子市 生田 寒之

売家札団地が増えて秋暑し
半額のアイスでしのご残暑です
経験のない天変にうろたえる
取り戻せ卑怯を恥じる和の心

米子市 加藤 正二

ころんだり立ち上るのもストレッチ
腰痛に勝つストレッチ一二三
石頭気楽に揉んで八十路ゆく
隣り組地震津波で甦る

米子市 田村 周子

母の目はごま化し効かぬ千里眼
儂い世より美しく生きたいな
ドライ娘我が道を行く真つ直ぐに
島問題にわかに起る利害から

米子市 見山 温子

よく遊ぶ孫の宿題気にかかる
続く猛暑やつぱり今日も冷や奴
娘の帰省婿の好物盛つてある
猛暑にも萩がゆつくり咲き出した

米子市 湯浅 久司

税金へ頓着しない愛煙家
赤トンボ暦を読んで風に乗る
盆一人葉っぱの影を見て過す
年金で暮らすこれから綱渡り

鳥取県 岡村 孝明

高気温地球の未来気にかかる
節電はよいが高価なLED
施設では日夜の介護絆生む
卒寿過ぎ健齒に謝して歯を磨く

鳥取県 加賀田 志延

山の神仏の顔も三度過ぎ
稲穂ゆれ田舎の秋は黄金持ち
青春へ瞬きをしたクラス会
寿司ネタのように岩盤浴へ寝る

鳥取県 田口 清帆

思いやり心の留守をノックする
サルスベリ盛夏に耐えて美しい
泣けばいいのにストレスをまた溜める
台風が遠回りして有難い

松江市 河西 草庵

政界の雑草の芽が伸び放題
人生のいたずらだろう切れた紐
おつむてんてん絞つて知恵がひとしずく
つむじ風いたずら好きで裾捲る

松江市 山根邦代

心から笑顔出る人やさしい目
笑顔とは若さを保つ薬かも
便りには人柄のぞく筆のあと
抜けたとこ愛嬌にしてくせらせら

出雲市 黒目英男

蝉しぐれ厭世気分吹きとばす
暑い夏梅干しが効き食進む
通り雨僕の出端をくじかれる
回り道勇気ひとつを友として

雲南市 菅田かつ子

亡母の待つ段段道をゆつくりと
思案顔しながら鴉通りすぎ
また一人ふたり降ろして終電車
俄雨急げ急げと言ったとて

岡山市 永見心咲

即座には答えられない喉仏
濁してる返事遣らずの雨が待つ
うつむいた花が従順とは言えず
今日もまた命の襷を折っている

備前市 森ふみか

団扇連れ避暑地を捜す3DK
ぬかるみが自分で撒いた水で出来
炸裂を窺っている不発弾
もの言えば雅のバケの皮がはげ

竹原市 六田半徳

リハビリー紙飛行機に願いこめ
よく笑う明るい人の顔は丸
数独の正解数字精査する
野田どじょう口一文字思考中

山口市 中前幸子

公園のブランコ満月を乗せて
スキップをしている満月のうさぎ
上弦の月に少うし物申す
原色の会話ファジーな語尾になる

大洲市 花岡順子

転んでも平気とカットバンを持ち
いさかいの後は無言の時が過ぎ
だんまりへびつくり箱を開けてやる
胸三寸納まり切らぬことがある

高知市 三谷待太郎

お互いにリフォームすれば少しもち
黒は白 赤信号は青信号
わしゃ小島海見てのんびりさせてくれ
大同も小異もつまりは村芝居

北九州市 小松紀子

弁当がうまかったよと言う息子
太陽の匂いが好きで干す布団
反論は易いが我慢だ腹をすえ
去年は出来た事出来ぬ年

佐賀市 清水園 實

暑くてもなかなかやせぬ夏生まれ

テレビ前パラリンピック涙出し

健康具組み立ておえて気力失せ

病院で障害者見て知る健康

唐津市 岩崎 實

長寿者へ市長表敬その笑顔

コンセント抜いて雷遠ざける

電話より顔を合わせて話したい

磊落な人はたしかに飲んで食う

唐津市 吉富節子

賞味期限自分で決めて薄化粧

鉦叩き当選頼む宝くじ

七光りないが家土地残しくれ

娘の手紙頑固を泣かす披露宴

山鹿市 三谷 たん吉

生きもので最低なのは人類か

人間がこの世で一番厄介者

いまに見ろトンボスズメも居なくなる

犬ネコの五倍も生きて恥ずかしい

札幌市 佐藤 登美子

ガラクタの箱は夫の玉手箱

介護の辛さ聞き役となる友として

コンバイン雄叫び上げる青い空

おしどりでいても価値観白と黒

弘前市 高森 一 吞

送り火で先祖へ想い届けます

逝くまでは二人三脚走ります

妻の留守酒と肴はたんとある

地球儀にテロの傷痕乱れとぶ

東京都 井上 つよし

ビタミン剤いろいろ飲んで夏を耐え

いそいそと老妻が出かけるおしやべり会

長つたらしい政党名のわずらわし

バス停迄行つて気が付く忘れ物

東京都 大竹 一 良

湧き水に自然に生える山葵採り

柵を忘却しての秘湯の里

甘言に知らずしらずに乘せられて

罪づくり仏にざんげ遍路旅

佐渡市 高野 不 二

自分より孫の誕生日を祝う

へそくりをこれから貯める定年後

テレビではまだ稼いでる死んだ歌手

補助金がこんな所についている

愛知県 樺 嶺 志

周辺におかしきことを見出せず

エアコンに結局敗けた扇風機

この国は政治屋だけに支配され

パソコンの画面だけ見る医者多し

八幡市 今井 万紗子

塩むすびしつかり食べてまた歩く

君と行く極楽ツアー予約する

お向かいのアンテナ家（アンテナ）に向いている

よく笑う妻の歩幅は三步先

大阪市 安藤 なつこ

子宝に恵まれすぎてくつたきた

桃太郎鬼の宝を取ったでしょ

ホンマやねん三回言うて疑われ

がんばった通知表です電気代

大阪市 太田 としお

先生方の心はみんな選挙戦

自分の身は自分で守ることにする

国民が被るしかない大赤字

ゆらゆらと年金という命綱

大阪市 岡田 元

月見酒飲めぬ付き合い団子食う

来た道をしみじみ思う夜半の月

父の背に学んで越えた八十路坂

高い物安く買ったと競い合い

大阪市 川口 とし子

里に待つ危険一杯放射能

今があるつらい時代を生きたから

脳トレで孫と競って悦に入る

三人の家持つ子等を誇りとし

大阪市 梅里 南天

太平に浮かぶ小島を人が踏み

好きなのは近い国より遠い国

熊蟬の骸かぞえて夏送る

雷鳴が近づく部屋で正座する

大阪市 平井 露芳

給食のパンのお陰で米余り

雨降りはどうしようかと迷う杖

涼しさも馳走の一つ川の上

日本中サブリ言う程売れてるの

大阪市 吉田 知之

井戸堀の議員今では語りぐさ

おしゃべりが上手なだけでギョラ稼ぎ

現世を長い廻路と踏みしめて

車内には読書派よりも携帯派

池田市 多田 契子

夏バテで忘れてならぬ原爆忌

棺桶に入る時には軽くする

脳萎縮年齢並みですとそっけない

勝敗をとんとんにした大豪雨

泉佐野市 稲葉 洋

孫帰リアニメとゲーム後遺症

貰い泣き勝者が流すあの涙

四海波天気晴朗とはいかず

その内に佐渡も淡路もなんて事

泉大津市 助川和美

バーベキューピーマン隅においやられ
味よりも炭が自慢の焼肉屋

連呼したガンバレ日本熱い夏

原爆忌杖をたよりに参加する

河内長野市 辻村ヒロ

ボケ防止講座に来てる人元氣

そうそうと同年代の頷きだ

雷に心のマグマ刺激され

痛む膝ときめき追って宥められ

河内長野市 藤塚克三

薬出さず励まし治すこれ名医

妻切れてぼんぼん愚痴の機関銃

朝日課テレビとラジオ印付け

アレのアレで夫婦歯車回り出す

河内長野市 穂口正子

孫笑いちよつと見て見て肩に蝶

よその子のあつと言う間の社会人

こちらでも買える贈るな子のメール

愛国の歯車となり命消え

河内長野市 渡邊修

書き替えて出しては破るマニフェスト

アメリカは島争いは風見鶏

政党を組んでは壊し座るドン

胸張って維新に挑め既政党

堺市 羽田野洋介

何だろぅ並びたくなる人の列
湿っぽい話は乾くまで待とう

語呂合せの年号はまだ覚えてる

効いたかな朝の鏡へ独り言

堺市 増田和幸

子や孫に残すな原発核の灰

平和こそ宇宙規模で考えよう

国会の犬でも喰わぬ茶番劇

議員さんバッジ確保で右往左往

豊中市 石橋優明

青空にさつと一刷毛白い雲

高い雲秋はアルゼンチンの空

わたあめの上に波だつ秋の海

日焼けの子神の子の眼になる刹那

豊中市 源田啓生

人の世の争い喰う天の川

長生きは無為徒食してありがとう

妻の背がだんだん丸くなつて来た

夏雲が交替急ぎ颯雲

寝屋川市 小谷滋彦

今年から敬老饅頭二つ来る

縫れても明日へ続く夫婦旅

まだ生きる新しき旅あれやこれ

手の平に焼芋あちち跳ねまわる

羽曳野市 安本 美喜

露草を見つけてころ軽くなり

怪談のはなし省エネになりそうだ

物忘れ笑って話すいい時代

笹藪の墓に供養のお裾分け

枚方市 河田 洋子

乳のみ子を殺す親あり恐ろしい

失敗を歳のせいだと言いつつ

失敗に心入れ替えケセラセラ

猫が来て一週間でポロ家です

藤井寺市 肥山 一文

華やかでどこか悲しいフラメンコ

おだやかにあくびをしてるポチと僕

合図よし後はスイッチ入れるだけ

孫が来て溶かす妻とのわだかまり

松原市 市川 太

大阪より国政大事市長さん

楽をして金稼ぐ気は有りません

若者が今日もたむろの夜の道

テンションのアップダウンに大差あり

箕面市 酒井 紀子

時々ロダンになって考える

夏惜しむ賑わしきかな蟬時雨

ほめ言葉まだまだ本気鏡みる

万札を使う逃げ足早くなる

箕面市 村田 恵子

しゃべらない猫と話をする不思議

ご近所の付き合う距離がむずかしい

やったねと母さんの声ビタミソ剤

掃除機と唄いストレス大発散

大阪府 荒川 鈍甲

特攻隊や兵を餓え死にさす狂気

死の灰を作りつづけて行く狂気

明日こそは花がほころぶ金曜日

あちこちでミミズの果てる炎天下

大阪府 石田 ひろ子

外食の家族揃った盆休み

ばんざいの形でポチと夫昼寝

笑うこと忘れた母の髪洗う

アップテンポの唄で暑さをけちらかす

大阪府 小栢 こずえ

する事があるので今日も元気で

楚々と立ち風とたわむる秋桜

種蒔けば雨稲刈は晴れを恋い

家族留守小さな羽根が伸びていく

大阪府 坂口 公子

老いたなと今日もとつくり三面鏡

お愛想に紅葉が匂う崖つ淵

頼まれもしないが重い趣味の束

夫妹どの辺か知ら黄泉のくに

大阪府 高木道子

休耕田羽根ゆつたりと秋の蝶
売り家の塀から覗く鳶かづら
鰯雲食べた入道また肥る
さりげない昭和の匂う秋扇

大阪府 中井 記久乃

股関節手術の傷もうすくなり
今は亡き親に感謝の想いのみ
孫背のびどちらが高いとくらべてる
年重ねしわも内にと入り込む

大阪府 畑 中 節子

肩に止まるバツタを友に夕散歩
傘寿でも膝固まらぬよう歩く
頼られる事を励みにねじを巻く
留守宅のコスモス風とたわむれる

神戸市 興 水 弘

財を成す才能ないが笑顔よし
蟬声が止んで園には子らの声
幸せは夫婦酌み合う古希の酒
くり返す妻の小言も香の物

神戸市 山 根 弘子

美しい夕日に祈る明日の幸
人生を未熟のままで今日も生き
深読みをしすぎて友と仲たがい
反対をすればするほど深い仲

加東市 岩 本 美緒子

ラッキー七月誕生同じ友と吾れ
自負の歯も力尽きたか揺れ動く
歯の痛み耐えよと顎にサロンパス
松竹添う春の巳の作短冊画

加東市 黒 崎 美紗子

イチジクを鳥とともに味見する
草とりの暑さに負けぬたたかいだ
快適に娘の気くばりでお買物
すすめ上手綿のマフラータオルにも

川西市 日野岡 和之

この世には納得いかぬ運不運
エンピツを持てるゆとりの時は金
不器用も男の取り柄世の重石
煽られていなせな男勇み肌

川西市 山 口 不 動

つくつく法師積乱雲が去って鳴く
涼風に大夏やつと背中みせ
アンコールかかる舞台で終りたい
やさしい風を復活させた扇風機

篠山市 石 田 久子

立たされた記憶廊下は寒かった
明日のこと天に任せて今夜ねる
選んだ道黙って歩き続けます
病む人に明るい彩を着て逢おう

篠山市 北澤 桐民

一日終え心に満つる黄金田
蟬しぐれ何をそんなに訴える
病院で茶髪のナース爽やかで
墓石にも値引の札がついている

篠山市 谷田 多美子

新調の服着て通う整形科
無人駅なつかしい人影さがす
増税が未来の子たち救うなら
梅雨空の朝のたのしみ冷ややつこ

篠山市 藤井 美智子

ちよっぴりの利子にも税は容赦ない
強硬な消費増税民いじめ
百歳ヘド라마をいっっぱい持った母
夕立がうれしかったと畑の声

三田市 足立 つな子

嬉しそう困る困ると言いながら
目覚めては兄を看取った義姉思う
糠漬けの紫紺のなすび母の味
貯蓄減り診察券が増えていく

西宮市 株元 玲子

オリンピック感動の日をありがとう
駅の階段を無理して颯爽と
眼鏡の数遠中近とややこしい
老いの坂一步一步を噛み締める

耳なりとセミの泣き声暑さ負け
流れ行く川の強さに負けそうだ
初盆に赤トンボ友墓参り
孫達に負けずと食し胃の痛さ

三木市 山口 久子

第31回 鳥取県没句川柳供養大会

とき 12月16日(日) 午前9時開場・受付
ところ 新日本海新聞本社ビル 5階 大ホール
JR鳥取駅南(駅裏) 徒歩3分

会費 2000円(昼食・作品集呈)

精進落し 3000円(懇親会)

兼題 「敗者復活吟」 池 森子 選

(この一年間で没になった句から2句吐)

「天 罰」 従野 健一 選

「おかげさま」 豊福地 佳平 選

「膿(うみ)」 足立 茂 選

「転々」 山下 蟹朗 選

「火ダルマ」 国府 竜洞 選

「ハーレム」 山下 凱柳 選

「酸 欠」 盛田 夢路 選

席題なし 各題とも2句吐

投句締切 11時厳守

欠席投句 1000円(切手可・作品集呈)

12月10日締切

投句先 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3

電話 0857-59-1056

主催 川柳ふうもん吟社

予告

第19回 川柳塔まつりは平成
25年10月12日(土) アウイーナ・
大阪で開催予定

中島生々庵句抄

(句集『生々樂天』から 昭和五十一年発行)

昭和三十六年～四十年

公休の妻の朝寝をいとしがり

人並みというその人並がけたはずれ

人柄がただの鼠でない目付き

通訳の方がゼスチュアゆきとどき

洋食に割箸そえて祖母の席

お座興にしてはしらずし舞いおさめ

母と往く心斎橋の片日照り

打ち水をして待つ客の遅いこと

一本の紐の始末も世帯じみ

十字架を背負うた同士信じきり

人目にはドライブに見え医者稼業

黄菊白菊紫の菊すねて見え

嬉しいたより実印を持ってこい

無責任はかくあるべしと選挙戦

物好きな旦那はんやと惚れている

理性きびしくまともに俺の老いを知る

耐えてゆくための老軀をうずくまり

赤ちゃんのお乳臭さの手の魅力

妻と九州へ空の旅

飛行機でゆくのに台風身近かすぎ

古事記の神話秘めてビロ―樹茂る島

新川柳鑑賞 (9)

麻生 路郎

おいしいと云わない人と妻悟る

(水 客)

「おいしい?」

と妻がきいても、

「そっだなア」と言うだけである。世には

妻の苦心の料理を、ただムシヤムシヤと食うだけで決してうまいと言わない夫が居る。

「そっだなア」は「まアこんなものだなア」にも通じる。

「うまいものが食いたければ一流の料理屋へ行くよ」と言うかも知れない。妻のまごころが通じないとなると妻としては立つ瀬がないのである。わたしの料理をほめたからって夫の沽券にかかわりもすまいに思う。しかし決してほめてくれないことを知ってそれから「おいしい?」を繰返さなくなった。

丸刈にしようかと妻を試してみ

(五 茶)

仕事に責任を持つ地位となると、長髪も

いささか面倒になって来た中年の男なのであろう。

「あんた、一ベン散髪に行ったらどう?」と妻から散髪をサインクされる始末。「そっだなア」と言うもののなかなか動かない。「いつそ丸刈にしたらと思うが……」と妻の方へ顔を向ける。妻が容易に賛成しそうなことを知っていながら……と言う句である。中年の夫婦の心理をうまくとらえている。

刑事より鋭い妻の御眼力

(満 年)

ワイシャツについている口紅から夫の今日の行先を判断するぐらいはヘツチャラに違いない。この句は妻の眼力におそれ入っている人を詠んだもの、同感の夫も多いであらう。

再婚した貞節の道をゆく

(清 生)

貞節とは何んのことですかと太陽族は言うであらう。太陽族でなくても終戦後は貞節を守ると言えば、馬鹿扱いされぬとも限らぬほど貞節が重んじられなくなったことは事実である。昔のモラルが必ずしも今のモラルでなければならぬ筈はない。貞節だった女が夫を失って再婚した。そこには再婚

するだけの理由があつて再婚したのであろう。彼女の新しい第二人生に於いても亦貞節の道を歩いているというのである。一寸人の気づかない面に触れた句として興趣を覚えた。

金のない亭主と知つていても嫉け

(一 瓢)

金のない男は振り向いても呉れぬ今の世の中、金のないうちの亭主が女にてもそんなことがないとは百も承知していながら、つい遅く帰ると、もしひよつとしたらと思うのが矢張女房なのであらう。そんな女房を持つたうちの亭主たるものむしろ感謝していいだらう。穿ちの句。

うちの女房香水なんか知らぬらし

(多久志)

世の男たちはブルの若奥さんの匂い、アクトレスの匂い、芸者の匂い、みなそれぞれ匂いを持つことを知っているが、さて自分の妻の匂いとなると、それ等の女性とは全く別種の匂いしか持っていないことを知っている。ここに「香水なんか知らぬらし」と色気拔きの妻の匂いにいささか物足りなさを感じたのである。この句のウラに一家の主婦としても家計の切り詰め方が思われるのもすぐれた叙法と言いたい。

第18回 川柳塔まつり

同人総会

平成二十四年度第47期川柳塔社同人総会は十月八日午前十時からホテルアウィーナ大阪で開催された。総務部水野黒鬼の司会で開会し、小島蘭幸主幹から塔の方針、平成二十六年の川柳塔九十周年に向けての抱負と決意などを含めた開会の挨拶をいただいた。その後小島主幹を議長に選任して議案審議に入った。

第一号議案の事業活動は村上直樹常任理事から、後記の「事業活動報告」に沿い、各別に整理して報告した。

・毎月川柳塔誌を遅滞なく発刊したほか、新企画として「英語 de Senryu」「本所深川を歩く」「民族の詩歌」の連載を始め好評。

・本社句会の夜間開催を廃し、昼間に統一、この機に参加者の拡大に努力、効果を挙げた。

・数か月ごとに他柳社からの選者を招聘、句会運営に新風を入れた。

・誌友拡大・定着への資料とすべく誌友への



アンケートを実施。
・支出の無駄を省き会計の健全化に努めた。
・塔誌販売店の増強に努め、現在3店で塔誌販売を行っている。

次いで山口光久常任理事が収支決算書・財産目録を提示して2011年の会計決算報告を行った。藤村亜成会計監査が監査承認の旨を報告した。一号議案は拍手で承認された。

第二号議案の12年度の事業について村上直樹常任理事から各別に活動計画を提案、また山口光久氏が新年度予算案を提案した。

二号議案も承認され、会議全般につき質疑応答を行った。質問は特になく、岩佐ダン吉氏より同人費支払い手数料の件、各地における句会運営などに

いて幹部と相談できるような体制を考慮して欲しいとの提案があった。

第三号議案として、西出楓楽理事長より役員の新任、再任人事が提示され拍手をもって承認された。新任役員者名は後掲。

新常任理事・理事を代表し山崎武彦氏の挨拶があり、最後に川上大輪副主幹の閉会の辞で総会を終了した。

■事業活動報告

2011（平成23）年

10月10日 第17回川柳塔まつり及び

平成23年度同人総会開催

11月12日 川柳塔碑合祀法要（高野山大霊園・合祀者10名、合計17名参加）

2012（平成24）年

2月15日第一回川柳塔社各地句会代表者・役員会議を開催、同人・誌友拡大方策等について討議した。

・第一回春の川柳塔まつり誌上大会を実施し多くの参加者を得た。

【主な受賞・表彰】

木本 朱夏 本社句会月間賞杯永久保持者

斎藤 岳 瑞宝小綬章授与

奥田みつ子（社）全日本川柳協会八十歳

以上功労者顕彰

宮崎シマ子 東大阪市文化連盟功労賞

河内 天笑 憲法記念日大阪府知事表彰

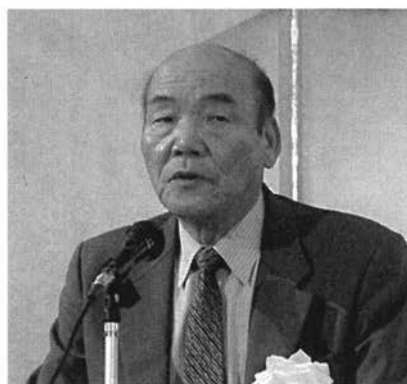
北野 哲男 三田市文化功労賞

■おはなし(要旨)

川柳に表れた死生観

川柳塔社副主幹

新家 完司



新家 完司氏

本日は、「死を題材にした川柳」から、作者それぞれの想いを汲み取りたいと思います。まず【死ぬ順番】を詠った作品です。「胸に薔薇付けた順序に行くあの世 田沢恒坊」胸に薔薇を付けたということは、脚光を浴びるようになった人を象徴してい

ます。「そのような人から順番に死んで欲しい」という、これは作者の願望なのでしょうが、同感する人も多いことでしょう。

「年齢順に死ぬうるさくてかなわない

定金冬」確かに年齢順に死ぬのがいいはん公平です。が、順番が近づいて来たら怖い。同級生で誕生日が一月早い人が死んだら、一カ月後は間違いなく自分の番です。これは恐い。誰もが「私の番はまだ」と思っているから平気で生きて行けるのです。

「順番という幸いで母が逝く 東川和子」この「順番」は親子の間の順番です。親より早く死ぬのは最大の親不孝。そのような意味で、「親の方が先に死ぬのは親にとって

ても幸せなこと」というのはよく解ります。

「逝く順のように並んだご焼香 西脇順次」焼香の順番はだいたい町内の役職者や高齢者が先です。作者もその列に並びながら、「ああ、次はあの人たちか」と思われた。不謹慎なようですが実感でしょう。

「歳の順なら次はダンナだナムアミダ

安土理恵」ダンナとはもちろんご主人のこと。ナムアミダと念仏を唱えられては、ご主人もおちおち生きておれません。(以下、スペースの関係上、コメントは省略)

【死者と生者との対比】

「今朝名士が逝って隣に子が生まれ 矢野

佳雲」「香典の額思いつつ聞く計報 藤原正明」「ご近所の顔が揃った葬儀場 川崎ひかり」「葬式のおかけ御近所みな揃う 安黒登貴枝」「折りたたみ傘持つてゆくお葬式 小池しげお」「葬式で会いほらいことおまへんか 須崎豆秋」「一緒に逝けないけれどそこらまで 小沢 淳」「まだぬくいお骨へ初七日のお経 岸野あやめ」「お葬式行つて疲れて二日寝る 笠嶋恵美」「喪が明けて仏の寝具ゴミに出る 福士慕情」「祭り月なのに喪服を吊っている 八木千代」「ばあちゃんが死んで畠は駐車場 吉田伝恵」

【葬儀全般】

「義理返す時は今ですお葬式 高瀬霜石」「本人はいい人でしたとは聞けず 水野黒兎」「惜しまれて死んでも棺桶はひとつ 神野きつこ」「(中間省略) 時間も迫ってきましたので、あと二句ご紹介いたします。「もう少し生きて悪夢を見続ける 藏内明子」生きて行くことそのものが悪夢だという哲学。「もう心配しなくてもいい死んだひと 森下よりこ」この二つの句を並べて考えますと、「死」は悪夢や心配事からの解放になります。そのような嬉しい「死」が訪れるまで元気に川柳道を進んでゆきましよう。

各賞表彰・記念句会

受賞者（敬称略）―前列右から 久仁雄・緑良（代理）・主幹・名誉主幹・房子・紀の治
後列右から 次根・和子・ひとみ・寿之



第十八回川柳塔まつりは、好天に恵まれた十月八日、アウイーナ大阪にて開催された。当日は北は北海道から南は九州まで全国各地から同人・誌友が、更には他柳社からの参加者も含め、361人の大盛会となった。

句会に先立ち六賞の表彰が行われ、それぞれの受賞者に対し主幹から表彰状と記念の楯、また所属柳社からは花束が贈呈された。引き続き本年度の新同人の内、出席者22名が紹介され、代表として稲見則彦氏が新同人となった喜びと今後への抱負・決意を述べた。

お話は副主幹の新家完司氏。「川柳に表れた死生観」と題して、人間の生と死に纏わる数々の川柳を引用しながら、ユーモアたっぷりに完司氏の死生観を話された。とても短く感じられた60分間の楽しいお話であった。（78頁参照）

月間賞は古今堂蕉子さん（大阪市）
司会（長井善純・長浜美穂・古今堂蕉子）
協取（真理子・宏子・扶美代）
清記（勝弘・まつお・希久子）撮影（茂）



兼題「絆」

黒田 茂代 選

柳人の絆深める塔まつり
絆とや血の色に群れ曼珠沙華
隣とは回覧板だけの絆
DNA断てぬ絆に泣かされる
絆を解くようにセーターをほどこ
バリで会う東北弁に癒される
呪縛からやがて解かれる火の絆
何気ないしぐさが亡母とつりふたつ
地球ぐるり電波が結ぶ絆の輪
ときどきはマナーモードにする絆
納豆の絆しっかりかき混ぜる
保証人頼まれ絆試される
ずつとずつと共に歩いてくれますか
ロボットと絆が深くなる介護
絆言う口が瓦礫の処理はイヤ
大家族もとは他人のふたりから
津波さえ攫えぬ人にある絆
友好の絆が重くなるパンダ
節電が家族の絆太くした
強すぎる絆重荷になっている

正彦 紀乃 時雄 克己 惠美子 直樹 森子 阿紀子 和郎 弘一 力 葉子 キヨミ 裕之 五月 郁夫 遠野 洋介 志千代

運命を海と契った漁師たち
同心円の絆の温さ疎ましき
桐箱に絆がひとつ生きている
絡み合う義理が重たくする絆
反核の絆日本が世界一
貧乏でわが家の絆まん丸だ
ふるさとの絆絡んで離れない
血の絆母も私も苦勞性
いざと言う時には飛んでくる絆
絆嫌って椿ストンと落ちてゆく
どん底で結んだ絆ゆるまない
美化された絆だったと知る瓦礫
疎開時の絆細いが未だ続く
寄り添った子等もやがてひとり立ち
音沙汰の無い絆呼ぶ祭り笛
福島を忘れないでと桃笑う
寄り添って居るだけでいい人になる
献血を受けて愛とは絆とは
人の字で支え合っている絆
何遍も捻れて太くなる絆
失意から立ち直らせたのは絆
親と子の絆になっている名前
添いとげて今や血よりも濃い絆
逢えないが着信音という絆
乳飲み子が泣けばお乳があふれ出す
別姓の屋根の下にもある絆

たかこ 孝子 寿之 折杭 善純 ばっは 文子 (大)美智代 寿美 未延子 宏造 ちかし 忠昭 智彦 (伊)玲子 正子 夕胡 良一 (谷)久美子 美弥子 光久 保州 好 榎子 孝代 きく

もう下車は出来ぬ地球の縄電車
独り身の熱い絆の僕と影
過去帳をめくり絆の深さ知る
土壇場へ細い絆をたぐり寄せ
昭和生まれの絆あちこち傷の跡
住 透明になったちははとの絆
臍の緒で繋ぐ最強の絆
幸せな時は何でもない絆
ハイと言うなんと優しいこの絆
百歳の笑顔が家族光らせる
人 ありがとうの絆日本蘇る
地 母と子の絆絵本の森にある
天 列島が絆一字を問うている
軸 支え合う家族わたしの生きる糧
兼題 「語る」



牧野 芳光 選

次根 義泰 野薫 絹子 公誠 蘭幸 いさお 大輪 欣子 賀世子 尚子 (編)則彦 岩佐ダン吉 哲男 孔一

日本の明日を語ると熱くなる
美と若さ語れば女エンドレス
聞き上手童を操り語らせる
猿山を語ると土も字も笑う
本音なら居酒屋抜きで語れない
囲炉裏端民話を語る背の丸さ
遠い目をして母の昔が長くなる
武勇伝熱く語らず聞き上手
セールの父は家では無口です
正論を語るわが子の背な眩し
目で語る母に説得されました
とつとつと銃後を語るさつま芋
越えてきた語り尽せぬ汗のしみ
日溜りのようなことばに口説かれる
宇宙への夢語り合う町工場
少年期を語るラムネの音がする
一言も苦勞語らぬ父と母
竹べらで古代の語り聞く学者
古里を語ろう月は欠けていく
仏壇と語りつくして風になる
拉致の海語り尽せぬ夜の底
つらいけれども震災を語り継ぐ
大物は語らず雑魚は姦しい
樹木医の耳老桜と会話する
訥訥と語る男の目が温い
あの世へは持つて行けないから語る

セツ子 尚子 和郎 弥生 勝弘 克己 能子 キヨミ 正和 無限 美津子 加お里 榎子 淳司 (森)恵美子 秀雄 正雄 (真)美智子 郁夫 たもつ 完司 すみ子 三成 寿之 隆充

入院の予定などなし万歩計

予定などないが忙しそうにする
なにはとも妻より先に逝く予定

爽やかに妻の明日を聞いてみる
来年も咲く予定です多年草

予定日はまだかと回りからの声
予定ないが靴は毎朝光らせる

介護される予定の妻が先寝込む
脱稿の予定見えない君と僕

予定せぬ貧乏神に長居され
まっ白な予定になったプロポーズ

毎日が予定だおれの暮らしむき
セシウムの消える予定は京年後

叙熱うけ予定通りの人生に
スピーチで先にいわれた取って置き

佳

詰め込んだ予定が僕を振り回す
予定日が近付き母の顔となる

葬儀屋のチラシが予定開きに
予定外奈落の底で目を醒ます

おとなにねなったらおしこするよ
人

予定より早く帰って嫌がられ
地

予定日を答える笑顔すでに母
天

スケジュールいっぱいめで元氣です
柴本ばつは

完司

蕉子

ちかし

憲彦

幹子

義雄

義子

隆昭

則彦

(福)

玲子

(伊)

欣之

伸子

みつこ

いさむ

眞澄

かずお

絹子

(古)

和子

靖鬼

涼

裕之

由一

軸

予定より早く着いたかオスブレイ



兼題「偉い」

山口 光久 選

産声がでつかいきつと偉くなる
偉いなー裏も表もない案山子

偉い人より優しい人に憧れる
ヨメハンに絶対アタマ上がらない

九人産み白寿を生きた母偉い
肩書が大臣だつてあの通り

誰よりも母が一番偉かつた
どつかりと太陽宇宙支配する

偉い人ほど自分の偉さがつかぬ
ど偉いさん名刺に住所テレも無し

脇役の苦勞氣遣う偉い人
貧乏は我が家と同じ偉人伝

偉そうに持つてる金が偉いだけ
偉い耳に僕の主張が届かない

まだ元氣あるので偉人伝を読む
偉いねえかしこいねえで子を育て

極貧をバネに育った偉人伝
この俺に出世払いでいいと言う

変人を通した人だ偉かつた

能子

(東) ますみ

(松) 美智代

勝弘

いさお

修

千里

賢子

みつ子

美義

庸佑

六点

まさじ

完次

美代子

かずお

ひろ子

保子

トップに立てば矢も鉄砲も飛んでくる

偉いのは裏で支えた妻の徳

宿六の偉さを知ったお葬式

偉い椅子降りたらただの木偶の坊

友がみな偉く思えた日の失意

献血をしよう二十の使命感

偉い人抜きで二次会盛り上がる

くす玉を割るのも仕事偉い人

かあちゃんえらいおとうちゃんへもおこすかい

偉いなあ花道もなく勤めあげ

ぴかぴかにトイレ磨いていた所長

えらいひとやくそくちゃんともるんだ

あんたは偉い母の上手なほめ言葉

何たつて一番偉いのは論吉

偉そうにするたび孤独呼び寄せる

太陽は偉い見返り求めない

議員バッチつけて偉いと勘違い

不始末を詫びているのが偉い人

地球上で一番偉い僕の母

偉い人だけど女難の相がある

ほんとうに偉い独りで暮らす人

内助の功断固妻には金メダル

立志伝に無字の母がいた

背もたれの椅子がもの言う国なまり

ノーベル賞より母さんに努力賞
生き様が子等へ命の道標

寿美

ちかし

ひろし

未延子

正明

良一

紀の治

耕治

ばつは

(金) 美千代

三成

めい

(中) 恵美子

好文

好

喜八郎

ちづる

光枝

緑

集一

完司

直樹

扶美代

きく

(古) 和子

偉いさん焙れば欲が浮き上がる

肇

泣かぬよう褒めるナースも子も偉い

柳伸

客が来て夫が急に偉くなる

キヨミ

えらいこっちゃ日本の空をオスブレ

美世子

陽は真上偉い人には影が無い

比ろ志

誕生やす方が偉いと見た不覚

幹和

佳

偉い人もいつかおむつの世話になる

恭昌

清貧を貫き優しかった父

眞

偉くなり過ぎて忘れていた初心

紀久子

偉い人ばかりで舟が進まない

希久子

生き様にポリシーがある痩せ蛙

富美子

人

ひたすらに忍の一字で天下取り

早人

地

子と思う母は偉人を望まない

芳光

天

偉いなあはめて育てる種を蒔く

池田純子

軸

凡人も偉くなりたい夢をもつ

兼題 「イメージ」

鶴田 遠野 選



少年のイメージ消えぬ阿修羅像

ばっは

マスコミが作るイメージしか知らず

イメージがこんなに違う昼と夜

あかね

亡き母のイメージ辿る喜寿の坂

和香

ビナスというイメージで妻を見る

盛桜

木綿から絹のイメージお年頃

すみ子

イメージを欲が手伝う詐欺の罠

三四郎

イメージの先で確かな夢掴む

美千代

七色の未来イメージする誓い

賢子

試着室イメージに酔った小宇宙

麗

マドンナは年を取ってはいけません

好文

美人だからやさしい人と思ひこむ

かずお

美しい文字美しい顔になる

芳光

イメージの中では飛べた水溜り

久仁雄

カタカナに無いイメージをもつ漢字

六点

無限大にプラスイメージ膨らます

みつ子

脱原発イメージだけは湧いて来る

美智子

雷鳴が何処かの誰か叱ってる

妙

好感度ナンバーワンのプレッシャー

弘光

父の背にイメージ不可と書いてある

一瞬

終焉の顔をイメージ身を正す

シマ子

五線譜におたまじゃくしを泳がせる

幹和

イメージと愈々離れゆく鏡

翔

イメージとびつたり 弾む初対面

正明

峰打ちをされた思ひの女文字

完次

イメージが膨らみすぎた設計図

上紀子

ゴキブリはそんなに悪いことしたか

時雄

イメージをするりと変えたイヤリング

和次郎

文豪の金釘流にホツとする

正和

ふくらんだイメージとことん生きてやる

千里

百歳の自分イメージしておこう

天笑

大胆なイメージ老いを振り払う

新一

似顔絵に私は凄い顔と知り
イメージをあなた好みにする苦勞

世津 孝代

人
句読点打ってイメージ塗る替える

(備) 富子

地
イメージと現実の差を埋める汗

楓 楽

天
イメージを気にして笑えない菩薩

小寺竜之介

軸
面影が残る写真を子に預け

兼題 「美」



小島 蘭幸 選

有終の美のお手本に亡母いる
美しく老いる支度を始めます
美しい時もあったと妻は言う
美しいボチの死に顔安堵する
美しい言葉で妻が攻めてくる
路地裏の風が運んでくる美談
美を求め男も眉を剃る時代
健康美だけが取得の妻である
美容外科個性消してただけのこと
十二神将憤怒の相に美の極致
美術館出て暫くは雲の上
起立礼一糸乱れぬ美しさ

賀也子
千鶴子
孔一
稠民
昌紀
浩子
正美
善純
千恵子
黒兎
(岩) 浩二
かつ子

有りの儘生きて美化する事はない
美しい日本を守る樹を植える
席ゆずる美德を孫に教える
美顔術一度やりたい古希まぢか
美しい皿だから盛るものがない
まっすぐに見つめる少年の美学
結婚を決めた娘が美しい
美しい空よ花よ生かして欲しいもう少し
美女だから優しい人であって欲しい
美しくお年召されて両陛下
白杖をサポート美女に違いない
透明にならせてくれる酒の美味
君と見た夕日輝いてた若さ
美しい素顔は僕が独り占め
黒の似合う美女に出会ったことがない
試着室鏡はいつも褒め上手
美しい国天の美祿と夜が更ける
ゲリラ豪雨去って見事な夕焼けだ
美しい嘘と来世も契るなり
美しく老いたしころ空にして
恋文と思って遺書を書く美学
健康美ナンテタッタアスリート
プラス思考の人は心も美しい
外面がいいのはわたくしの美学
美しかったと覚えていてね喪のドレス
とこころ美を追えば行きつくころは無
里帰り心美人の妻連れて

(大) 美智代
一歩
公誠
ちづる
(志) 千代
隆彦
美弥子
(松) 文子
みつ子
(田) 實
六点
眞理子
(長) 敏子
武人
葉子
竜之介
哲男
妙
希久子
半銭
集一
(田) 章子
弘一
克博
千代美
楓楽
(安) 幸子

星空に散らばる思い出の欠片
美意識を極めて透明になった
粗食でも美味しいと言う亡母だった
九十の母の老斑美しい
古美術のよう百歳の笑い皺
その涙宝石箱に入れて置く
初恋の君は老いても美しい
美人とは少し距離置く保身術
股のぞきすると美人になるわたし
ライバルと競う美学として競う
賛美歌にカラオケほどの声が出ぬ
自らを裁く日もある薔薇の芯
丁寧に生きてうなじが美しい
表彰台に立つ日の丸は美しい
省略の美学ことばに花が咲く
美化されて息子の中に居る私
赤ちゃんのともとも美しい御腹
人
わたくしの美学なんにも残さない
地
庇い通した嘘のひとつが美しい
天
美しいと言ってくれたのは一人
古々堂蕉子
軸
クラス会みんな美人になっていた

(備) 章子
富美子
正彦
美千代
直樹
(上) ひとみ
公弘
桃花
あかり
(久) 千代
求芽
森子
律子
美籠
(藤) 恵美子
正子
わこ
理恵
朱夏

参加者の感想

嶋澤喜八郎（川柳・交叉点）

第18回川柳塔まつりのご盛会おめでとうございます。いきなり新家完司さんの死生観にかかわる熱弁・熱唱に圧倒されました。ともすればタブー視されるテーマに正面から挑戦されたことに拍手を送りたいと思います。

句会の方は、参加者が多くなれば当然のこと入選の門戸は狭められ、私のストレスはたまる一方でした。そしてあらためて自分を見つめ、「川柳とは何か」と考えさせられた一日でした。ありがとうございました。

岩田 明子（番傘川柳本社）

今回の川柳塔まつりで印象に残ったのは、新家完司さんの「川柳に表れた死生観」といういささか固いテーマのお話だった。ややもするとタブー視しがちな人の死について、例句をあげながらのユーモラスな語り口に会場からは笑いもしばしば、思わず引き込まれてしまった。取り上げられた句はすべて、ユーモア句で、しかしその中には深い人間の心理が表現されていた。最後に

完司さんの「千の風になって」の一節まであり会場は笑いに包まれた。



主幹・名誉主幹を囲む新同人

小山 紀乃（時の川柳社）

連休の一日を川柳塔まつりに参加して、北海道から九州迄大勢の方に出会え、気分も若返った。会場に入ると席取りの荷物がいっぱい、遠方からの方も多いのでやむを得ないとおもいますが、なんとかならないかとも思った。

開会後、挨拶などスムーズな進行、大勢の新人紹介も印象に残る。完司副主幹のお話は多くの句例と、終いまで倦きさせない話振りはさすが。句箋連記は選句しにくいし、一句吐でもと思った。ありがとうございました。

竹治かし（理事・島根）

川柳塔まつりに参加し、馴染の柳友とも一年ぶりに会うことが出来ました。今年が最後と言いつけながら三年、毎年一つずつ歳を貰いながらも、大型バスを貸切、総勢十八名出雲発五時半、松江、米子と経由して大阪に。会場に入ると熱気ムンムン。聞けば三百人以上の出席者とか。入選することよりも参加することに意義があると、楽しいひと時を過ごさせて貰いました。お世話頂きました皆様改めて感謝申し上げます。

高杉 力 (誌友・大阪)

ここ数年は毎年秋になると母千歩と連れ立って参加するのが恒例になっています。今年は直前になって母が風邪をこじらせ参加が危ぶまれましたが、持ち前の気力で持ち直し、参加することができました。父・鬼遊の想い出話や、しらなかったエピソードに参加の皆様から聞かせてもらえるのは大きな楽しみです。おまつりを支えていただいている縁の下の方の皆様に心から感謝し、来年も再来年も二人で元気に参加したいと思っています。

竹村紀の治 (同人・鳥取)

秋晴れの下、参加者三四二名という会場は熱気が溢れ盛況でした。和気あいあい進行も素晴らしい「川柳塔まつり」でした。

新家完司副主幹の「川柳に表れた死生観」のお話は歌入りで年頃の私には身に沁るものでした。このたび私は路郎賞の準優秀賞二席をいただきました。有難うございました。花束は川柳を勧めてくれた亡妻ヘレンゼントしました。「まつり」の計画準備に携わって来られた関係者各位に感謝申し上げます。

片山かずお (常任理事・大阪)

「塔まつり」の醍醐味は、出席して直接顔を

合わせることで、日頃塔誌で句とお名前を拝見しているだけの方と、新しい出会いができること、もちろんお知り合い同士なら旧交を暖めることができます。

今年も会場のあちこちで、そんな光景を沢山目にすることができました。

来年はもっと沢山の方にご出席いただき、沢山の良い出会い、思い出を作っていただきたいと、まつりのお手伝いをしながら思いました。

懇親宴

熱気溢れる句会場を後に、ほっとした面持ちで、三階の『葛城の間』に開場を移し、出席者104余名で懇親宴が開催された。

司会進行は、坊農柳弘、鴨谷瑠美子。開会宣言は名誉主幹の河内天笑。日川協事務局長の本田智彦氏の音頭で乾杯。

しばらくは料理とお酒を楽しみながらの歓談。高瀬霜石氏、稲見則彦氏が来年の、全日本川柳青森大会をたすき掛けでPRをされる。

いよいよカラオケ大会が始まり、次々とどの自慢が続く。磯野いさむ氏、本田智彦氏、



司会の坊農柳弘・鴨谷瑠美子

森中恵美子氏、赤松ますみ氏、お歴々も参加。河内月子さんの華やかなゆつたりとした、フラダンスに宴たけなわとなる。

突然、山中伸弥氏のノーベル賞受賞のニュースが峯村勳弘氏から伝えられた。番傘幹事長の田中新一氏の後輩とのこと。嬉しいニュースに会場はいつせいに拍手の渦となる。

新家完司さんのリードで「貝殻節」「鐘の鳴る丘」に続き、フィナーレは全員で仲良く手をつなぎ、輪になって「星影のワルツ」を大合唱。来年を約束してお開きとなった。

(能子記)



会場風景



句会の模様



麻生路郎氏胸像

新同人の挨拶をする
稲見則彦氏



表彰楯



新同人の方々

懇親宴



懇親宴の模様

乾杯の音頭をとる
日川協事務局長・本田智彦氏



楽しく合唱される皆さん



交流を深め合うひととき



川柳大会参加者

総数 361名
(順不同・敬称略)

〔北海道〕 小沢 淳

〔青森〕 稲見則彦 高瀬霜石

〔愛知〕 金子美千代 関本かつ子

〔京都〕 今井弘之 櫻崎篤子 都倉求芽

西村益子 藤井文代 榎本宏子 松岡七郎

三宅満子 森田律子 山田葉子

〔大阪〕 浅野房子 油谷克己 赤松ますみ

天根夢草 池 森子 池田純子 秋田あかり

井澤壽峰 石橋優明 磯本洋一 阿野寿美子

板尾岳人 市川雄太 井丸昌紀 石田ひろ子

入江秀雄 岩崎公誠 岩崎玲子 磯野いさむ

岩田明子 上山堅坊 榎本舞夢 伊藤アヤ子

海老池洋 江見見清 大川桃花 指宿千枝子

大隅克博 太田 昭 大谷篤子 岩佐ダン吉

大堀正明 荻野浩子 奥 時雄 江島谷勝弘

奥田雅信 奥村五月 柿花和夫 榎本日の出

籠島恵子 笠井欣子 笠嶋恵美 大久保伸子

加島由一 梶原弘光 亀山 緑 太田としお

河井庸佑 河内月子 河内天笑 大島美智代

川端一步 川端六次 北村賢子 太田扶美代

吉川哲矢 久世高鷲 藏田光子 小川賀世子

栗田久子 熊代菜月 黒岩靖博 片山かずお

柴原道夫 小池正博 小谷集一 神夏磯典子

小林わこ 近藤 正 坂 裕之 鴨谷瑠美子

坂上淳司 佐藤忠昭 佐波正春 木見谷孝代

澤井敏治 沢田和子 志田千代 桑田ゆきの

島田誠一 初代正彦 鈴木楽鬼 小泉ひさ乃

関よしみ 田浦 實 高杉 力 古今堂蕉子

高杉千歩 武智三成 伊達郁夫 小寺竜之介

谷久美子 谷川生枝 谷口 義 小山恵美子

田中新一 丹後屋肇 次井義泰 齋藤さくら

津守柳伸 鶴田遠野 寺井弘子 阪井美世子

寺川弘一 寺本 実 遠山唯教 佐々木満作

栃尾奏子 富田美義 富田保子 柴本ばっは

内藤憲彦 内藤光枝 中井アキ 嶋澤喜八郎

中岡 妙 長井善純 中島 華 島田千鶴子

中蘭 清 中野健吾 中村 恵 神野千恵子

西川更紗 西川冷子 西澤司郎 鈴木いさお

西出楓楽 早泉早人 樋口 眞 瀬戸まさよ

広島巴子 福田悦子 福田和子 高田美代子

藤井則彦 藤井正雄 藤田武人 田中美弥子

藤村亜成 藤原 昭 藤原大子 田中由紀子

穂口正子 本田智彦 前たもつ 津村志華子

前田紀雄 前原正美 升成 好 津守なぎさ

増田隆昭 松岡 篤 水野黒鬼 出口セツ子

峯村勲弘 三村 舞 宮西弥生 徳山みつこ

三好聖水 村上玄也 村上直樹 富山ルイ子

森 茜 森田 麗 森村美花 羽田野洋介

森本弘風 矢倉五月 安田忠子 原田すみ子

山根妙子 山野寿之 山本半錢 平嶋美智子

吉岡 修 吉木栄子 吉田知之 藤島たかこ

吉村一風 米澤徹子 若松雅枝 松尾美智代

土田欣之 中川隆充 宮崎シマ子

森中恵美子 森松まつお 山岡富美子

山本加お里 山本希久子 吉田喜代子

吉道あかね 吉道航太郎 吉村久仁雄

宇都宮ちずる

〔兵庫〕 足立 茂 石原歳子 上垣キヨミ

伊勢田毅 市坪武臣 上原 翔 上田ひとみ

梅澤盛夫 尾崎一子 加川靖鬼 緒方美津子

片山 忠 金川宣子 亀岡哲子 奥田みつ子

北澤稠民 北野哲男 黒田能子 河原野折杭

桃谷和郎 小山紀乃 酒井真由 久保田千代

白川淑子 梶元世津 田中章子 竹山千賀子

多田雅尚 種田淑子 長島敏子 中岡千代美

長浜美龍 西内朋月 平山繁夫 七反田順子

福田好文 藤井宏造 藤岡りこ 西口いわゑ

稗島照代 堀 正和 前川 淳 松下比ろ志

丸山孔一 南 全彦 矢野野薫 山田婦美子

山口光久 山崎武彦 山田耕治 吉井菜々子

山本義子 吉田佐知 前川千津子

〔奈 良〕 安土理恵 阿部紀子 池田貴佐夫

岩本浩二 大内朝子 大西将文 居谷真理子

岡部幹和 鍛原千里 加門萌子 大久保眞澄

五味尚子 笹倉良一 谷川 憲 高田まさじ

菱木 誠 古川洋子 坊農柳弘 飛永ふりこ

牧浦完次 松本柁子 南 芳枝 中山恵美子

宮田宜子 柳瀬孝子 山田順啓 萩原三四郎

山本柳昌 米田恭昌 和田次郎 久田年須美

吉富ひろし

〔和歌山〕 石田隆彦 磯部義雄 坂田喜久子
上田紀子 宇野幹子 柏原夕胡 坂部紀久子

川上大輪 喜田准一 北山絹子 土屋起世子

木本朱夏 楠原富子 楠見章子 藤原ほのか

小谷小雪 武本 碧 辻内次根 古久保和子

福本英子 福呂秀子 松尾和香 松原寿子

三宅保州 たむらあきこ

〔鳥 取〕 稲村遊子 後藤宏之 斎尾くにこ

新家完司 鈴木公弘 田中一眸 竹村紀の治

林 瑞枝 成田雨奇 牧野芳光 政岡未延子

森山盛桜 両川無限 吉田孔美子

〔島 根〕 安達幸子 伊藤寿美 小豆沢歌子

伊藤玲子 岸 桂子 黒目英男 金築シゲ子

佐藤治代 銭山昌枝 松本文子 竹治ちかし

持田英子 多久和敬子 多久和博子

仲田美千代 松本知恵子

〔岡 山〕 野島 全 森ふみか 工藤千代子

渡辺春江 東植ますみ

〔広 島〕 小島蘭幸

〔愛 媛〕 黒田茂代

〔高 知〕 小澤幸泉

〔佐 賀〕 松尾 涼 松尾めい 真島久美子

真島美智子

〔熊 本〕 岩切康子

――

御芳志御礼（敬称略・順不同）

田中新一 小島蘭幸 新家完司 鴨谷瑠美子

天根夢草 川上大輪 村上玄也 古今堂蕉子

前たもつ 牧野芳光 水野黒兎 山岡富美子

村上直樹 鶴田遠野 長浜美龍 奥田みつ子

西出楓葉 山口光久 鈴木公弘 山本希久子

都倉求芽 酒井真由 山本義子 久保田千代

川端一步 鍛原千里 柿花和夫 富山ルイ子

黒田能子 松原寿子 黒田茂代 鈴木いさお

岩切康子 坊農柳弘 河井庸佑 江島谷勝弘

稲村遊子 田中一眸 木本朱夏 森松まつお

福土慕情 寺井弘子 小沢 淳 瀬戸まさよ

浅野房子 加川靖鬼 小澤幸泉 古久保和子

西口いわゑ 鳥取県川柳作家協会

京都塔の会 川柳塔鹿野みか月

川柳塔さかい いずも川柳会

米子住吉川柳会 川柳塔きやらぼく

川柳塔みちのく 美研アート

英語 de Senryu ⑪

麻生路郎句集 『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代
(岐阜保健短期大学)

雨風が逢いたいところつのらせる

hard wind

strong rain

a vision of you

女のいない酒はさびしき

lonely feeling attacks me

when I drink

without a woman

～リバーウィローのため息～ (R・H・ブライスの仕事3：ブライスの作品創作)

ブライスは俳句や川柳の作品創作に関心を持ちませんでした。「俳句は詩を作る道ではなくして、生活の道であります。従つて佛教、道教、儒教等の研究なくして俳句はわからないと思います」(北国俳壇 1950)と述べ、また「俳句を余りにも尊敬しているので、俳句を創作することはできない」と自己の作品創作に対する考えを示していることから、関心のなさを知ることができます。川柳に対しては、むしろ自己の嗜好に合った古川柳や川柳を英訳して、そこから日本人の暮らしを読みとることを楽しみました。とはいえほんの少数ですが、よく知られているブライスの俳句作品が二句残っています。一つは京城帝国大学時代に創作された「葉の裏に青い夢見るかたつむり」で、これにはブライス自身の英訳も付いています。字数の関係で紹介できませんが、この俳句には七種類の変化形があります。もう一つは、辞世の句として知られる「山茶花に心残して旅立ちぬ」です。ゆっくりと着実な歩みのかたつむりに自分を重ねて青い夢を育む未来志向型人間ブライスの心を語る「葉の裏～」に比べれば、「山茶花～」は非常に日本的な感性の俳句ですね。さらに彼の川柳作品が数年前に発見されました。昭和25年10月29日開催の第2回京浜川柳大会に参加したブライスは、四句の川柳を書きとめていました。榎田珍林が捨てられた句箋を所持していたのが出現したのです。『オール川柳』葉文館1998)ブライスの唯一の川柳作品といえましょう。「ねずみ取り買うぼんさんのまあい目」と日本語で書かれていました。ねずみとぼんさんのまあい目が浮かびあがり、ユーモラスな作品ですね。日本人の川柳と視点が少しずれるなと思ってしまうかもしれませんが、読者のみなさまはどうでしょうか。

※前月号「女のいない酒はさびしき」の英訳が編集の手違いにより間違っておりました。吉村先生には大変ご迷惑をおかけ致しました。お詫びして訂正いたします。

誹風柳多留——一篇研究 87

増田 忠彦・山口 由昭
小栗 清吾・伊吹 和男
山田 昭夫
清 博美

680 かべに耳なくつて四巻世に残り

増田 「漢書・藝文志」によると、秦の始皇帝の焚書を避けるために隠されていた「古文孝経」「古文尚書」といった古書が、漢代に孔子の旧宅の壁の中から発見されたという。
〔日国〕など

「壁に耳」というが、そのように洩れることもなく、壁に塗り込められた古書が世に残り伝わることとなった。四巻は四書五経などといわれる四書によるか。

伊吹 「四巻」がわかりません。

清 四書を意味しているかと思う。

681 くわん金が多んぎとなつて御立身

増田 官金は座頭金ともいわれて盲人の高利金融の金であり、また盲人が官位を取得するために納める金のことといった。〔日国〕

句意はつきりしないが、意訳の作文を一つ。武士が官金を借りたが返せず、やむなく検校の娘と縁を結ぶなどでその身内となった。高官の武家にも顔の利く検校の口利きで、やがてこの武士は加増・加役されることとなった。ことのはじめの官金の借金が立身の縁起となつた、というものか。

けんきやうの娘以上へやる気也 六五
山口 礎稿の解はドラマチックで面白いが、

高利の貸金で検校まで出世した、とはとれないか。

小栗 山口説の方が素直だが、川柳で「御立身」は殆ど全て武士。とするとストーリーを作らざるを得ないか。但しこの句「史伝」で「富くじ」の項に採られているのが気になる。
山田 小栗兄ご指摘の「御立身」武士説はその通りと思います。一方「官金」はやはり座頭金と解すべきでしょう。

この両者を結びつける解は思い当たりません。問題はこの「官金」の「官」にあるように思います。柳多留二一篇は「くわん金」ですから問題ありませんが、原典の「万句合」は「官金」です。官と富の草書体の中には、似かよった書き方があり、「富」との誤読あるいは誤刻も考えられます。事実「川柳見世物考」では「富金の縁起と成つて御立身（安九智一）」とされています（二六六頁）。

更に「史伝」が「富くじ」の項に採っているのは、三面子先生も「富金」と読んだからで、これを校訂者の中西氏が訂正したのではないかとも思います。如何でしょうか。

尤も、だとしても、柳多留二一篇の本句は、「くわん金」ですから「官金」に変わりはなく、従つて、小生には解が得られません。

清 「くわん金」については山田説のような

ことと思うが、解、今ひとつわからず。

682 女房をなぜこわがると土手でいひ

増田 すでに吉原も目の先の日本堤の土手、

ここまで来ても二の足を踏む恐妻家へ「なぜ女房などを怖がる」と、悪友がきめつけて引き連れてゆく。

山口 賛。なぜと言われても恐いものは恐い。

山田 賛。でも、そういつている本人だって、単に強がっているだけでしよう。朝帰りの後を詠んだ柳句を見れば一目。

清 賛。

683 いわつかと下女をいたぶる樽ひろい

増田 「見たよ、だれかにしゃべろうかな」と酒屋の小僧が近所の出先で下女をなぶっている。下女は色ことの秘密を見られたのである。

樽ひろひあやうい恋の邪よこをする 初30

山口 食い物か小銭をせしめたのだろう。

清 賛。

684 ぎさく／＼の有るありて持つくすり箱

増田 薬箱を持って従う医者の子がギザギザ

のある襟の着物を着ている。この「ギザギザ」は後述のナマコ襟のことであろう。着物は半羽織、あるいは半纏か半合羽だろうか。乞うご教示。

この襟は、江戸では町医者の子によく見かける風俗であったのであろう。「ギザギザ」も「ギザギザ」も意は同じだが、ヨミはどちらであろうか。

「守貞漫稿」一三篇男服中合羽の解説に、京坂富民の僕（俗に字で久三と云者）主人に従ふ時は紺毛綿半合羽を着す其襟も紺毛綿を以て製レ之蓋綿を納て肉とし表より横に刺レ之号て生海鼠衿なまこありと云とある。

町医者の子の利た海鼠襟 一三四17

山口 賛。「角川古語辞典」には「合羽に付ける襟」とあり、前出の「守貞漫稿」には半合羽とあるから、この子は合羽を着ているのであろう。

清 賛。

685 かまわずとこざれといつてあくる也

増田 「えくる」は刃物を突き刺してこねる

表現。「どうぞ構わずに、遠慮などせずにお

出かねさい」と、遊びに出ようとする亭主の心肺をえぐるように女房の口のひとと差し。

山口 静かに言われると恐い。

清 賛。

686 大せつにこげと竹沢ちよく／＼いひ

増田 浄瑠璃「神靈矢口渡」や、新田神社の縁起でも知られた「太平記」種の句。新田義貞・足利尊氏ともに没した後の地方戦の一つ。鎌倉の畠山国清を攻めに義貞の息新田義興が玉川矢口渡しを渡る時、畠山からスパイとして送り込まれていた竹沢右京亮良衡が奸計をたくらんだ。義興が乗る船の底をくりぬいて栓をしておき、水夫に命じて川中でその栓を抜かせた。義興は沈む船の中で恨みを残して自害して果てた。

船が岸を離れるとき、見送る竹沢は水夫に向かつて「用心して漕げよ」などと悪ふざけをいったりしたことであろう。

呑み口が有るに義興気が付す 四四2

山口 賛。「ちよちよら」は軽薄な出まかせを言うことで、明和以後の通言だという（「角川古語」）。

清 賛。

愛染帖

新家 完司 選

紙オムツしても百まで生きてやる
松江市 三島 淑丘

(評) 迷惑をかけずポツクリと、など弱
気かどうか。這ってでも寝たきりでも、
とことん生きて、年金をたっぷり貰おう！

食欲の無いとき作るカツパ巻き
京都市 高島 啓子

(評) 胡瓜のカリツとした歯触りと爽やかな
香りが食欲をそそる。実践に基づく主婦の
知恵には、なるほどと納得させる力がある。

そうめんがにゅうめんになり秋と知る
西宮市 藤本 直

(評) 「そうめん」「にゅうめん」「ラーメン」
「うどん」「蕎麦」など等、麺類だけでもいっ
ぱい。季節ごとに違う味がある幸せな国。

入れ歯には不利なパン喰い競争だ
米子市 後藤美恵子

(評) 大笑いしただけでも外れそうになる入
れ歯。パン喰い競争はちよっと大変だが、「入
れ歯安定剤」でもつけて、がんばってみよう。

シャンプーが長持ちをする歳になり
高槻市 原 洋志

(評) 髪も少なくなり、頭皮の汗もたか
がしている。シャンプーがなかなか減らな
いのも歳のおかげ。ありがたいことである。

あなた好みになったでしようかルビー婚
貝塚市 吉道あかね

(評) あなた好みになったのか、それとも、
私好みに教育したのか？ とまあ、四十
年も連れ添うことが出来たのはメダタシ！

酒税なら日掛けてます半世紀
三田市 堀 正和

(評) 自慢ではないが、一年三百六十五日、
夜毎夜毎きっちり納めて五十年。積算する
と凄い額。税務署から表彰してもらいたい。

酒飲みを観察してるウーロン茶
札幌市 三浦 強一

(評) 「またその話かいな」とか、「そろ
そろ下手な歌が出るぞ」とか。しかしまあ、
付き合ってくただるだけでもありがたい。

わかりやすい人乾杯をくり返す
樺原市 安土 理恵

(評) 宴会前の「練習の乾杯」「本番の乾杯」
そして「改めて乾杯」。乾杯さえておれば
ご機嫌の単細胞。酔っ払いは分かりやすい。

植木屋さん主人は去年逝きました
河内長野市 水谷 正子

(評) 一年に一度お世話になる植木屋さん。

主が見えないので案じてくれたのだ。会話
体川柳の中でも異色の「哀しみ」が胸を打つ。

河内長野市 村上 直樹
生きているそれが浪費と言われそう
遠吠えの犬もひとりか月見酒

西宮市 牧渕富喜子
竹島も尖閣も出る長電話
ゆるやかにでもきっちりとき移る

松江市 石橋 芳山
存在を問うのか俺を打つ嵐
一礼二拍手助けてくれぬ神だけど

和歌山市 福井 葉摘
母の忌よあの日と同じ花が咲き
十年日記十年先の春想う

大阪府 谷口 義
もうええ歳ですほんと鈴虫死んで逝き
血圧計置いてあるのが現住所

八尾市 前田 紀雄
ガラガラボン民主自民の党首選
沖繩に未だ残ってる猿糸

佐賀県 真島久美子
浴びるほど欲しいビタミン・コラーゲン
わたくしの芯の部分に毒がある

島根県 石谷美恵子
片腕と言われハッスルしてしまふ
むずかしい何でもよいというオカズ

堺市 大和 峯二
女子サッカーあやかりたいなあの元氣

大阪市 小谷 集一
凛として仲間はずれになつてゐる

弘前市 肥後和香子
遠い日の童話だったねチヨコレート

唐津市 井上 勝視
フルムーンまた買ってくる夫婦箸

三田市 足立つな子
ままごとか別れ話が多すぎる

塩竈市 木田比呂朗
不本意な敬老の日のご招待

岸和田市 宮野みつ江
眉丸く描いて優しい女の日
眉きりりややこしいこと多い日は

弘前市 高瀬 霜石
記者会見反省なんかしてゐない
酒飲まぬ人と何から話そうか

河内長野市 穂口 正子
諸共に老けて夫婦の気味悪さ
喧嘩して夫婦が睨む西東

松山市 神野きつこ
情けない笑うしかない党首選
美しい日本を知つてゐる昭和

枚方市 寺川 弘一
賞味期限教えてくれぬ冷蔵庫
財布には金をかけない貧乏人

三田市 上田ひとみ
まだどこか他人行儀なうちの大
メシいらん明瞭ですね子のメール

三田市 田中 章子
沈まないうちにもう一度ベニスへ
米子市 成田 雨奇

京都府 榎本 宏子
喉渴く女の数が多い会
イライラは終る事ない家事のせい

島取市 岸本 宏章
広告のカッパの美女が色つばい
大阪府 梶尾 奏子

西宮市 片山 忠
ヒマとひま暇が繋がるツイッター
生ゴミのチェックまでする自己破産

和歌山市 古久保和子
なあなあで来たから腰がすぐ引ける
りんごより地球の芯はやや斜め

橿原市 居谷真理子
物忘れ多発注意報発令
終電に歳が浮き出る窓ガラス

堺市 奥 時雄
容疑者は監視カメラにあられてる
棺桶に入れた片足宙ぶらり

和歌山市 柏原 夕胡
江戸っ子に化け損なつた子が帰る
美人薄命はウソだ私が生きてゐる

島取市 倉益 一瑠
一合で足りる夫がもの足りぬ
近寄らないで下さい今日は低気圧

大阪府 森 ふみか
笑おうが泣こうが一つ歳をとる
大声で競えばいつも負けになる

豊中市 水野 黒兎
会議後にやっと妙案思いつく
鳥取県 加賀田志延

弘前市 稲見 則彦
一番は好きですたとえ猛暑日も
グーヤ棚感謝感謝の夏でした

青森市 守田 啓子
これまでを残らず入れておく壺だ
ひとりととは空しさばかり秋夜長

大阪府 津村志華子
父母の墓地ここは心のよりどころ
和歌山県 森下よりこ

堺市 加島 由一
村の付き合い減らせるところから減らす
孫の古着着て若返る野良仕事

西宮市 泉水 冴子
百葉の長に少々副作用
グーヤ胡瓜グーヤきゅうりの夏だった

四條畷市 吉岡 修
母さんのレシビにふやす塩麹
目印はNTTの電波塔

鳥取市 有沢せつ子
顔はこっち向いて心はあつちだな
晩年の父の作品です私

大阪府 森 ふみか
今も句読み書く笑う家事もする
梨かごが国道沿いに出て九月

大阪府 津村志華子
ひとりととは空しさばかり秋夜長
父母の墓地ここは心のよりどころ

和歌山県 森下よりこ
村の付き合い減らせるところから減らす
孫の古着着て若返る野良仕事

堺市 加島 由一
百葉の長に少々副作用
グーヤ胡瓜グーヤきゅうりの夏だった

西宮市 泉水 冴子
母さんのレシビにふやす塩麹
目印はNTTの電波塔

鳥取市 有沢せつ子
顔はこっち向いて心はあつちだな
晩年の父の作品です私

大阪府 津村志華子
ひとりととは空しさばかり秋夜長
父母の墓地ここは心のよりどころ

和歌山県 森下よりこ
村の付き合い減らせるところから減らす
孫の古着着て若返る野良仕事

堺市 加島 由一
百葉の長に少々副作用
グーヤ胡瓜グーヤきゅうりの夏だった

西宮市 泉水 冴子
母さんのレシビにふやす塩麹
目印はNTTの電波塔

鳥取市 有沢せつ子
顔はこっち向いて心はあつちだな
晩年の父の作品です私

大阪府 津村志華子
ひとりととは空しさばかり秋夜長
父母の墓地ここは心のよりどころ

向き合つてご飯いただくのも絆
寢屋川市 籠島 恵子

窓際へやられ斜めに社内見る
堺市 村上 玄也

歯が抜けて髪も抜けても抜けぬ欲
和歌山市 上田 紀子

花名刺一枚人生が狂う
大阪市 井丸 昌紀

顔を見ぬコミュニケーションばかり増え
鳥取県 斉尾くにこ

柵をすばと切つて始発駅
神戸市 山口 光久

晩秋の顔で晩秋を味わう
大阪市 古今堂蕉子

永田町背骨探すが見当たらぬ
米子市 高田 振作

見てみてとラインダンスの曼珠沙華
香芝市 大内 朝子

目立たない様に手を貸す友がいる
唐津市 坂本 蜂朗

家族割引き子の言いなりに買い換える
堺市 矢倉 五月

握つてみて分かる檸檬の美しさ
大阪市 田浦 實

すっぱんで顔も心も押し通す
八尾市 宮崎シマ子

鈴虫は秋を忘れていなかった
大阪市 太田としお

かくしゃくとした年寄りは疎ましい
鳥取市 高浜 勇

元カレはどうぞ不幸でいてほしい
岡山市 工藤千代子

メタリスト苦勞を思い貰い泣き
藤井寺市 肥山 一文

安くて旨いすぐひつかかるおばちゃんだ
大阪市 柴本ばつは

ムンクさん貴方の叫び地球です
大阪市 江島谷勝弘

夏さなか引つ越しましたへとへとに
寝屋川市 森 茜

言い過ぎを繕う世辞を選っている
高槻市 片山かずお

集まれば旦那肴に盛りあがる
京都市 三宅 満子

飽食に慣れたヒト科の食べ残し
大和郡山市 坊農 柳弘

暦には勝てず猛暑もへこたれる
鳥取市 岸本 孝子

達者かと聞かれきょんとしたる孫
堺市 大隅 克博

なまくらで思い出話ばかりする
藤井寺市 太田扶美代

マイク持つ仕種二次会可決する
三田市 北野 哲男

ほろ酔いでビリケンさんに無理願う
大阪市 板東 倫子

趣味増えて友達増えて多忙なり
唐津市 吉富 節子

冗談の言える空気で靴を脱ぐ
枚方市 伊達 郁夫

失礼があるかも私更年期
鳥取市 福西 茶子

大掃除まだ捨てられぬ定期券
大阪市 高杉 力

早起きの癖が退職後も続く
和歌山市 喜田 准一

仲良しのずばり発言いつも待つ
三田市 辻 開子

賑やかな女が過去を喋らない
神戸市 山崎 武彦

コーヒーをいつまで混ぜる照れ隠し
和歌山市 武本 碧

時代物だが臓器提供書にサイン
河内長野市 坂上 淳司

政治家になりたいなんて思わない
堺市 志田 千代

忘れ上手と違うほんとに忘れてる
八尾市 吉村 一風

町内に一言居士が越してきた
篠山市 酒井 真由

これはダメ選者のような顔で妻
倉吉市 中村 毅

ようそんなと思わない日が無いニュース
大阪市 大川 桃花

唐津市 山口 高明
花言葉知って木槿が好きになる

池田市 栗田 久子
無花果で秋を感じる昼下がり

香南市 桑名 孝雄
ママ女将どこが違う使い分け

藤井寺市 鴨谷瑠美子
アホやなあと言いつつは温かい

鳥取市 土橋はるお
婆さんの煎じ薬はよう効くぜ

藤井寺市 田付 絹枝
日焼けした麦藁帽子暇をやる

八尾市 田邊 浩三
密かな夢遂に叶わぬ一輪車

和歌山市 田中 みね
わたしに無縁それは指輪にイヤリング

大阪市 坂 裕之
身の丈にあった悩みは持つている

高槻市 富田 保子
実家へは明るい話題提げて行く

川西市 山口 不動
身体中加齢加齢の風が吹く

高知市 小川てるみ
葬儀社も介護施設も同じ地区

鳥取市 近藤 秋星
秋はすぐ冬になるから好きでない

海南市 堂上 泰女
守宮の無事確かめ戸戸そろり閉め

鳥取市 永原 昌鼓
バラの束期待できない誕生日

三田市 雑賀 一泉
終電車コスプレ見とれ乗り過ぐす

八尾市 宮西 弥生
発想を変えると軽くなる拳

今治市 渡邊伊津志
残像を確かめに行くクラス会

和歌山市 玉置 当代
生きてゆく辛さ笑顔でまぎらわす

羽曳野市 吉村久仁雄
金銀銅メダルは同じひもの色

紀の川市 北山 絹子
競争心持っているから気が若い

堺市 羽田野洋介
賑やかが好きだったねと通夜の席

岡山市 藤成 操江
出来合いを並べちよつぱり罪悪感

堺市 遠山 唯教
鉦太鼓で童心になる村まつり

紀の川市 楠原 富子
後半戦プラス志向で生きている

奈良市 辻内げんえい
筆不精でもメールならすぐ打てる

米子市 中原 章子
歩いてるうちに閃きやってくる

大阪市 津守 柳伸
カレンダーバリツとファイト垣間見る

岸和田市 雪本 珠子
十六夜の月も弱音を吐いている

鳥取市 中宇地秀四
親孝行せずに今ではされる歳

篠山市 遠山 可住
新聞に空白がない完璧さ

富田林市 中井 アキ
何時からか小銭数える暮らし向き

大阪府 初山 隆盛
詩を書けば転んだベンも秋の音

三田市 尾崎 一子
犬欲しい赤ちゃんはもう無理だつて

岸和田市 増田 隆昭
年齢を隠さぬママへ客が寄る

鳥取県 山下 節子
森林浴心のエステすつきりと

宇都市 平田 実男
美人には少うし甘いのだ自慢

神戸市 山田婦美子
夕立が街全体を塗りかえる

河内長野市 渡邊 修
奥の手でボンボン騙す特殊詐欺

鳥取県 細田 裕花
空っぽになって休日畑仕事

堺市 荻野 像山
晩酌へ昼寝で時間つぶしてる

奈良市 加門 萌子
新聞を二誌読むだけで昼になる

共選欄

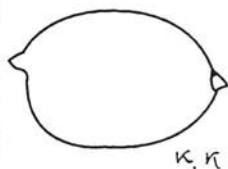
檸檬

檸檬

抄

(薫風書、カットとも)

(投句 756句)



「組む」

奥田 みつ子 選

櫓くみ復興祝う大漁旗
腕組みの後ろ姿に父の影
ああ戦後そっぽを向いた隣組
組紐は絹と心の織りなす美
組み紐にむらさき足せば母の彩
手を組んだスクエアダンスよく弾む
腕組んで考える人眠る人
反原発肩を組まずにいられない
オスブレレイと組んだ日本の疑似平和
組み合わせデコボコだから面白い
弱肉強食この組合せこの定め
嫁と組む家内円満恙無い
バージンロード娘と組んだ晴れ舞台
阿と咩が合ってベアーは勝ち進む
しなやかに組んだ相手と舞うワルツ

箕面市 寺井 柳童
枚方市 小林 わこ
田辺市 岡本 昇
奈良市 阿部 紀子
藤井寺市 鴨谷瑠美子
京都市 坪井 孝一
堺市 澤井 敏治
弘前市 福士 慕情
堺市 柿花 和夫
大阪府 神野千恵子
大阪市 柴本ばっは
尼崎市 小池 幸子
河内長野市 村上 直樹
香南市 桑名 孝雄
西宮市 片山 忠

「組む」

森山 盛桜 選

肩を組むふと青春が通り過ぎ
肩凝らぬ人と組めたら最高だ
組体操一番下のまま庶民
組む前にあの形相は怖気付く
分からぬものは座禅組んでも分らない
組み替えてもしもを見たいDNA
一枚の論吉と明日のくらし組む
あの人と手を組まれてはかなわな
サッカーの監督腕組みがお好き
指を組ませて老母の介護の幕おろす
多数派工作イワシの群れにいるイワシ
取っ組んだつものりの露伴投げ出した
いつも組む男と星座合いません
私から腕を組んだの待てなくて
白と組む玉虫色になりたくて

西宮市 藤本 直
篠屋川市 籠島 恵子
豊中市 水野 黒兎
鳥取県 加賀田志延
大阪府 太田としお
明石市 梶谷 和郎
鳥取市 福西 茶子
佐渡市 高野 不二
堺市 澤井 敏治
米子市 政岡未延子
弘前市 高瀬 霜石
大阪市 川端 一步
和泉市 横山 捷也
三田市 久保田千代
芦屋市 黒田 能子

妻と組むテニスおしどりとはいかず
腕組みし妻家計簿とにらめっこ
家事育児にがつぶり四つの共稼ぎ
白と組む玉虫色になりたくて
五十年組んで夫婦の金メダル
組んでみて始めて知ったお人柄
肩を組む小さな会のいい仲間
どんぐりが十人組んで狼煙あげ
組体操真つ赤な顔に支えられ
組み体操一番下で笑う孫
がつちりと組んだ柔道見たい夏
スクラムを組めば力が湧いて来る
スクラムを組むと倍増するファイト
スクラムを組むと心が束になる
蟻でさえ徒党を組めば山動く
妥協するつもりで腕を組み直す
信頼関係足場組む人登る人
組み易いと思られる私お人好し
百までを達者で生きた予定組む
予定組み五人兄妹母を見る
親子連れ互いに腕を組みながら
後悔はしてない君と組んだこと
徒党組む皆似たような顔となる

大阪市	高杉	力
和歌山市	磯部	義雄
河内長野市	坂上	淳司
晋屋市	黒田	能子
鳥取市	春木圭一郎	
鳥取市	岸本	孝子
鳥取市	有沢せつ子	
鳥取市	夏目	一粹
西宮市	藤本	直
鳥取市	前田	楓花
米子市	生田	寒之
和歌山市	喜田	准一
大阪市	津守	柳伸
香芝市	大内	朝子
和歌山市	武本	碧
神戸市	山崎	武彦
弘前市	高瀬	霜石
和泉市	横山	捷也
篠山市	遠山	可住
豊中市	松尾美智代	
大阪市	山崎	君子
橿原市	安土	理恵
出雲市	竹治	かし

夫婦ではなさそう腕を組む二人
肩を組み声をからしたお下げ髪
思春期と取り組みました夏休み
そしてまた小さな幸を組み立てる
△も×も手を組み丸くする
腕組みの中で熟成する思考
組む程の予定はないが丸印
背伸びしてやつとあなたと肩を組む
組み合わせAとOなら勝てるはず
あの頃は組体操が出来たのに
野仏と組んで絵になる曼殊沙華
バラの花組み込んでおくエンディング
老いの坂手押車と組むとする
土と組む私の余生花盛り
就活に取り組む孫の秋の陣
腕組んでください転びそうだから
昭和史の記録に残す隣組
腕組みがとけてうたた寝から覚める
サイン無用餓鬼の頃からバッテリー
よく見れば想定外の組み合わせ
お相手は神様でしたありがとう
仕組まれた狐狸のいる社会
犬と猿組んだからこそ鬼退治

堺市	羽田野洋介
河内長野市	大島 友子
尼崎市	長浜 美籠
青森県	松山 芳生
松江市	藤井 寿代
枚方市	海老池 洋
和歌山市	坂部紀久子
鳥取県	斉尾くにこ
生駒市	飛永ふりこ
岸和田市	森元ふみよ
海南市	堂上 泰女
松江市	石橋 芳山
尼崎市	小池 幸子
田辺市	小川 イセ
和歌山県	森下よりこ
岡山市	工藤千代子
奈良市	岩本 浩二
三田市	北野 哲男
黒石市	佐藤 古拙
高知県	小澤 幸泉
弘前市	肥後和香子
河内長野市	谷 久美子
奈良市	大久保眞澄

手を組めば強い味方のライバルで
川柳と組んでスキップしています
腕組みしたらアイデアはつと閃いた
思考組み替えると空が広くなる

座禅組む脳裏五欲の渦が巻く

座禅組むその空間にある悟り

悔しさを昇華させたい座禅組む

お相手は神様でしたありがと

勝ちました組んだ相手が君だから

組み替えの遺伝子神の手を離れ

少子化に神様悩む組み合わせ

やんちゃ坊主に還り肩組むクラス会

肩組んで若さを偲ぶ歌が出る

肩組んだ同期の桜散つてゆく

考えの違う人とも組んでみる

四つに組む父がいつしか小さくなり

逆風も腕を組んだら怖くない

不況にも耐える足場をしかと組む

無二の友組んだその手が暖かい

秀句

ふらり降りた駅で人生組み直す

前向きに取組む汗に無駄はない

青空と組んで弾ける鼓笛隊

大洲市 花岡 順子

三田市 上垣キヨミ

堺市 源田八千代

西予市 黒田 茂代

奈良市 米田 恭昌

大和郡山市 坊農 柳弘

堺市 矢倉 五月

弘前市 肥後和香子

三田市 田中 章子

福島県 七ツ森客山

松江市 小川 注湖

高槻市 片山かずお

姫路市 古川 奮水

東大阪市 佐々木満作

京都市 高島 啓子

神戸市 木村貴代子

大阪市 川端 一步

茨木市 藤井 正雄

高槻市 島田千鶴子

奈良県 渡辺 富子

高槻市 富田 保子

海南市 堂上 泰女

敵と組む緊張感がたまらない

ぼんやりの私と組んでああごめん

隊列に迷彩服がたくましい

組んでいた腕をポロリと外される

徒党組む皆似たような顔となる

ドングリと組んでストレスなどはない

貧乏に腕を組まれてほどこけない

ありがと真ん中辺に矢倉組む

心根の乾いた人と組む不安

長い脚組んで席取るエイリアン

座禅組む腹立つことを思い出す

組み替えた足で私を指図する

明日はあす静かに老いと取り組まん

三つ組みをしてあげる間はおとなしい

指先が悪させぬよう腕を組む

組み合つてやつとわかつた体温差

腕組みのあとの形のロダン像

少年と四つに組んでる信号機

鉄骨を組む獐犢な陽の下で

秀句

円陣を組んでのつべらぼうになる

羚羊のような足なら組みなさい

腕組みの女超えられない壁だ

鳥取市 池澤 大鯨

河内長野市 水谷 正子

砂川市 大橋 政良

富田林市 中井 アキ

出雲市 竹治かし

羽曳野市 徳山みつこ

神戸市 山根 弘子

西脇市 七反田順子

富田林市 古田 千華

京都市 清水 英旺

高槻市 富田 保子

大阪市 古今堂蕉子

松江市 津村志華子

池田市 川本 畔

鳥取市 倉益 一瑠

豊中市 江見 見清

松山市 高橋 宏臣

榎原市 居谷真理子

青森市 守田 啓子

高石市 浅野 房子

佐賀県 真島久美子



(十) 江戸東京博物館へ

J R 亀戸駅から西へ二つ目が両国駅だ。駅の北側に国技館と江戸東京博物館がある。この辺りは御竹蔵があつたところ、はじめは竹や材木が置かれていたが、幕末には米蔵に変わつていったという。

国技館の東側にある江戸東京博物館はバカでかい建物で、一階は駐車場、二階三階は吹き通して「東京広場」と名付けられていた。展示場は六階までエスカレーターで行く。館内には、お江戸日本橋が実物の二分の一の大きさに架けられ、対岸には江戸城と町割りの模型が展示されていた。

日本橋の下、階下には江戸時代の芝居小屋中村座と文明開化時の朝野新聞社が実物大で展示されている。建物の中に建物を展示する手法は、規模こそ違ふが深川江戸資料館と同じような造りであつたし、天六にある「大阪市立住まいのミュージアム館」もこの手法を取り入れているよう思われる。博物館を見終わつたら午後五時になつてた。

江戸博物館を出て、J R 両国駅の貸ロッカーに預けていたバッグを取り出し、大川沿いの両国パークホテルに宿をとつた。少し早いとは思つたが夕食に出る。J R 両国駅西側にあるピアステーションに決めていた。それは宮部みゆきが『平成お徒歩日記』（新潮文庫）の中で「地ビールを飲ませる美味しなお店」と紹介していたからだ。地ビールは美味しかったの

で二杯も飲んだが、一人で飲むには間がもてず。食事も含めてわずか三十分ほどでホテルに戻つてしまった。

今日、どのくらい歩いたのか地図を計つてみると四キロ四方の枠内で約十七キロも歩いている。本所深川を歩いて感じたことは、江戸時代の建物は全て戦災で焼失しており、残っているのは燃えないお墓と石碑、昭和の水害後に偶然発見された芭蕉が愛していたという、蛙の置石ぐらいであつた。

しかし、藤沢周平をはじめ他の作家たちが、いろいろな資料があつたとしても、江戸時代の本所深川の市井を、これだけ詳しく描く創作力には驚きを感じてしまった。

文中の古川柳は、「俳風柳多留百全集・索引編」（三省堂）の十三万三千六百句の中から選んだものである。最後に二句紹介する。

地震にうろたへて蚊屋を出せ蚊屋をだせ

江戸ならば深川辺りに喜撰住み

明日は、せっかく東京にきたのだから、都電荒川線、地下鉄大江戸線、国立博物館と寅さんの柴又帝釈天に行くつもりだが、天気予報は雨であつた。

参考文献

- 「江戸切絵図で見る幕末人物・事件散歩」（人文社）
- 「江東区の史跡を訪ねて」（江東区企画部広報課発行）
- 「俳諧柳多留百人全集・索引篇」（三省堂）

(完)

「芋」

村上直樹選



芋名月風情を醸す芒の穂
少子化担当里芋に任せよう
隠蔽を芋蔓式に出す自殺
タロ芋に絆たくして移民の血
屋上で芋に水やる参観日
いもカボチャ昭和の根っ子生きている
ふかし芋貧しい戦後語り出す
芋洗うラッシュに耐えて宮仕え
適材適所男爵芋とメークイン
芋判も象牙も押せば同じ顔
切干しを火鉢で囲む回顧録
親芋の苦勞が解る子沢山
掘り出した芋それぞれの曲線美
じゃがいもの芽にそれぞれの小宇宙
じゃが芋で居てほしいのに変わる君
真っ白な皿で小芋がよくはしゃぐ
芋男妻はかばちゃで仲が良い
まあ一杯話題を添える衣かつぎ
顔のつや元気の元はトロロ芋
古伊万里の鉢に芋盛る京料理

吹田市 須磨 勝恵
八尾市 村上ミツ子
海田市 堂上 泰女
葛屋川市 小谷 滋彦
唐津市 仁部 四郎
札幌市 小沢 淳
松江市 河西 草庵
和歌山市 喜田 准一
弘前市 高瀬 霜石
明石市 桃谷 和郎
大山市 吉田 幸子
和歌山市 平田 元三
鳥取市 福西 茶子
高槻市 島田千鶴子
鳥取県 齊尾くにこ
松江市 三島 崧丘
河内長野市 谷 久美子
唐津市 坂本 蜂朗
大阪市 奥村 五月
八尾市 宮西 弥生

僕んちの肉ジャガ芋が威張ってる
スイーツと呼ばれ焼芋照れている
チップスを頬ばりながら文庫本
ポテトチップス新地の皿でそり返り
ジャガ芋もポテトと言えば孫も食い
芋煮会どなたもおいででつかい輪
女です芋タコ南瓜今も好き
焼芋を妻が少女の顔で食べ
長芋の粘りが欲しい老いの午後
母という役目を終えた芋のつる
芋粥が思い出させる母の事
肉ジャガは妻引き継いだ母の味
佳
私にも小芋ぐらいはある粘り
芋虫のふりして避ける向かい風
焼き芋の甘いかおりよ利那主義
ジャガ芋の窪みで学び生きていること
蝶になる夢を芋虫捨て切れず
人
ふかし芋の恩を忘れず生きている
地
みちのくの情ほのはのと芋煮会
天
芋ですが我が道なりに生きてゆく
軸
茜雲喜寿なお伸びる芋の蔓

大和郡山市 坊農 柳弘
河内長野市 木見谷孝代
黒石市 佐藤 古拙
大阪市 岩崎 公誠
高槻市 富田 美義
大山市 金子美千代
三田市 辻 開子
茨木市 藤井 正雄
鳥取市 永原 昌鼓
瀬戸内市 東横ますみ
シドニー 坂上のり子
札幌市 三浦 強一
貝塚市 吉道あかね
岡山市 工藤千代子
紀の川市 宇野 幹子
青森県 松山 芳生
和歌山市 武本 碧
羽曳野市 徳山みつこ
大阪市 津村志津子
弘前市 岡本 花匠

「週末」

山田 葉子 選



週末の値引き逃がさぬ市場籠
午前さま週末だけに着るパジャマ
塾通いの子には土日も縁がない
週末はイエローカード出る家計
週末のプランに少し花を買う
週末は友と屋台で錆おとし
ウィークエンド特にときめくこともなし
企業戦士が終末イクメンにかわる
手料理は週末だけの共稼ぎ
週末なら空いていますと見栄を張る
週末に備え財布の紐しめる
少年に戻る週末プラモデル
メビウスの帯みたいです週末も
週末は時計大きな音を出す
週末になると釣り馬鹿血が騒ぐ
週末に限って熱を出す子供
節電に週末ネオンしめり勝ち
居酒屋ではしゃぎ明日は山ガール
週末の疲れ会社で癒してる
週末はやっと一人になれるとき

八尾市 高杉 千歩
米子市 吉田 陽子
鳥取市 岸本 宏章
大阪府 桑田ゆきの
藤井寺市 太田扶美代
札幌市 小沢 淳
京都市 三宅 満子
八尾市 村上ミツ子
和泉市 横山 捷也
大阪市 板東 倫子
鳥取市 夏目 一粹
大阪市 高杉 力
四条畠市 吉岡 修
松江市 川本 畔
大洲市 中居 善信
堺市 志田 千代
札幌市 三浦 強一
河内長野市 松岡 篤
神戸市 伊勢田 毅
大洲市 花岡 順子

とつときの週末なのに雨が降る
週末はローカル線で一人旅
遠距離の恋に週末待ち遠し
週末はいつものんびり屋台酒
週末の支払機には長い列
究極の幸せ週末のゴロ寝
笑い袋連れて週末母見舞う
週末の遊び疲れが見える顔
チョイ悪になるぞと土曜日の日暮
週末婚ドアを開ければ深い海
土曜日は鼻唄が出る仕舞風呂
週末に鍵っ子母を離さない
佳
週末になると愛車がはしゃぎ出す
週末に早起きをして叱られる
週末は食卓に花ロゼワイン
にんげんに戻る土曜日日曜日
週末の校舎部活の声響く
人
週末の時間ふんわり浮いている
地
週末にやつと勝負の服を脱ぐ
天
念入りにマニキュア君のノック待つ
軸
週末に履きたい靴が待っている

大和郡山 坊農 柳弘
東大阪市 佐々木満作
大阪府 米澤 俣子
大阪市 岩崎 公誠
堺市 遠山 唯教
和歌山市 武本 碧
鳥取県 平木 公子
三田市 北野 哲男
堺市 矢倉 五月
青森市 守田 啓子
弘前市 福士 慕情
大阪市 伏見 雅明
松江市 三島 淞丘
三田市 上垣キヨミ
豊中市 水野 黒兎
弘前市 高瀬 霜石
堺市 村上 玄也
和歌山市 柏原 夕胡
青森県 松山 芳生
奈良県 渡辺 富子

「きびきび」

森 松 まつお 選



きびきびと仕事しなさい永田町
速やかに返して欲しい拉致の入
行進の立体交差拍手する
へとへとになって始まるマーチング
着飾ってカルチャーはしごしています
助手席の妻がきびきび出すサイン
さて今日も化粧厚めでキビキビと
母が来る急にきびきび動く妻
先生もきびきび授業参観日
きびきびの動きを少し疎まれる
臓器移植きびきびリレーする善意
友だちがときどき巻いてくれるネジ
スコップもきびきびとした自衛隊
運転士の指呼聞きたくて先頭車
返事より先に体が動いてる
反骨を通す夫だ作業着だ
百歳になっても背筋伸びている
きびきびと無口な人がよく動く
きびきびと節電だけはしてる妻
リーダーの指示が隅々まで届く

三田市	堀	正和
奈良県	渡辺	富子
弘前市	高森	一吞
弘前市	稲見	則彦
鳥取市	岸本	孝子
松江市	三島	淞丘
高槻市	富田	美義
瀬戸内市	東横ますみ	
枚方市	寺川	弘一
藤井寺市	太田扶美代	
東大阪市	北村	賢子
弘前市	高瀬	霜石
大阪市	伏見	雅明
河内長野市	坂上	淳司
奈良市	大久保眞澄	
大阪市	柴本ばっは	
和歌山市	柏原	夕胡
鳥取市	岸本	宏章
塩竈市	木田比呂朗	
弘前市	福士	慕情

きびきびと笑顔をそえて取り仕切る
新人のきびきびとした所作弾む
ハイヒールできびきび子供まで抱いて
パンダから見れば人間動き過ぎ
きびきびの極みタンゴのフルターン
晩酌が長いさつさと仕舞う妻
自立してきびきび頂点のみ目指す
きびきびと仕切る夫の一周忌
きびきびと動くあなたが眩しくて
ダルビッシュ勝ち負け別に気持ちよい
負け試合でもきびきびとチアガール
来客があるとわが家は引きしまる

佳

コンビニに元氣やる気がレジに居る
きびきびと動けば悩み消えていた
きびきびと家事外出をするらしい
きびきびのブレー女神がほほえんだ
きびきびとした廊下は光ってた

人

神様のトイレきびきび掃除する

地

きびきびもいいが色気が無過ぎる

天

きびきびとしている方がアルバイト

軸

きびきびと脳が働く酒二合

大阪府	榎本日の出
豊中市	水野 黒兎
八尾市	宮崎シマ子
可見市	板山まみ子
西宮市	藤本 直
鳥取県	西谷 悦子
八尾市	宮西 弥生
藤井寺市	鈴木いさお
和歌山市	坂部かずみ
大阪府	江島谷勝弘
堺市	奥 時雄
羽曳野市	徳山みつこ
岡山市	工藤千代子
和歌山市	上田 紀子
堺市	志田 千代
貝塚市	吉道あかね
青森市	守田 啓子
鳥取県	細田 裕花
高槻市	片山かずお
三田市	北野 哲男



誌上大会にチャレンジを！

第一回の「春の川柳塔まつり誌上大会」が今年の二月二十日締め切りで開催されました。そして、五月号に入選句が発表されました。ご自分の句を見つけて、思わずガッツポーズをされた方、予想外の不振で意気消沈してしまった方など、それぞれのころを揺らせた五月号だったと思います。

当日に出席する川柳大会は、リアルタイムで秀句に接することができ、友人たちとも交流できるという長所があります。一方、誌上大会は、外出が困難な人でも自宅に居ながら簡単に参加できることが最大の長所であり、発表誌が届くまでの期待感はずいぶん独特のものがあります。

ただ、参加した人にとっては、期待に胸を膨らませて待っていた発表誌であつたでしょうが、参加していない人にとっては、期待感も胸のときめきもない普通の冊子と同じだったのではないかと推定いたします。

そのような意味で、前回はバスされた方々も、第二回の誌上大会には勇気を出して参加されるようにお勧めいたします。参加するだけで、「発表誌を待ち焦がれる」というトキメキを得ることができます。そして、たとえ成績は不振であっても、参加しておれば、ご自分の句と比較して「私のほうがいいのにな」とか「ああ、やっぱり力不足であつた」など等、身を入れて発表誌に向かい合うことができます。不参加であれば傍観者に過ぎず力も入りません。日頃の引つ込み思案から一歩踏み出して、今回は是非ご参加ください。

さて、この誌上大会で、私は「旅」の選を担当させていただきますました。そして、私が特選で抜いたのは、

いい旅だったとキーホルダーを買う

内藤 憲彦

という句でした。ところが、この句について、お二人の方から「どこが良いのかわからない」として、「私には読み取れませんが、表面上の意味だけでなく、何か深い意味があるのでしょか？」というご意見やご質問をいただきました。率直にご意見くださりましてありがとうございます。お二人の方が疑問を持たれたということは、同じように感じている人は、もっとおられるのではないかと思いますので、この機会に特選とした根拠をご説明いたします。

旅の意義はいろいろあるでしょうが、心身をリフレッシュするというのが一つです。作者はそのような旅に出かけて「いい旅だった」と大いに満足した。そして、その記念として買い求めたのが、高額の陶磁器や名産品などではなく、五百円そこそこのキーホルダー（もちろん、行楽地の名が刻まれていて記念になるもの）であつた。

いわゆる川柳の三要素（うがち・おかしみ・かるみ）の内の「かるみ」をメインにしながら、ユーモアを持たせているところ。特に、高価なものではなく「キーホルダー」に「軽い自嘲」が含まれているところを評価しました。

形は五七五ではなく八音九音です。これは、「句またがり」あるいは「胴切り」とも呼ばれていて定型十七音が変化したものとみなされています。したがって、形としては問題ないと判断いたしました。今後とも、ご意見やご質問など、ご遠慮なくお寄せ下さいますようお願い申し上げます。

初歩教室

題 — コーヒー

鈴木公弘

文明開化後、日本人をとりこにしていた
コーヒー。私の知人に玉露・煎茶は飲むが
コーヒーは大嫌いという方がおられます。コー
ヒー嫌いの方には向かない出題だと思いま
したが、皆様それなりに場面を設定して描い
てくださっており、ホツとしました。

「し」について

国語辞典の動詞活用表が掲載された頁を開
き「サ行変格」という所をご覧ください。そ
こには四つ動詞が載っています。次に「未然形」
「連用形」という所を見てください。双方と
も「し」と書いてあります（「感ずる」は除
きます）。この「し」は、未然形（現時点で
は否定的な状態）の場合も、連用形（肯定
的な状態）の場合も、同じ「し」を使うこと
になる、という意味です。たとえば「勉強す
る」を下5部分に置いてみましょう。当然な
がら「勉強し」となります。ところが「勉強

し」では勉強していない（未然形）か、勉強
している（連用形）か、判別できません。そ
こで作者の意思を明確にするため、工夫しな
ければいけません。紙幅の都合上、結論だけ
申しますが、勉強をしていれば「勉強す」ま
たは「勉強する」という表記をしてください。
逆に勉強しない場合には「勉強する」という
言葉自体を上の部分、または中の部分に移動
させて作り直すほうがよいでしょう。

「少し手を入れる必要があった句」

原 コーヒーで時間忘れて御喋りし（福）秀子
添 コーヒーに時間忘れて御喋りす

原 即席のコーヒー二回飲む日課 秋 星
添 即席のコーヒーだけ飲む日課

何杯飲むかより、日課にしていることを
強調したほうがよいでしょう。

原 どれえらぶ種類多過ぎ缶コーヒー 雅 信
添 どれ選ぶ種類の多い缶コーヒ

原 禁煙でコーヒータイム増えたかな 和 幸
添 禁煙へコーヒータイム増えたかな

「で」という言葉は状況や手段などを説
明するときに使われます（説明句になりが
ちです）。ご注意ください。

原 オーターに恰好よろしくカプチーノ 一 泉
添 オーターに恰好つけてカプチーノ

原 モーニングコーヒー会話のはじまり 安 子
添 モーニングコーヒー活にして立とう

原 コーヒーを美しい嘘かきませる とも 湖
添 コーヒーへ美しい嘘かき混ぜる

原 コーヒーと新聞有れば朝が来る（徳）正 子
添 コーヒーに朝刊今日が始まりぬ

原 車に無糖コーヒータム乗車 松 風
添 コーヒーとガム助手席に乗車させ

原 コーヒーで聞く話かよ恋はなし 和 香子
添 恋はなし聞く話かよ恋はなし

原 御先祖様たまにコーヒ如何ですか 道 子
添 ご先祖様たまにコーヒ如何です

原 運転中眠気覚しは濃いコーヒ 冷 子
添 濃いコーヒが運転の目を覚ます

濃い珈琲を強調するため、例外形の
755の作りに変えました。

原 コーヒーが独り暮らしの事始め 正 二
添 コーヒーが独り暮らしの事始め

着眼は入選句と同格です。
原 焙煎の香りにひかれクラシック 史 郎
添 焙煎の香に誘われてクラシック

原 脳活へコーヒータイムゆつたりと 律 子
添 脳活へコーヒータイムゆつくりと

原 コーヒーにも語りかけてる話好き 宏 造
添 コーヒーと語り始める話好き

原 コーヒーは無口な人に似合つてゐる 真砂子
添 コーヒーは無口な人に合いそうだ

原 朝いちと午後のおやつでコーヒのむ記久乃

添 朝と飲むコーヒー午後のおやつにも

原 コーヒーに夢を語つた青春譜 孝明

添 コーヒーと青春の夢語り合う

原 仕事終えアイスコーヒー温い笑み(畑)節子

添 仕事終えアイスコーヒー温く飲む

原 カラオケに必ずついているコーヒ 美紗子

添 コーヒーが出るカラオケの店へ行く

原 趣味仲間と遊ぶコーヒーブレイク(株)玲子

添 趣味仲間コーヒーだけで羽目外す

原 おいコーヒー朝から夫の声で起き(山)久子

添 おいコーヒー朝から夫やかましい

原 朝食の珈琲一杯元氣出す(石)久子

添 一杯のコーヒー朝の氣をくれる

「珈琲一杯」は8音字です。

原 猛暑にも熱いコーヒーしんとする 温子

添 猛暑など負けぬコーヒー熱くする

原 老いの友四方山話コーヒーで 勝治

添 よもやま話友とコーヒー飲みながら

【入選句】

コーヒータム疲れた頭休ませる 登美子

コーヒは妻より長いおつきあい 一文

コーヒー通パイプ片手にベレー帽 青生

氣に入りのコーヒーカップうれしい日 洋子

コーヒ豆ブレンド重ね人の味 定廣

コーヒを飲んで大人の味を知る 雄太

植込みでコーヒー缶が泣いている 義雄

添「植え込みのコーヒー缶が泣いている」

コーヒーへ無抵抗にも誘われる 志延

添「コーヒーへ抵抗もなく誘われる」

投稿に濃いコーヒーで氣合入れ 克三

添「投稿へ濃いコーヒーの氣合入れ」

コーヒーが重い話の口火切り 憲

亡き夫のコーヒー恋し鬱の朝

コーヒーのながさ男の嘘かばう 利子

お揃いのコーヒークップ夢がある(楠)富子

ランチでは必ずコーヒ付きメニュー 開子

コーヒーを入れてもらえ有難さ(高)弥生

ポトルコーヒー熱中症に効いている 英男

コーヒーも飲まず見つめる初デート 晴雄

ブラックと格好付けた初デート 絹枝

真つ先にコーヒールンバ浮かぶ歳(山)妙子

一仕事終えてコーヒー飲む至福 紀雄

限定のサービスコーヒ二度並ぶ(渡)修

コーヒ入れ大工ねぎらう午後三時(宮)俊子

目も合わせずコーヒー飲んでいる窓辺のり子

眺望も味屋上のカフェテラス 元三

隠岐へ行く船路見下ろすカフェテラス 寒之

十パイのコーヒー呑んで彼を待つ 紀美恵

コーヒーが入りましたと亡夫を呼ぶ 治子

アンティークな店ブラックに身を沈めひろ子

一杯のコーヒーだけの仲直り 孔一

【佳句】

コーヒーは夜勤がんばるパートナー 大子

エスプレッソ頼んでみたが同じ味 志津子

失恋をした日は苦いモカを飲む きつこ

ミルを挽く豆と愛憎ブレンドに 明美

暇なのかコーヒータム多過ぎる 裕美

コーヒーは濃く熱くして秋の朝 こそえ

カプチーノ琥珀の渦が夢さそう 滋彦

大人ぶり砂糖入れずに飲んだつけ(栢)恵子

出会いから別離まで知る角のカフェ 心映

而してコーヒーをのむ世は平和 ふみか

【今月の推せん句】

コーヒーの底でもがいている砂糖 山本 エミ

たのみごとかるくコーヒー飲みながら 後藤 宏之

平穩な朝のコーヒー香り立つ 大島 友子

【私の句】

コーヒーの空き缶に季を挿して置く

望郷のコーヒー豆と徹夜する

(登載漏れの方は役員が添削して返却します)

川柳塔鑑賞

同人吟 川端 一步

—10月号から—

初めて、秀句鑑賞の命を受けて「どう書いたらいいのですか」聞いたのは、前たもつ先輩。「自分の思う通りの選句をして、自分の好きなように書いたら良い」と教えて下さった。そして注意事項も一つ二つ教えていただいた。

路郎先生は、選者の心得に「見附けの新鮮なものを選ぶべし」と言われている。その視点で、一七六〇句熟読させていただいた。

以前にも書いたとおり、初心者ベテランを問わずこのページは最高のテキスト教材になると信じている。いつも重荷だと思いつつ心して体当りした。

一を聞き十を知る人などいない

高瀬 霜 石

私もそう思いますが、何故か聖徳太子が出てくる。伝説は所詮後人がつくったもの。為政者の都合のよいように……。ひがんで見れば一人十人分働けということか、或いは一を

聞いたら十の知恵を出せということか。

鬼灯の一枝挿して秋にする

須磨 活恵

鬼灯が一日いちにち変化して秋になってゆく風情はまた格別。芭蕉も「鬼燈は実も葉も殻も紅葉かな」と詠んでいる。下五が綺麗。

「おはよう」と言おう勇氣が湧いてくる

柏原 夕胡

近頃はご近所でも家族でもあいさつが少ない。就職した時に「仕事よりあいさつが先だ」と教えられた。句を实践して世の中を明るくしたいもの。

つばめの子からだいっぱい口となる

鈴木 一弘

二回じっくり読んで、ウーン旨い、思わず叫んでいた。つばめの子の表情が浮かぶ。おまんまを早くと言っているのか、名吟に解説など不用。

夕焼けにドボルザークの曲流る

井上 じろう

音楽の知識がなくて取り上げるのはおこがましいが「わが母の教え給いし歌」がたまたま脳裡に焼きついていたので。

笑って笑って笑ってさらつびん

居谷 真理子

泣くも笑うも一度だけの人生。ならばこの句のように生きたいもの。さらつびんに大きな喜びがあると感じた。常に現代川柳探究の先頭に立っている人だ。

忍従のほほ笑みだつてあるのです

升成 好

作者の思いは分かりませんが、句を読んでもつい相づちを打ってしまう。将棋を指しながら「辛抱する木に金がある」と言う時がある。心情的には同じようなものでしょうか。

ライバルと競えば深くなる絆

福士 慕情

ライバルを辞書で調べると「競争相手」と一言で片づけられている。実際はもっと複雑で深いものだ。句のように深い絆の友、時には師弟の様な関係、病の時に訪ね合うことも、人生の伴侶の役もしてくれる。

きつと僕の良心だろつ喰つてる

吉岡 修

昨今の世相、良心の行き場置き場がとかく

窮屈だ。温厚実直な作者が唸るとはよほどの事、さて唸らせている外敵は何だろう。

いい本をたくさん読んでバカになろ

早川 遡行

或る作家が「本を読むのは愉しむためだ。教養を身につけるなどと思うな」と。作者は、人生の甘い辛いも知ったベテラン。バカになるに深いふかい意味がありそうだ。

多分たぶん悪女なんかすぐなれる

山田 葉子

そうかもね。しかし作者の言う悪女はどの程度のものだらう。男性を誑かす。某国大統領のような為政者になる。余計な詮索は無用。みんな悪の根っ子は持っている。

私にも流れてんだイケズの血

大久保 眞澄

イケズの血はどんな色なんでしょう。楽しい句をつくる人はきっと濃いローズ色でしょう。秋風に吹かれたら美しいピンク色に変身しているかも。

下手な句の例に私の句が並ぶ

足立 茂

きっと良い作品の例だと思えますが、それでは川柳になりません。作者の心の広さに教わった。万が一作品のとおりとしても、この

欄にふさわしいまさに秀句。

良心が重荷たまには乱れたい

安達 忠央

たまには少しぐらい「乱れ」てもいいと思いますが、真面目の固まりにはそれが出来ない。たまにはの表現に近親感。

フクシマを過疎化したのは誰なんだ

近藤 正

九月はじめ花巻温泉で医療関係の交流会があり参加。現地の生々しい報告に胸が痛んだ。現状はテレビ新聞で知っている何倍もの悲惨であることを知った。誰の責任かを問う。

贅沢の日日へ終戦忌を忘れ

矢野 梓

その昔「中流」という言葉が流行し、いまは「格差の時代」が現実。その中でささやかな贅沢、気がつけば終戦忌をはじめ大切なことが忘れさせられる世の中にいた。

文化へのいじめ文案にも及び

三好 専平

文化がすたれると国が減ぶと言われるが、大阪市はその象徴だ。文楽だけでなく。文化の要施設に鉾先が向いている。「クレオ大阪」一つを残し四つは廃止とか。

思ふ事すばりと書いてまた消して

江見 見清

だれにでもよく経験のあること。実感句は説得力が強い。作者の上品なユーモア川柳は一級品手本にしている。偉そうにしない人柄が好き、「また消して」この人らしい。

奥の手を仕舞った場所を見失い

永原 昌鼓

さて奥の手はどこに行つたのでしょうか。ふと読んだ句を思い出した。「奥の手は鬼に預けてから眠る」だ。二つ並べたのは、こんなユーモアの句が少なからず。前主幹が言つた「もつともつとユーモアのある句を」。

何事もよきにはからう人という

谷口 義

夫婦百態。こんな夫婦はいいですね。それを生み出しているのは作者、褒めるならこの人を。ファンをたくさん持つておられる。私もその一人。めざしたい川柳は山の如し。

ピンピンコロリ誰も約束してくれぬ

松本文子

医療関係の雑誌。いつでも元気に保っている。そこで聞いた話。①腹は八分を守る。②ころばん体操をして外に出掛ける。③集いに参加して笑い合う。そして九十歳を目指す。九十を過ぎたらコロリが多いとか。

水煙抄鑑賞

— 10月号から —

久保田 千代

許さない許す金魚の尾が揺れる

増田 純子

他人との摩擦の中で、自分をも磨きまた他人に対して影響し合いながら人生を豊かにして日々過ごしたいと願っている。でも何事もそうすっきりいきません。下五で作者の心の葛藤がよく伝わり上手いなあと思いました。

快眠快食化粧のノリも上々だ

吉道 あかね

気持ち良いですね。こんなに何もかも上々の日。一体どんなに素晴らしいことがあったのでしょうか。こちらにもたつとなりました。

ふところへ思い思いの石を抱く

北原 昭枝

どんなに仲の良い親子でも、どんなに昔からの親友でも、自分と全く同じ人間は絶対いません。各々に別々の想いを持ちながら切磋琢磨して生きていくのです。

よく続いたねどちらも勇気なかったの

國實 力

思わず笑っちゃいました。きつとどちらも分別ある勇気をお持ちだったからです。

絶頂の真ん中で抱く疑惑

長川 哲夫

長い人生、この様に思うことありますね。上手くいっている時こそ、有頂天にならず冷静な自分に戻り、一歩退いて考えてみるのも大切です。

米研いでびたりと決める水の量

辻内 次根

私もそうです。特技かしらと思っている程です。研ぐ米の量は毎回一緒ではないのに、それに合った水の量がびたりと量れる。一度句にと考えていましたが、上手い句に出合いですっきりしました。

本堂に椅子が並ぶも高齢化

生田 寒之

そうですね。参拝客にはありがたい事ですが、まさしく高齢化だと思います。着眼点が良かったです。

扇風機の動く範囲に居る自由

東 槿 ますみ

上五から中七に続く言葉が、下五の「自由」に落ち着き句が大きくなった。ご謙遜され、

ほんの少しの自由があれば……と。

月末のときめき塔読待ちこがれ

小松 紀子

誌友さんらしい初々しい句に好感を持ちました。塔読を手にした時のお喜びのご様子が伝わり、微笑ましいです。

衣食住足りて愛する人も居る

栃尾 奏子

まあなんとお倅せな！万々歳ですね。最高の日々、こちらまで幸せな気分です。

堅物がいつもふんわり炊くご飯

関 よしみ

この句も上手い！堅物とふんわりの好対照が言い得て妙です。

だれにでも似合う笑顔忘れかけ

小栢 こずえ

そう。日々笑顔が一番！分かっていても中々それが難しい。下五の忘れかけに作者の反省やら「でも出来ないよ」と言いたい気持ち伝わってきます。

効能を信じる他はない薬

神野 千恵子

これだけ世の中に薬やサプリメントが氾濫してしまふと、もう信じて飲むしかないでしょう。信じて飲む人にこそ効果があると心から信じていることです。

民族の詩歌 (6)

―連濁・半濁音などについて

三好 專平

「山川」を「やまかわ」と読むと、山と川は対等の関係で、「山と川」という意味になり、「やまがわ」と下の語を濁りで読むと、「山の川」という、従属の関係になる。「さんが」と音読することもできる。この場合は、どちらともとることができ、このように、二つの漢字が並んでいて、二番目の語頭が濁ることを「連濁」と呼ぶ。「者」の音読は「しゃ」で「じゃ」とは決して読まないが、「行者」「忍者」と連濁する。連濁現象は複雑で一言で説明のつかないことが多いと言われる。

「さんが」は、前にくる言葉の語尾が「N」である時におこる現象で、「ガ」と書かれた。この半濁音の記号は「チョンチョン」

の「チョン」だけを書いたものが始まりで、「鼻濁音」である。「感ず」「信ず」も同じ。「やまがわ」の「ガ」とちがう発音である。ために発音してみればよくわかる。

この「N」の次の語の頭がまた「N」になる現象を「連声」または「連音」と呼ぶ。

天皇↓てんおう↓てんのう。観音↓かんおん↓かんのん。輪廻↓りんえ↓りんね。

二つの漢字が並んだ関係は、主―述（我行）、述―目的（喜楽）、並列（天地）、修飾―被修飾（美人、補助（可能）繰り返し（山山）などにより、下の漢字の読み方の変ることがある。この「美人」などそうである。

地名で「山崎」は東京方面で「やまざき」と濁り読まれるが、関西に来ると「やまさき」と清音になる。長崎・城崎みな同じである。大阪も勿論そうである。が、連如の時に「大坂」と書かれ「おおざか」と濁り読まれた時代がある。仏教の影響であろうが、よくわからない。話はそれるが、「十三」は「じゅうそう」と読むが、これは「さん」↓「さう」↓「そー」となっ

たもので、神（かん↓かう↓こー）湯（たんだお↓とー）と同じ変化である。

人の名前はどうか。川柳塔の作者名（号）を、若干調べてみると、濁音を語頭に使った名前（号）は女性では「順子」を除いてなく、男性では、慕情・猿杓・玄也など、漢語の名以外にはほとんどない。

東北弁は濁音に富むが（母音の関係で）、これは、「鼻濁音」。柔らかな感じで「口蓋濁音」と区別する必要がある。―中国語やフランス語には多い音であると聞く。

語頭P音（半濁音）は奈良時代以前にはあったが、以後は消滅した。しかし、この音は、「ん」「っ」のあとにあらわれる。「薰風」「河童」。アイヌ語には、「別府」「札幌」「納沙布」などが多い。最近では外来語の流入により、増えつつある。

繰り返すようになるが、語頭の濁音・P音はオノマトベ（擬声・擬態語）以外にはなく、連濁により生まれた音である。川柳はこの連濁やP音をたくみに操ってつくられる文学であり、言葉の遊びやユーモアに富んで、寸鉄、遠くより、人に迫り、真実を穿つ。



景色もむねの津軽の石霜瀬高

奇数月の連載になります。

ゴキブリVSカブトムシの巻⑫

川柳は面白い。子どもの川柳は特に面白い。

今までの経験上、子どもの川柳の中でも面白いのは小学生、それも低学年ほど面白いと思っていた。

大人になってゆく段階（階段）で、自然に常識というものに身に付けてゆく——またそうなってくれなければ困るのだが——ただその時点で、目に見えないナニかがぼろぼろ欠けてゆくのだらうとも感じていた。

ところがどっこい。新聞で高校生の川柳の選をして驚いた。恋に、受験に揺れる高校生活を、いい子ぶらずに、素直に書いてくれて感動した。たくさんさんの新鮮な句の中で、特に印象に残ったのがこの句だ。

ゴキブリとカブトムシとの差を思う

北斗高校3年 須藤 菜希^{なつ}

——哲学的な句。肌の色、貧富、学歴やら見た目やら、さまざまな差別や区別をサラリと詠んだ。視点が素晴らしい——と、僕は評した。

人気ナンバーワン、昆虫の王様カブトムシ。

この幼虫には、ばい菌をやっつける強力なパワーがある。とある酪農家が、牛のウンコを野積みにした堆肥の中から、カブトムシがはい出してくるのを発見。幼虫が食べ物にするのは、腐った木の幹や葉を微生物が分解して土のようになったものだから、堆肥はかっこうの住処。

カブトムシは、堆肥の中に住み着き産卵していたの

だった。ばい菌がうじゃうじゃいる環境の中でも生きられるのは、彼らがばい菌の感染を防ぐ「デیفュンシン」という抗菌性たんばく質を持っているからなのだった。

この凄い力を、感染症の薬品や、がん治療に活かそうと研究が進められているのだそうだ。ビックリでしょ。

ライバル（？）のゴキブリも負けてはいない。

嫌われ者ナンバーワンの彼らは、寒さが苦手。暖かくて水や食べ物が豊富な所が好き。でも人家に現れるのは数種類だけで、多くは森に住んでいる。ウンコでも、死体でも、腐ったものでも何でも食べるから、人家ではばい菌のばらまき屋だが、森では掃除屋さんなのである。3億年以上も絶滅せずに生きてきた。その生命力の秘密のひとつは、なんとオシッコ。彼らの体内にはある細菌がいて、オシッコの成分を体内で栄養素に変えてしまう。つまり、オシッコを栄養にリサイクルできるのだ。栄養素にならなかった本当に不要な成分だけが、ほんのちよこつとオシッコとして出る。これは水分の節約になるから、彼らは飲まず食わずで何カ月も生き延びられるのだそうだ。

最近、彼らの脳と神経組織の中から、医薬品への応用が期待できる抗生物質が発見されたという。彼らもまた、不潔な場所でも、ばい菌から身を守る力を持っていたからだ。

ゴキブリ君のそのオシッコリサイクル力をもつてして、頻尿に悩まされている男たちの為の福音（グッド・ニュース）がもたらされることを、切に祈るものである。

第36回 寝屋川市民川柳大会

と き 11月3日(土) 13時開場

ところ 寝屋川市総合センター 学習室

会 費 1000円

兼 題 各題2句 14時締切

「落 葉」 森 茜 選

「例 外」 鶴田 遠野 選

「忘 れる」 森口 美羽 選

「我 慢」 谷垣 郁郎 選

「ラッシュ」 居谷真理子 選

「投 資」 嶋澤喜八郎 選

投句締切 10月29日必着

〒572-0063 寝屋川市春日町9の9

高田 博泉 方 川柳ねやがわ

主 催 寝屋川市川柳協会

京都塔の会

第68回 秋の吟行句会

日 時 11月26日(月) 11時

集合場所 地下鉄東西線「醍醐」改札前

行 き 先 醍醐寺 境内散策

句 会 場 「魚膳」山科区親修寺平田町116

TEL 075-591-9100

会 費 4500円

申し込み 11月15日まで 都倉求芽まで

〒600-8428 京都市下京区諏訪町通り

松原下る弁財天町 328-202

TEL 075-351-4109

兼 題 「当日雑感」「素」「かけら」
「働 く」各題3句

交 通

京都市内から地下鉄東西線「醍醐駅」

JR 山科駅から地下鉄「醍醐駅」

相生市政70周年

川柳寺子屋

23周年記念へのご案内

雑 詠 2句(できれば1句は記念の作品)

選 者 投句者自身が選者です

参加料 無 料

投句締切 11月30日(金)

投句用紙 便箋を三等分して

① 句を2句

② 記念への一言(30字まで)

③ 住所・氏名(フリガナ)所属柳社

発 表 川柳寺子屋・特別号に全句を掲載

呈 賞 全員に発表誌を送ります。

投句先 〒678-0005

相生市大石町14-14

中塚 礎石 川柳寺子屋

第一回 卑弥呼の里

誌上川柳大会

兼題と選者(各題2句)

「 姫 」 森 中 恵美子 選

「 米 」 大 西 泰 世 選

「 歌 」 木 本 朱 夏 選

「 舟 」 樋 口 由紀子 選

「 陸 」 赤 松 ますみ 選

投句用紙 自 由(清記します)

参 加 費 1000円(切手不可)発表誌呈

締 切 平成25年1月15日(火)消印有効

投 句 先 〒842-0103

佐賀県埼郡吉野ヶ里町大曲2426-2

卑弥呼の里川柳会 真島久美子 宛

TEL/FAX 0952-52-1061

賞 各題特選1句・有田焼一万円相当

各題佳作5句・有田焼五千円相当

※男女を問わずたくさんご参加お待ちしております

おどろおどろ

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願い
いたします。

編集部

岬川柳会(大阪(前月分) 八十田洞庵報

この世で出来事許す遍路旅
締切り日言葉さがしのノート繰る 和 香
目に見えぬやさしさ感じ今日も生き 富美子
久々に家族旅行で大の字に 桜 琴
潰け終えて梅の手ほどき生きる亡母 令 子
ばらが好きどちらが好きと娘問う 節 子
復興のめどもたたたぬに又災害 恵美子
他府県のラーメンばかり食べたがり 治
好きだよと苦勞の種をまいた人 寛
菜園の虫との戦い本気出し 澄 恵
主役の座笑顔ふりまく扇風機 茂 平
新党に厳しい船出期待なし 清 一
ラッキョウは梅雨の不調を元気づけ 圭 子
毎年に災害出して梅雨明ける 洋 子
すだち届く里には姉がひとりきり 和 美
洪水に干ばつも有り病む地球 貞 夫

ミズクラゲ原発めざしてデモ行進
創業者バトン他人に渡す知恵 洞 庵

川柳塔おっばこ吟社(香川)川崎ひかり報

深呼吸生きる力を肚に溜め
行き場ない怒りミジンに切りきざむ はつ恵
静寂は産声待っている奥 ひかり
節くれた手に滲み出る苦勞痕 弘
どしゃぶりの雨がつかえた胸流す 放任
楽しんでゆっくり登る八十路坂 いさむ
節水の宣伝カーが行く暑さ あきら

松露川柳会(鳥取) 小西 雄々報

アルバムに子等の成長感無量 久 子
名月へ亡父の尺八なつかしむ 豊 枝
汗の玉ふっとんでくれビール飲む 公美枝
大ジョッキお代りをする娘を見つめ 鈴 枝
昼食時ノンアルコール満足だ 弘 子
夏祭りビール主役で盛りあがり 静 江
初めからビールの味は苦かった 智恵子
いらいらを一気に消した生ビール 和 代
暑い日の出番を知っているジョッキ 正 光
喪が明けてきてこれから飲むビール 雄 々

川柳塔打吹(鳥取) 野口 節子報

満州の大地を踏んだ生き残り 勝 憲

草踏んで虫の恋路の邪魔をする
何回も火傷の火種踏んだ足
お互いのアクセル踏んでいく余生
土を踏むこともない靴淋しそう
十円で小さな足が背中踏む
居酒屋で踏んだ二の舞三の舞
敗戦後踏まれたままの北の鳥
仏の子と影踏みをする月の夜
お茶色の汗が吹き出る句会場
日本列島猛暑続きで行き場ない
酷暑です地球が煮える寸前だ
この暑さ負けず頑張る戦中派
おふくろよおやじよ焼けた御影石
夏草の暑いと言わぬ土根性
八十路まで鎖の誓い夫婦仲
鎖ない一人暮らしが良く見えて
停年で鎖はずした定期券
廃船も知らずに朽ちてゆく鎖
鎖などないけど君を目でしる
日本を伊能は鎖で地図にした
朝帰りドアのチェーンを外してよ
遺伝子を鎖でつなぐDNA
青い鳥鎖を解いて巣立ちする
幸せの連鎖家族がためです
大騒ぎ曾孫が囁んだ唐辛子
地引網鯛の顔見りや大騒ぎ

公 恵
耕 治
龍 枝
和 子
みち子
くにこ
完 司
美ツ千
道 子
勝 誉
貴 恵
久芽代
石花菜
玲 子
滋
恭 子
美代子
紀の治
泰 山
玲 坊
義 人
照 彦
たけ代
三津子
重 忠
善 江

議事堂が党利党略騒がしい
死んでからいじめ自殺と騒ぎたて
官邸の前で金曜だけ騒ぐ
油蟬山の形で騒いでいる
潮騒に言葉はいらぬ影二つ
騒ぐなよ蜂の大群目の前だ
胸騒ぐ「一本の鉛筆」の唄

和歌山三幸川柳会 武本 碧報

きんと雲見れば虚空がのつている
澄みきった池に噂が浮いている
浮雲がちちははになる里の風
木簡に太古が浮かぶ墨のいろ
浮き袋投げて正義を振り翳す
原発の境界線で浮く瓦礫
浮き上がってきたら美味しくなるだんご
浮いた話蓮の花弁に載せて逝く
浮世の義理果たす財布を持ち合わす
サミットで浮足たつて泣く国旗
花道でたたら踏みたい馬の足
オギャーから演じ始める大芝居
自作自演穴の深さは我が背丈
笑わせてどっと疲れが出る芝居
あの時の涙は芝居だったのか
ジギルとハイドひとり芝居のロングラン
デスマスク後一日の大芝居

清 美美子 野蒜 芳光 節子 紀美恵 美知江 政次 美花 昭枝 俣子 ほか 義雄 当代 孝子 みね かず子 昇 寿彦 和子 八重子 ひろ子 章子 幹子

幸せだよと綺麗な嘘をついている
名優は演じていない嵌まつて
極楽の風吹いていた芝居小屋
名優のつもりで今日もする芝居
順番に束ねる今日のありがとう
順番に並べる忘れないように
退職で日々の手順が狂い出す
何をしてもいつもビリから数えてた
雨乞いをする気にさせる猛暑です
順番はあとでいいよと河豚料理
トップでもビリでも同じ目的地
手かけた順に花芽が笑みをくれ
順不同今夜は父のしまい風呂
伝達が途中で変わる人の口
夾竹桃咲いて折りを深くする
煩惱もやがて折りになる遍路
ワンテンポ遅れた折り神の手に
鳴き通し折る形の蟬の殻

川柳塔すみよし(大阪) 森松まつお報

富子 元三 典子 かずみ 小雪 准一 豊 起世子 喜久子 義泰 イセ 菜摘 町子 登美代 絹子 純子 保州 臍の緒がまだ抽出しにある筆筒 (矢) 五月 晴雄 萌 日の出 チエコ シマ子 里の雷格別大きい音がする

楽原道夫選

寝返りを打つては波の音を消す
寂しいと大きな声で言うてみる
キラキラのハート受け取り手が居ないとも湖
ちよつと来てソーメン食べすぐ帰る八重
落ちてゐる財布をちよと蹴つてみる 郁夫
DNA一家揃つてくとい顔 昌紀
夕方は行方不明になる男 孝流
お似合いと言われその気で来た帽子 はじむ
ターザンの居そうな庭が理想です 扶美代
小さい秋ひよいと運んできたトンボ (大朝子

佳句地十選 (10月号から)

山本 希久子選
青い実がはせて一気に大人びる 菜摘
向日葵が節電騒ぎあざ笑う 昌紀
はつ夏の風に命をふくらます てるみ
冷蔵庫に私のすばら詰つて みつこ
幼稚園靴がきつちり脱いである (山耕治
プロを夢見た原稿用紙積んである (松文子
滝のごと蟬を鳴かせて寡黙な木 くにこ
手作りの椅子座つてはいけません まつお
ヒト科では熟年と呼ぶ中古品 晃
小さい秋ひよいと運んできたトンボ (大朝子

夢のなか里は幼いときのまま

美世子

鉤を持ちリストラの子やる気だす

(奥)五月

人間を耕すことばに迷つて

公誠

耕した汗に夕焼け美しい

半銭

じつくりと耕しておく見えぬとこ

昌紀

耕せば智慧の泉が湧いてくる

富美子

神様にすがりつきたい時もある

芳香

天災が過去も未来も呑み込んだ

志津子

去年までさつさと出来たこと出来ぬ

直子

つらい坂やつと越えれば風が読め

りつえ

タイプじゃないなんてあつさり断わられ

蕉子

一つだけ悶悶とすることがある

勝弘

辛からうするめは鳥賊に戻れない

昭

受け入れてつらい顔など見せません

裕之

つらいのはつぐない不足まだ残り

公平

五輪過ぎ平穏日々を取りもどす

順子

言葉には言い尽くせない胸の内

美籠

地雷後平和の花が咲き出した

舞夢

五十年希望通りの人に染め

遠野

札束を懐にして先斗町

まつお

竹原川柳会(広島)

古田

太虚報

息抜きにぶらり覗いた道の駅

栄恵

蟬もまた青吐息原爆忌

笑子

夫婦です阿吽の呼吸です介護

慶子

蟬だつて呼吸困難かもしれぬ

房子

父が笑っている酒くさい息をして

蘭幸

ひと息で飲んだくすりはいきく予感

美智子

神仏に無病息災だけ祈る

ヒデコ

六十キロ離れていても光った日

輝恵

ライバル視されて突然光りだす

敬子

ひとすじの光信じて母の道

淑子

アイバンク生きる光りをあなたにも

幸子

ドンと鳴る花火この世の花が咲く

現代

性格か線香花火好みです

半徳

パチパチと線香花火愛育つ

千代美

孫想うころほのほの遠花火

汎美

花火ドカン隣りの人が美しい

力

遠花火遙かな海と共演す

比呂子

亡姑と見た花火今年は見たくない

年子

川柳を念仏にして書くばかり

静風

ありがとう感謝伝えに来たヤンマ

厚子

ふる里で心を洗う三姉妹

栄香

母の勝ち私の思いバレている

歩美

年重ね犬もおじいちゃんになる

千枝

バツ追う息子の背中たくましく

史子

青い空家族の足がよく揃う

一路

城北川柳会(大阪)

近藤

正報

抜けがけをして後悔が増してくる

美智子

嬉しいが孫が帰るとホッとする

高志

世話を焼く余計な世話と疎まれる

ルイ子

思いやる心そのまま顔に出る

集一

生きている証しでしょうか毛が抜ける

正子

母の手紙カットして読む行がない

典子

人相で人の誠はわからない

宏

フィクションを重ね虚飾の夢を断つ

柳弘

半端だなんてあなたに言われたくない

義昭

若いけど半端ではない面構え

倫子

子に渡す地図は抜け道消しておく

克己

乱気流もがいて抜けた現在地

洋志

半端ではなかったライバルの強さ

満作

幹事なら半端ぐらいは被らなきゃ

勝弘

契約の握手はしない端金

寿子

味方だと信じた影が抜けてゆく

昭

ありがたいしゃきしゃき囁める傘寿の齒

堅坊

床に入り今日も笑って生きられた

賢子

出る杭も中途半端じゃ打たれない

朝子

居心地が悪いと論吉逃げだした

弘風

二次会をこっそり抜けた彼女

あさ子

ウオーキング見知らぬ人と抜き抜かれ

榮子

人相見人の生き様覗き見る

縣笹

底抜けの笑いを置いてくる見舞い

郁夫

少年の手に好奇心でんこ盛り

素雲鶴

もうあかん人相書がもう来てる

修

メダリスト祝福うれし紙吹雪

千恵子

半端だった僕をまともにした恩師

武彦

貧相も福相となる縄のれん

和夫

取材中無慘にカット銃の音
抜け道を天から見て知らんぶり
雑踏の町を抜けると青い空

隆男
杵香
志華子

川柳塔みちのく(青森) 小寺 花峯報

うやむやの森を通れば墨だらけ
父ちゃんの胡坐は子等の大宇宙
宇宙人隣の家に住るらしい
うやむやにさせぬ大好きとろめし
宇宙から平和の一句落下する
優しさの裏に潜んでいる打算
B面で売れない歌手の唄を聞く
裏切りに真つ赤なカンナ咲き乱れ
コロケと一緒に揚げよう今日のうやむや
酒飲んでうやむやにする天邪鬼
裏道を通る事ない亡父でした
フルムーン宇宙旅行と決めてある
合掌を解いて両手の忙しさ
わたくしの頭の中はビックバン
立て替えた金はいつでもうやむやに
穏やかな笑顔の裏にある鬼面
ダム枯れて時間給水稻穂生き
逃げ水がふいに疑い深くなる
病名がはつきりしない千羽鶴
花器並べ宇宙に浸る花鉢
裏声が好きて今宵もママの膝

隆樹
龍馬
小とみ
一湖
つとむ
きよし
呑舟
綾子
和香子
あすなろ
ひとし
美鈴
芳生
則彦
一呑
ふさゑ
花匠
黙人
花峯
慕情
一花

竹とんぼはるか宇宙へ飛ぶつもり
淋しいと水子地蔵がつぶやいた

五楽庵

川柳らくだの会(鳥取) 岸本 宏章報

共同作業手早い人に気を使う
募参りカラスも枝で待っている
いっぱい悩ま抱えて生きている
重い足ひきずりながら畑仕事
きびきびと動く介護師頼もしい
ライバルがいるとテキパキ振る舞える
長芋の蔓から落ちてむかごめし
家事雑事返上自分取り戻す
冷房に馴れて辛抱など忘れ
きびきびと脂肪ふるいにかけている
末永くよろしく墓地の両隣
格安のジェットも同じ音で飛ぶ

仁子
寿賀子
紀子
富貴子
一弘
清
玲子
孝子
せつ子
大鯨
登美
宏章

サークル檸檬(大阪) 松尾美智代報

笑顔良し派手な美女より好ましい
笑顔なら垣根を越えて響きあう
写真では夫婦笑顔に邪気がない
焦らずに川の流れにまかせてる
老人と子供の笑顔消えた国
作り笑い急場をしぐ助け舟
元気で医者梯子をしています
スパーのレジで笑顔を頂いた

房子
いわゑ
久仁雄
加お里
昌紀
光久
たもつ
美智代

顔中で笑うひまわり楽天家
人格があつて後姿にも笑顔
終の笑顔今から仕込むカラーゲン
大切な人の笑顔が浮かばない
長生きをしたくていい人をやる

川柳ふつもん吟社(鳥取) 夏目 一粹報

殺生を許すヒト科に抱く呪い
写経して心のエステしています
桶ついた手打ちなざるかお殿さま
一徹な花は散る日を油断する
殺生な庶民いじめの消費税
殺生はするまい盆の三ヶ月
口割らぬ貝は誇りをもつて死ぬ
エステ中能面ずり横たわる
殺生も時にしている人の性
オイとハイいずれ一人になる二人
折々を面面相で乗り切った
愛犬もエステサロンの上客だ
殺生な宇宙のゴミに地球泣く
賞味期限切れそうあわてエステする
手打ち後に外濠埋めて天下取り
原子炉の絶対はない恐怖感
殺生も少しは混せて生き延びる
良い話聞きつつ腕の蚊を殺す
要注意エステに妻が通い出す

洋々
一瑤
蟹郎
地佳平
振作
金祥
みゆき
春名
昌鼓
清信
節子
重忠
とも湖
凱柳
回春子
妻子
房江
毅
圭一郎

エステなど眼中に無い糸トンボ
エステまでせずとも私もとが良

秋月

世論も弱い政府も弱い竹島だ

栄子

渾然と政界地図が塗り変わる

行男

弱い者いじめるなんて殺生だ

由美子

エステに通うあれは女性か男性か

虎尾

お試し品集めエステの準備中

秀四

大きくわぬ夫婦げんかの手打ち式

義徳

仲直り手打ちの酒が物を言う

善夫

さすが会計ちゃんけの事も見のがさぬ

悦子

ボケはまだ妻と互角に喧嘩する

菊香

殺生もしないと農家潰される

孝二

盆の月殺生するのやめておく

茂登子

殺生と言われ掴んだ蚊を逃がす

はつ江

我慢から火の付くこともある殺生

克也

針の穴ちんけで老いの目が困る

清帆

強がりの面もはがれて素のまんま

一粋

吉報のみ告げる電話が欲しい夜

貴代子

飛行機雲マチュピチュまでは駄目かしら

義子

消費税貧乏神も付いてくる

年代

電話だけで繋がる友が又一人

哲子

のはほんと今日も命の無駄遣い

みつ子

亡姉おもうびななんかつらが咲いている

藍

川柳ささやま(兵庫) 北澤 稠民報

川柳塔唐津(佐賀) 仁部 四郎報

子供達叱った頃がなつかしい

久子

訪う人ない肌着一枚暮しよい

美緒子

童歌うたうと少女に戻る母

純子

叱られてぐち聞いてはし地蔵様

美紗子

男気を出して妻から叱られる

哲男

子を叱る親も買いたい物がある

真由

少年老い易し自販機がごとり

勇

肝心な事を補聴器聞いてない

多美子

節電は新婚時代からしています

開子

若い時洒落た下着が干せたのに

可住

山菜がばあちゃんを待つ春の山

かほる

古い料理計量カップは目分量

幸子

み仏に助けられたと思う時

ちかあ

叱るよりやさしく諭す芸がある

照代

体重計毎日乗っても報われず

美智子

高知川柳社 小川てるみ報

富柳会(大阪) 古田 千華報

ライバルに先を譲っておく余裕

てるみ

駄馬のリードを鼻で笑っていた迂闊

三郎

一点のリードが生んだブレッシヤー

正躬

母として守ろうリードしたタスキ

和広

リードしてされて夫婦の夢芝居

千鳥

振り向けばリードされてる激戦区

美香

竹島と尖閣諸島わが領土

熱戦のメダルに民はありがとう

ばたばたと亡母の初盆駆けてゆく

ひと電車遅れて事故に遇わず済み

少しなら笑う力は残ってる

一円へ昭和ヒトケタしやがみこむ

人がみな優しく見える独り者

愛ちゃんの卓球いっしょに泣きました

入門書手垢も付けず積んでいる

一ページめくれば明日まだ白紙

泣きに来た海はとてつもなく広い

泣き砂を踏んで女の夜を泣く

姫脱いで果敢に挑む金メダル

わがままな客へ火加減水加減

ボンコツ車も人の為にと思っている

気位が高く夕日が沈まない

欲望の炎五欲を焼き尽す

優しさで厳しさと亡母のオブラート

変わらない私を風が嘲笑う

自分史は昭和人間そのまんま

やんわりと受けてそのまま受け流す

水鏡湖底に沈む過去は秋

實

節子

蜂朗

高明

勝視

四郎

輝夫

哲男

和子

伸雄

アキ

晴美

千華

佳子

深雪

高鷺

壽峰

武人

奏子

登子

千恵

未知

ありがとう親父の歳を越えしました

入り口はひとつ節の目が荒い

風の街母の答えが錆びてくる

入り口に残り香ほのか白い足袋

夕闇の中はーっと浮くニンフ

わがままが三人住んで支え合う

愛情が時には辛い鞭となる

喜寿が過ぎ少し許して横車

我儘で愛の深さを測つて

気構えを説いた介護はまだ序章

わがままを許してくれた母ひとり

そのままでもいいけど少しだけおしゃれ

一彩を足せば非凡な蟬時雨

彦次

寿之

鬼焼

信子

欣之

よしみ

澄子

七朗

華

恵

紅紫朗

よりこ

森子

南大阪柳会

津守

柳伸報

どれもこれも人災という被害です

被害者になつても加害者になれず

被害地の瓦礫はじつと耐えている

ふらふらで後は気力という勝負

老々介護二人してふらふら

イケメンに若気のいたりふらふらと

ふらふらになるまで浸る美人の湯

只酒と聞いてふらふら付いて行く

ふらふらになるまで自分探してる

知らぬ間にささやかれるスキャンダル

内緒ないしよ孫のささやき物ねだり

修

和雄

たもつ

庸佑

恭昌

なぎさ

清

昌紀

典子

ひさ乃

シマ子

耳もとでささやく欲に負けている

ささやきも噂も嫌い耳に栓

仏さんがいつかささやくさあおいで

すごいなと真摯に生きて言われたい

カメレオンすごい化粧に舌を巻く

看護師がすごい美人でためまい

すごいねと時空の広場を動かぬ子

彼女こそジャーナリストの鑑だろう

裏窓にいわくありげのシルエット

潜水艦一つも窓がないのです

わだかまり解ければ窓も透きとおる

盆も過ぎ窓の風にも秋の色

ジュリエットロミオを待つて出る窓

先輩はすごい偉いと立てておく

幸せを招き寄せてる朝の窓

窓閉めて先祖の土地を売る話

ランタンが揺れる窓辺の異人館

懺悔する四角い窓に尖る月

川柳茶ばしら(愛知)

関本かつ子報

そろそろという年齢にさしかかり

家族より自分が大事趣味の会

百合でさえ嫌いとはねる人も居る

物言いにビデオの力借るジャッジ

里芋と月の饗宴愛でる幸

風呂敷の花柄選ぶ内祝

紀乃

忠昭

楓楽

ルイ子

弘子

郁夫

直子

一步

柳伸

勝弘

更紗

弘風

正春

集一

志華子

栄子

柳弘

克己

水不足なかつた夏のありがたさ

川柳クラブわたの花(大阪)西川

義明報

長電話トイレ休憩とてます

プロポーズ糸電話かな恋芽生え

虫籠に蟬とり夢中少年期

鎖だと知るもケータイ離せない

言いました聞いていないと又けんか

通知表見て驚いた鮎と鞭

携帯にも落ち穴あり山迷う

麦わら帽で西瓜かぶった日も遠い

愛憎のドラマを詰めて鳴る電話

蟬時雨この世に生命残すため

風が吹き飛んだ帽子と鬼ごっこ

笹舟を浮かべた小川童うた

山間の湯宿の朝に蟬の声

蟬を追う童へ汗かき帽子とぶ

捕虫網と帽子が走る炎天下

しあわせの物さし胸の中にある

父さんの財布の底が抜けている

笹舟が余韻残して日が沈む

金メダル噛んで自分を褒めてやる

それぞれの暮し家族の窓明り

農園に麦わら帽子似合う老父

寝たきりへ寒いだろう帽子させ

向日葵に負けずおとらずなでしも

かつ子

晴美

俊子

義明

はじむ

浩三

愛子

博子

和子

耀一

正春

孝子

奈良司

榮美子

かなえ

明美

ますみ

宏至

知佐子

いつみ

民

宏

欣子

禮子

サブリメントどれかが効いているらしい
自我捨てて川の流れるように老い

美代子 一風

川柳塔なら

坊農 柳弘報

羽もがれ首も掴まれ尻の下
身勝手なボイ捨て絶えぬ情けなさ
つまづいて思わず掴んだ妻の膝
愛ちゃんがやつと掴んだ夢の銀
わがままに育つ真つ赤な百日紅
隣国が小さな島を取りに来る
アメリカの勝手を飲んできた日本
母さんがしつかり掴む家族の輪
蝉衣ゆれる逢瀬に艶こほれ
蝉止んで恋傾いて夏が行く
手料理で夫を掴み離さない
八合目蝉が転がる仰向けに
へなへなと力が出ない膝小僧
やつと親勝手にせいと目が笑う
薬一本掴んだままで息絶える
身勝手なわたしに鍵をかけておく
民意無視勝手すぎるぞオスプレイ
一週間夏休みですキッチンも
膝まづき孫の目線で見える蛙
空蝉のかたち大地の愛繋ぐ
引き際の美学空蝉の美学
玉音のあの日に戻る蝉しぐれ

史郎 和夫 勝弘 次郎 紀雄 萌子 洋子 ふりこ 弘風 弘修 恭昌 克己 枉子 いさお 信子 郁夫 寿之 柳弘 順啓

身勝手なことも言いあう無二の友
掴むなら世界に一つ君の愛
身勝手な女が行き先を変える
蝉しぐれ乳房求めている赤子
汗おしみ掴み損ねたものがある
正座して少し恥じらうミニの膝
跪き平和を誓う八月忌
一秒も惜しんで蝉は眠らない
空蝉の身に新盆の灯がともる
一本の芯をゆるめた蝉しぐれ
好き勝手生きた悔いないデスマスク
すねだけで足りず膝まで齧られる
もみじの手あしたをぎゅつと掴んでる

ほたる川柳同好会(大阪) 水野 黒兎報

就活にじつと我慢の靴の裏
裏話ちよつと聞いてと長電話
裏の裏表の筈が解けぬ謎
南天の実がぎつしりと裏鬼門
裏庭に咲く花を見る人も無く
不意の客急ぎ座布団裏返す
整理べた開くと過去が崩れ出す
開かせて五感の残り絞り出す
避難所が開かれぬよう祈ります
開くとこないけど買った哲学書
開会式終りぐつたり昼寝する

惠美子 将文 完次 堅坊 ダン吉 遠野 美龍 理恵 真理子 弥生 隆盛 朝子 保子 柳童 契子 美智代 重子 黒兎 順子 康子 春代 正子 信男

とんとんと叩いて買ったまる西瓜
振り向けばとんとんだった気がしてる
何事も程よく進み出す安堵
我が人生喜寿でとんとんあともうけ
子の帰省妻の庖丁ご機嫌だ
秋茄子を二人で食べる嫁姑
八尾市民川柳会(大阪) 土谷 耀一報
本心をすべて掴んだその刹那
一枚の誓紙にもある裏表
阿吽の呼吸びたり一つになる心
胸の底まだチロチロと燃えるもの
束の間の虹を心であたためる
天女かないいやよく見りやお母ちゃん
輪の中でたつた一人のわらべ唄
心の芯はいつも故里向いている
今朝断酒誓った貴方午前様
心意気示す男に男惚れ
オスプレイ日本の空は迷惑だ
難難を洗い流している絆
早々に立ち去れその首あるうちに
美しい夕日沈んでいく刹那
達成感心ひとつになる絆
いつまでも騒いでいない蝉しぐれ
あかあかと輝く空白の前後
あれもこれも捨てて夕日と黄昏れる

純子 桂子 久子 幹治 郁子 長一 森子 加央里 華 賢子 一風 雄太 賀世子 清 高鷲 紀雄 壽峰 草風 寿鶴 朝子 寿之 欣之 耀一

川柳塔きやらぼく(鳥取)大塚 恵子報

ていねいに包んで人様にあげる
同じ傷持った仲間の群れに居る
食欲を抑えて胃腸喜ばす
人の道泣いて笑って下山する

未延子
ちかし
喜周
恵子
寿々子

あじさいの色深くなる梅雨晴れ間
嫁姑ふしぎな縁で息が合い
沙羅双樹やつと小さな白い花
この足が走った跳んだ足なのか

鶴子
ゆき
富美子
瑞枝
満

東京つ子のよこが波がどんぶらこ
大山の正面を見て深呼吸
内も外も福の神いて候や
哀しみをこらえる老いの膝がしら

亜弥
千代
初枝
麗

この世相一足ごとの歩で進む
謝罪せよ重い言葉を軽く言う

川柳花の輪(大阪) 岡本 薫報

薫報

どうしたの今更化粧凝りだして
五欲抱きすばめ夢もひとつある
今更に膨らむ友の有りし日々
今更と言われようとも好奇心

やすの
みちる
一幸
勇太郎
楽鬼

今更と泣き事言わず知恵絞る
平凡がいい今更目立つことは避け
今更にバラリンピットの凄さ知る
すばむのは色気も何もないからだ

昭好
陽

いい雨ねすばめた傘がのれんあけ
今更ながら大きかったな父の背な
今更と思う鏡の肌おもし
赤い口すばめて吸うか夜の蝶
晩成の望みもすばんでいく齡

三楽
薫
あや乃
敬子
克衛

わかあゆ川柳会(鳥根) 松本はるみ報

思い出がダム湖に浮かぶ夏の風
余白まで使って書いた胸の内
未練かも片道切符まだ要らぬ
霧囲気に流され酔うてきたグラス

恵美子
澄子
ちよえ
かつ子
英子

十五夜に私の願い問うてみる
白い雲基地と言う名に負の掟
ブライドを捨てた蛙のひとり言
子育ての娘の愚痴にさもあらん

はるみ
好栄
昌
清泉

究極の一滴奇跡を待っている

川柳同友会みらい(鳥取)吉田 陽子報

陽子報

病氣するたびにおまけのダイエット
強がり屋強がる程に一人ぼち
まだ慣れぬ無職と記入職業欄
楽な椅子座り続けて重い腰

慶一
安子
葵
美江
陽子

人並にもまれ満喫する都会
ノンの付く未練たらしいビール飲む
熊蟬よ少し涼しく鳴いてくれ
初盆の明かり華やぐビール抜く

寒之
純宏
久司

若見せの齡は聞かない厚化粧
家出する勇氣もなく濡れ落葉
ご無沙汰に敷居一段高くなる
して貰う家事には口を出しません
辞書引いて書いた漢字を間違える
につこりを足す挨拶が心地よい
見栄はって築いた城は砂の像
こんな日もあった笑顔のツーショット

章子
温子
美恵子
敦子
嘉子
三郎
理子
信子

消費税民の懐干しあげる
掴み取りには向いてない私の手
神の手が水腎症を切りきざむ
スイッチを切っても過去が蘇る
夜あればこそ感謝の骨休め
友好の絆を切ったのはあなた
甲子園の土を葉にするらしい
生かされてこんな遠くへ来ましたが

みち子
澄枝
正雄
華蓮
和代
遊子
菜美
一眸
はるお
公弘

京都塔の会

樹本 宏子報

青い星水と空気のある奇跡
私の保存期限を神に問う
命のスペア冷凍保存しています
かすれるまで嘘つきとおす覚悟です
気は心うれしい言葉うけておく
エアコンをつけず気力で夏を越す

弘之
則彦
昭
文代
求芽
泰夫

二メートル離れて歩く夫婦仲
母さんの気配り冷たいソーメン
若さ保つことに熱心すぎないか
見栄も張り老春保つ七十代
塩漬けの地へメガソーラーの出番
二番手になってよかつた長寿国
民謡のかすれる声にある色気
骨密度落ちてもブライドは保つ
心地よい関係保つお茶の距離
弁解へ辻褄合わすのに苦心
動物がよく稼ぎますコマーシヤル
適当なスリルが老化防止かも
断捨離を息子に依頼する蔵書
夏雲に清さ問われる白芙蓉
ロンドンと甲子園とで盆も過ぎ
いざ出で正義の味方スーパーマン
風鈴の風雅も消えた温暖化

はびきの市民川柳会(大阪徳山みつこ報

地ビールは各地の知恵が詰まってる章司
ビール飲み御飯食べたら肥えるはずかつ美
なんだつてお風呂上がり一杯だちづる
天下国家論じて旨いビール呑むいさお
夏場でもお風呂頂く危険あり雄太
無いこととする間もあらず星流る美喜

益子 満子 葉子 宏子 知栄 義昭 かずお 啓子 英旺 庸佑 篤子 鹿太 肇 ふりこ 綾子 ますお 比ろ志

月までもボタン一つの距離となる
与野党の距離がなくなる会期末
足腰がそこまでの距離遠くする
見えている距離で近寄りにくい国
距離の壁取っ払うよなネットの世
台風の色紙のように飛ぶ瓦
パイパイと論吉道連れ孫台風
台風は家族が揃う濃い時間
台風が左向くよう螺子をまく
寸前でそれた台風アリガトウ
旅行中台風予報早帰り
宅急便開けると嬉し母のメモ
メモした置き場忘れて役立たず
記憶には自信はあるがメモをする
肩カゴでメモは事件を黙秘する

西宮北口川柳会(兵庫) 藤岡りこ報

苦勞ばかりかけたね妻の白い髪
地震予知のはほんとしてられない
サザエさん一家に見える良き昭和
片陰を拾って母を病院へ
自分でも狡いと思う時がある
植山で書く自分史に嘘はない
遅刻しそうな夢に起こされ間に合った
夕映えに見とれのはほん母といふ

和子 敏 泰子 庸佑 佳代子 りつえ 久仁子 喜久子 ヨシ枝 高鷲 フジ 猿杓 千鶴子 アヤ子 みつこ 武彦 玲子 弘子 美津子 千代 穀 沢子 順子

坐禅堂自分を溶かす無の時間
どんでん返しとは神様もずるい
泣きべそを写真の亡父が笑ってる
ジイ狡いジャンケンポンものろいなあ
洗濯物のポケットのお札もいらいます
面取りをした言葉には陽があたる
真ごころに触れて心の鍵を解く
哀しみを磨いて人が光り出す
飾らない世間みたくてメガネ拭く
子の短所まるでコビーと笑われる
自分に負けまた栓を抜く休肝日
真面目過ぎ少し狡さを注射する
秋風に栗の実一つ散歩道
生き様が自分の顔に書いてある
責任はいつも現場が取らさられる
茜雲すれすれの嘘二つ三つ
のはんと暮らしていても瘦せたまま
代返の時に限ってあてられる
傷ついて小指も自分と知りました
風鈴が今ひとときを慰める
特別な夢など持っていない僕
自分史の燃える頁に君が居た
教科書が狡い日本と教え込む
禁酒禁煙自分を試す一里塚
無為無策テレビ見ても腹はへる

風琴 宏造 遼子 武臣 りこ 千賀子 無限 折杭 光久 わこ 茂 浩司 光子 キヨミ 盛夫 淑子 歳子 章子 じろう 敏夫 ひとみ 直 忠 比ろ志 哲男

糞ころがし追つてのはほん歩きたし哲夫
かわいそうババによく似た女の子 正和

川柳大阪

森松まつお報

ニッポン背負うどんなかな次の人 一風
湯水で農作物ががっかりや 紀雄
がつかりを引きずらぬよう生きてます 善純
一芸のようにここにこしています 堅坊
売れっこの芸人テレビから消えた 笑風
カラオケも芸の内よと妻励む 喜楽
ガウデイは解ったようで解らない かよこ
よく笑いよく喋るのも芸のうち 朝子
芸達者その場の空気盛り上げる 美世子
笑い袋持ち合せてる芸のうち 万紗子
泣きもあり笑いもありの普通です 信酔
普通の暮らしまだまだ遠い震災地 美花
毎日が普通でおれる有難さ 芳香
低金利普通も定期もコンマ以下 川童
生中を三杯飲めば上機嫌 勝弘
普通ならできないだらう再稼働 鉄心
原発ゼロ山の彼方の遠くです 一步
挨拶が普通に出来る子に育て 珠生
常識の域は越さない幹事役 柳弘
この暑さダウンしました干からびた 和
飲みすぎの夫の口に蓋をする 五月

夏の恋実りて孫が巢立つ秋
外交の力不足に民なみだ
芸術の秋だ爆発してみよう

川柳塔さかい(大阪)

村上

玄也報

卵焼きシンブルだけどむつかしい
孫の画く似顔絵染みと皺がある
正直なシェフのお店は混んでいる
したたかに生きるに無駄な正直さ
正直に言うて採めごとこじらせる
隠してもわかる紫煙が肌に着く
原発ゼロ正直足りている電気
誰にでも調子合わせるウチの犬
神様も調子狂わす絵馬の数
調子に乗ると財布を投げる癖がある
酒の唄調子はずれが座をわかつ
酒一合調子づいてるおじいさん
体調に好きな遊びも左右され
世渡りに調子合わせる二枚舌
調子いい世辞に群がる人の欲
好調の訳知ってる村雀
田植え機の調子と合わぬ田植え歌
バラ一輪愛の告白受けました
単純な夫で騙し甲斐もない
葬式要らん灰は空から撒いてくれ

司
彦太
まつお

さくら
半銭
篤子
世紀子
誠一
明子
健吾
雅明
日の出
扶美代
好

二人きり今日も欠伸をして暮れる
外人に身振り手振りが通じてる
お別れのことばサヨナラだけにした
味噌汁に納豆あればいい朝餉
単純に好きだと言えは済む話
シンブルで逆に目立っているドレス
枝豆とビールで夏を締め括る
シンブルな国旗に複雑な想い
シンブルにしたと手抜きをした料理
使用済み核燃料のゴミの山
おひとり様淋しいけれど気楽です
主治医留守神さんも留守五臓病む
単純な暮し一間で足りている
正直に言うたら困る人がいる

光
朋月
清
和夫
愿
竜之介
俣子
千代
冬虹
唯教
天笑

命短し時の浪費に気付かない
予定表の余白に明日の夢がある
予定表ざつしり詰まる妻元氣
予定した旅のキャンセル膝がする
虹色の夢も予定に入れてます
次の世も同じ夫婦になる予定
しゃべり好き話したら夜が明ける
見る側の感動誘うナレーション
三代の語らい楽し盆休み

六甲川柳会(兵庫)

伊勢田

殺報

みつ子
武彦
和子
ひろ
千賀子
弘子
康子
加寿子
浩司

荷の重さ語らぬ兄の三回忌

口べたがボツリ本音を言う重み

節高の指のリングが語る過去

夢語る少年の目にある未来

ヒロシマの光を語り継ぐドーム

イメージを変えつつもりの試着室

イメージが沸いてこないと嘆く脳

英会話旅のイメージふくらます

イメージを気にかけてすぎて我なくす

イメージがまったく出来ぬピカソの絵

水平線龍馬は何を見据えてる

ウィッグを付けてイメージ若返る

若き日の母のイメージ恋女房

イメージの落差大きく倦怠期

イメージに気が付いたのは孫ひとり

カラオケは拍手もセツで盛り上がる

半襟を替えて母の香思ひ出し

後半は早足になる美術館

一切を水に流すと梯子酒

断捨離で我から欲を遠ざける

晴れた日は晴れのリズムで妻の朝

孫抱いて我も凡夫の中に居る

老けたでしよ亡友の笑顔は変わらない

のほほんとして虹が消えてゆく

勝 茂

義博

美恵子

和郎

登美子

政一

俣子

忠貞

広造

盛夫

文子

繁義

寿朗

利子

弘

夏子

妙子

洋一

武臣

ひとみ

敏夫

淳

遼子

いわゑ

太い指明日を決して疑わぬ

川柳藤井寺(大阪)

鴨谷瑠美子報

楓楽

起さないで億万長者夢の中

無口から妻の反乱起ります

わき起る喚呼に散った友がいた

事起こすたびに膝折る親不孝

記憶から削除できずにいる女

よみがえる記憶はみんな美しい

涼風に起き出して来る彼岸花

不寝番起床ラッパで任終る

三軒目までの記憶は確かです

ラストシーンが焼きついている脳裏

記憶には無いから何度でも誤る

源氏名記憶にない終電車

遠い遠い記憶の中で燃える恋

呑みすぎた記憶は店に置いてきた

一番の敵が私の中にいる

私もヒト科愛でる心は持ってます

グルメ旅終つてわたしの味がいい

初恋の記憶とぎれたちぎれ雲

遠い記憶母の乳房へ辿り着く

子が付けた私の点に下駄はかせ

嫌な癖いっぱい有るが私の娘

ブラジャーの中は本物ですわたし

悦子

ちづる

清之

婦美枝

光男

あかり

榮

武義

龍一

扶美代

紀雄

恵美子

ヨシ枝

昌子

まつお

シルク

フジ子

瑠美子

いさお

絹枝

喜代子

六

点

教え子あまた君のお役に立てたかな

わたくしが追ると逃げる男たち

罰ゲームですか私が転ぶのも

私を拒否する良心持ってます

岩美川柳会(鳥取)

石谷美恵子報

太陽が笑うと人も木も笑う

梅の木が我が家領土の見張り番

忘れぬ思い出海のログハウス

がじゅまるの力は岩を噛む凄さ

叩かれてじつと我慢をする木魚

仁王像に渦巻く木目生きている

いっしんに働く人の顔が好き

好き好きと本気にさせて金せびる

人間が好きで人間止められぬ

相撲好きテキスト読んで初日待つ

新聞に包んで届く母の愛

新聞に載った孫です宝です

古里へ会いにアンテナショップする

アンテナよ夕焼け空が美しい

アンテナに止まる雀に聞く噂

アンテナの機嫌で秘密もれてくる

全身にアンテナ張って看視する

寝ていても妻のアンテナ光ってる

みよ子

弥生

美代子

シマ子

清帆

幸安

圭一郎

一瑤

一粹

重忠

完司

蟹郎

忠良

和子

茶子

節子

たぬ

菖子

幸子

くにこ

公子

昭弘

老化防止にアンテナを高く張る
天を突く大樹をめざす雑木たち

長 柳 会(大阪) 坂上 淳司報

雅 女
美恵子

ずうずう弁を宝にしていた金バッジ
踏んばりを支えてくれた妻がいる
歯車がどこかで狂い堀の中

淳 司
よしお

一枚の葉書が結ぶ恋の糸
旅先で結んだ絆ほどけない

福 子
修

きっかけはツアーの席に赤い糸
縁結びはずれも楽し神仏

靖 博
辰 男

めでたさも赤飯ほどの値打ちなし
妻が切れてばんばん愚痴の機関銃

光 弘
克 三

ばんばんと二カ所で花火党首選
愛してるあなただの終身年金に

光 弘
正 博

ローカル線豊かな語彙と人情と
愛国の歯車となり命消え

ふ み
正 子

一行に熱い想いの結び文
結び目が解け始まった倦怠期

芳 野
武 男

赴任地の訛りに慣れた影法師
歯車が軋まぬように酒二合

和 子
篤

もしもしの応酬老いの長電話
結び目に母がにっこり座ってる

隆 彦
正 美

ああ無情乱戦の地で死の取材
古里を捨てた男の国訛り

久 美子
けい子

豊もくせい川柳会(大阪)藤井 則彦報

美酒の味いつたん知れば止められぬ
往年のスタイリストが杖頼り

庸 佑
肇

自慢ではないがと自慢してみせる
逆上り出来ずで景色今のまま

か ず お
玲 子

中天の月に恥なく生きてます
剽窃扱いされて翻案お蔵入り

一 央
徹

砂時計乱れる術を思案する
言論の自由と言うが暴露記事

玲 子
行兵衛

隠せなく心の乱れ水茎に
腹筋を試されている齒科の椅子

健 二
幹 治

夜の空を乱す花火も消えて秋
サンクラス心の乱れひた隠す

比 志
歌留多

残光でないぞ余生を煌めかせ
逢いたくて髪乱れても走りだす

螢 柳
紀 子

人生の案内板がみつからぬ
妙案を抱いてゆつたり膝を組む

夢
堅 坊

物忘れいったんネジを巻き戻す
十五夜にいったん電気消すロマン

満 子
巴 子

手拍子は揃わないけど黒田節
あの人もきつと見ている今日の月

久 子
則 彦

十年間休まず書いた日記帳
天の句に抜けて自慢をしなくなり

美 智 代
千 代

煮込まれてもひそとほのかに匂い立つ
煮込まれてもひそとほのかに匂い立つ

葉 子

噂にも耳そば立てる乱れ籠

美 籠

マイクでも差し向けたい程の自慢
回転数上げるとうつつが躁になる

見 清
菜々子

いったんは沸点にいた影二人
案ずれば案ずるほどに深い穴

求 芽
理 恵

コンバクトにハートの乱れ見透かされ
根気なら負けぬと母が自慢する

遠 野
千枝子

自慢話を酒のつまみにクラス会
大空まで続く棚田に彼岸花

武 臣
富 子

ご破算でいったん水に流します
蟬の声止んで五感の再稼働

幸 雀
隆

さりげない言葉の裏にある乱れ

幸 雀
隆

倉吉川柳会(鳥取) 竹信 照彦報

ふるさとにひと飛びしたい暇はある
定年まで暇を出されず今がある

和 子
けいこ

暇と金あって達者な老後です
暇だらけ九十歳の誕生日

重 忠
喜美子

ほしかった暇も今ではもてあまし
蚊やブトがお暇ですかとついてくる

智恵子
賀寿恵

独身の伯父の遺産の山分けた
与党殿よくぞ自滅を有難や

石花菜
次 男

ちよんぼして物怪の幸い夫留守
俄雨水やりやと免れた

龍 枝
風 露

褒め上手に乗った私は面映ゆい

日 出 子

凜とせぬ日本の態度面映ゆい

この年で恋は魔物だ面映ゆい

頼まれた仲人席に落着けぬ

つまみ食い見られてちよつと面映ゆい

初孫を抱く面映ゆい宮参り

がんこ爺口うるさくてせつちかちで

せつちかが二人もいると日が速い

せつちかの靴は歪んでよくちびる

せつちかですぐに駆け出す早とちり

せつちかの貴女の癖が孫に出る

せつちかに揚げた天ぶら粉っぱい

せつちかは自分勝手と間違われ

退職した一年暇が宝だった

川柳あまがさき(兵庫) 加川

ありがとうこの一言で円満に

君とブランコ今でも心揺れている

年輩の生きてまっせが声に張り

言いそびれ暫く本音のみこんだ

秋祭り豊穰に酔い酒に酔い

得意気に一輪車に乗る孫まぶし

お月様差してゆつくり飲みましよう

自覚してゆつくり歩むマイライフ

まあ座れ話は一杯飲んでから

伸直りゆつくり蜜柑むいてあげ

恭子

悠子

茶子

美代子

醉美蓉

由紀子

鬼一

萩江

貞子

玲子

文恵

祐子

照彦

靖鬼報

雪菜

あかり

龍

幸香

野薫

楓花

正和

泰子

寛十郎

美代子

ゆつくりと帰るだあれも待つてない

玄関を出たらオシドリ演じます

おげんきですか自分に問うている鏡

カタツムリゆつくり角を研いでいる

満月とゆつくり語る露天風呂

ゆつくりとできぬ家計簿火の車

賑やかにほたえてるのは淋しがり

学校へ通った道を医者通い

円満にいつてゐるらしい愚痴を聞く

焼跡にカンナが燃えていた記憶

封を切る夢をこぼさぬ様に切る

ゴールインタデ食う虫にめぐり会い

愛された記憶きらきらこの胸に

嬉しさを仏頂面でひた隠す

句読点までもわくわくする手紙

大山滝句座(鳥取)

新家

完司報

小肥りが長生きと聴きホツとする

前後左右しあわせそうな顔ばかり

高い波ザブン自分を見失う

自殺者よ母の港はなかりしか

港町蠅と干物とじじとばば

腰掛けた石に慰められている

曲った背笑うなお前守りした背

我れ先に走ったトイレ長い列

キヨミ

祐康

菜々子

靖鬼

勝巳

五月

かずお

見清

耕治

朋月

和子

里江

ひとみ

哲男

美龍

紀の治

玲子

くにこ

照彦

石花菜

美ツ千

蟹郎

由紀子

書きました延命治療無用だと

弟の髪型タラちゃんそっくり

宝くじ当たらぬ券も売っている

平成の入道雲は芸がない

やつとこさ宿題出来た句会行き

賑わいも別れも似合う港町

神戸港デートを重ね泣いた場所

マンガから大人になってゆく子供

新聞は先ず計報欄つぎ漫画

一コマの漫画になっている寝相

川柳ねやがわ(大阪)

籠島

恵子報

寝る外にすることはなし空財布

節電で過労死認定扇風機

たんたんと余生をしゃべる癌の友

糸口が欲しくて星を数えてる

知らぬ間に二十年たつボランティア

糸口に踏み絵一枚敷いておく

塾通い親の心が実る春

大胆と緻密さコラボして無敵

天命を待つ順番があるらしい

質問の仕方気になるリポーター

しゃべるにはまだまだ足りぬ酒の量

作戦上しゃべりを一人いれてある

散らかした夏を鎮めに虫すだく

風露

けいこ

雄大

重忠

恒子

鈴野

久子

仁美

すみゑ

完司

仁清

薫

亜成

郁夫

ルイ子

仁

高鷲

壽峰

博泉

美江

寿子

修

吾亦紅涼満喫の御岳山

仮設から抜ける糸口みつからず

風の日は風とお喋りして詩人

更生の糸口愛のある言葉

糸口ヘリリングが落ちただけのこと

エスコート大胆すぎて火照る顔

くれぐれも延命治療お断り

ふところがぬくい日酒とよう喋る

争いの糸口わざと捏ね回す

せせらぎで軽くお喋りする小川

熱心に愛訴えている眼

求愛のポーズカマキリ命がけ

忘却へ前頭葉が持つ焦り

いさぎよいところを見せる曼珠沙華

川柳塔まつえ吟社(島根) 相見 柳歩報

いたずらが出来る仲だよ俺おまえ

いたずらに医者には行かぬ戦中派

勲章としていたずらの傷残る

好きだからいたずらしたくなってくる

いたずらの中に子供の夢がある

ちっけな国に車が多すぎる

車椅子押させてもらう恩返し

エンドレステープが回る車椅子

思い出は石ころの道乳母車

さち子

かすみ

洋

朝子

賢子

麗

鈍甲

一風

秀雄

弘一

弘風

柳弘

祥昭

恵子

万札を拾ったあとの車事故

悔しいがうつかり乗った口車

車社会の端でせつせと歩いてる

車社会凶器に乗っている自覚

信号機青になっても右左

火の車お宅へ一台貸しましょうか

工夫して夫婦で飾るラストシーン

工夫する力があれば伸びてゆく

のろのろと動く私は陸のカバ

のろのろとカーナビなしで辿り着く

せっかちものろのろもそれぞれの道

ワテンボずれてのろのろ生きている

のろのろに見えてあなたの思慮深さ

今からも恋を拾いに行くつもり

蹊いた石をひとつずつ拾う

愚痴を拾った耳が大きくなったきた

少しずつ若さを拾うストレッチ

拾った石とても頑固な石だった

火中の栗拾った指が欠けてくる

戦場で命拾って白寿待つ

交番へ届けられてたラブレター

翠 洋 会(大阪) 佐々木満作報

七草にひとつ足したい吾亦紅

駅裏にくにの訛りで飲める店

孝流

ちえこ

知恵子

注湖

洋子

草庵

民子

柳歩

芳山

禮子

幸子

千里

左余

静江

淞丘

寿代

博子

久枝

たけし

長吉

美智子

大空に幸という字を書いて寝る

幸せが逃げないように封をする

幸せと思う気持が華である

詩を吟じインテリらしい千鳥足

頭ばかりでかいインテリよく転ぶ

インテリの顔をしている盲導犬

油絵のバラはしつこい程に燃え

ど行くねんいつ帰るねんしつこすぎ

捨て捨て捨てまた増えている半年後

説教もしつこ過ぎると逆効果

通学の児の声で知る新学期

鳩尾の積乱雲を持て余し

みちのくの海泳いだか秋刀魚喰う

一日が長いと思う智慧の無さ

憂さしばし忘れてひとり虫を聞く

病ではないが老化が忍び寄る

婦省子のピアノ横顔飽かず見る

赤とんぼすいっと飛んで秋つたえ

無い知恵を絞って見ても出るは汗

振りむいた時だけいてる福の神

マンネリの夫婦に起きる静電気

マカオの子ノーと言っても靴履く

船頭に誰がなつても泥の舟

大学生三人寄ればマンガ本

ぼろぼろの論吉持たせてくれた老母

日の出

昭

満作

照子

希久子

楓楽

志華子

蕉子

眞澄

知之

義

滋彦

公平

富子

捷也

千歩

弘子

善之

すみ子

集一

紀子

浩二

みつ子

恭昌

国難を横目に励む党首戦

猛暑去り虫の音たのし秋夜長

あかつき川柳会(大阪) 山本 柳昌報

瓦礫まだのこし二度目の秋になる

宝石も愛も手に入れ餓えている

上げ底へそつと弱点忍ばせる

大変な事さなりとこなす粋な人

染色体異状へいのち迷い出す

指輪より心の底にあるダイヤ

耳底にわだつみの歌抱えてる

反抗期ドア一枚を遠くする

宝石の似合わぬ妻を愛し抜く

尖閣の底に資源がある期待

開けごま遠い記憶のドアきしむ

執着は遠い樹海においてきた

バッグの底ブラックホールあるらしい

いじめつ児の親の話は出てこない

火星行きタクシー並ぶ京都駅

言い訳に遠い夜道のうとましい

俺よりもダイヤがいいと言う本音

いつからか遠い昔が酒のアテ

宇宙では地球は底かてっぺんか

節くれた指がわたしの宝石だ

桃花 夢

理恵

富子

敏子

秀夫

福和子

宏

山和子

賀世子

克己

忠昭

紀乃

和代

桃花

見清

たかこ

高鷺

壽峰

善純

昭

朝子

まだまだと子の光るのを待っている
振り仮名が欲しい四股名が増えている
底ついた愛に出て行く朝が来た
実らぬ田んぼ見つめ被災地二度の秋
どんな底に居ても大志を抱いている
千兆円を遠景にしてキリギリス
付き合いても距離を離せば紅になる
海底をさまよう家も人間も
幼な子のまるで宝石かの瞳
青虫に遠い昔を聞かせてる
大変と笑顔で応え孫の世話
党の顔ざらり並べてさあ誰に
靴底は知ってる直向きな努力
着陸でミスしない人募集中

哲夫

蕉男

たもつ

敏治

のぶ久

行兵衛

大気

花笑

生枝

朋恵

直子

祥昭

朝子

桜琴

清一

寛

富美子

年子

和香

洋子

令子

恵美子

岬川柳会(大阪) 八十田洞庵報

子の心知っている様で知らぬ老い

解散を裏であやつる古狸

年月は待たずに過ぎる日々

路地裏のゆらぐ小花が涼を呼ぶ

さよならを笑顔で言える日の為に

肩の荷が軽い余生の趣味楽し

盆ダンゴ里は良いもの母恋いし

年金で命つないでいる余生

ひまわりも暑さ堪えかね頭下げ

節電の夏兒らの散髪手始めに
盆休みあとも代休取らぬ母
夏の日の暑しもあつし火の車
四面楚歌遺憾に思うでは済まぬ
韓流の歴史ドラマの自画自賛
夏野菜余りの暑さにネを上げる
ほどほどをうまく使って生きる術
押しつけのモラルだよほどほどに

智子

治

澄恵

貞夫

和美

覚庵

茂平

洞庵

事務所便り

「川柳塔まつり」にご参加下さいました、同人誌友以外の皆様方には、当日の入選句掲載誌、十一月号を別途送付致します。

楽しみにお待ちしております。

尚、これを機会に塔誌ご購入のお申し込みを頂ければ嬉しく存じます。

「まつり」の会場でも販売しておりますが、事務所では○「路郎読本」送料込み三千円○「川柳しませんか」百円(送料別)○投句用「柳箋」三冊送料込み千円で、それぞれ販売しております。ご入用の節はお電話等でお申し込み下さい。

第二回 春の川柳塔まつり誌上大会募集

川柳塔社では、日頃句会などにお出掛けになれない方々を含め、結社を越えて広く川柳をお楽しみいただく機会として、第二回誌上大会を企画いたしました。参加要領は左記のとおりです。是非皆様のご参加をお待ち申し上げます。

川柳塔社

課題と選者（各題二句 共選）

課題吟

「学 ぶ」

佐藤美文（大宮川柳会）
新家完司（川柳塔社）

「絵」

西出楓楽（川柳塔社）
川上大輪（川柳塔社）

雑詠

森中恵美子（番傘本社）
小島蘭幸（川柳塔社）

投句要領

規定の用紙（コピー可）または、用紙の入手できない場合は便箋などご使用いただいても結構です。

投句料

一〇〇〇円（切手は不可）

投句締切

平成二十五年二月二十日（水）消印有効

送付先

〒543-0052

大阪市天王寺区大道一―四―一七―二〇―一

川柳塔社 誌上大会係宛

TEL/FAX（〇六）六七七九―三四九〇

賞及び発表

各題秀句に賞呈 発表は川柳塔誌五月号誌上
川柳塔誌を購読されていない方には発表誌呈

『全日本柳人写真名鑑』 発刊について

日川協では全日本の柳人を網羅した『全日本柳人写真名鑑』を社団法人設立以来、5年ごとに発刊、好評を博してきました。前回から5年目にあたり、さらに体裁・内容を一段と充実した平成25年版を刊行したいと存じます。皆様方には一人残らず、この名鑑に名を連ねられますよう、お勧めいたします。

資格

参加者は柳人であればどなたでも結構です。

内容

各人ごとに、①氏名（雅号）②生年月日③職業④所属柳社⑤住所⑥電話・FAX⑦メールアドレス⑧顔写真（近影）⑨自薦作品三句（所定用紙があります）を掲載

書籍発送の為、住所は必ずご記入の上、個人情報に支障のある方は、その旨お書き添えください。

体裁

A5判・本文アート紙300頁。美装本

刊行

平成25年3月予定（参加者に1冊送付）

参加費

4000円

締切

平成24年12月10日（月）当日消印有効

申込先

〒530-0041

大阪市北区天神橋2丁目北1―11―905

社団法人 全日本川柳協会

TEL（06）6352-2210

FAX（06）6352-2433

郵便振替口座 009701913575

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
岸 和 田 川 柳 会	17日(土) 13時30分締切 洒落・避ける・ひらひら ワイン	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0076 岸和田市野田町2丁目13-19 中岡香代
川 柳 塔 みちのく	17日(土) 17時締切 遠景・うかうか・風向き	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺光峯
川 柳 藤 井 寺	18日(日) 14時締切 兄・移植・席題は共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線藤井寺下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	18日(日) 14時締切 数・分ける・そろそろ	淡輪17区集会所 南海みさき公園駅・徒歩6分 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
豊 中 もくせい 川 柳 会	19日(月) 13時40分締切 まぜる・風景・強い・自由吟	豊中市中央公民館 4F 阪急曽根駅南東・徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
川 柳 さ ン だ	20日(火) 13時開場 北・トレード・笑う ふっくら・自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
川柳クラブ わたの花	23日(金) 9時開場 菊・蟹・匙・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0012 八尾市小阪合町1-4-8 西川義明
川 柳 塔 すみよし	24日(土) 14時15分締切 サイン・丸い・うっとり	住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂蕉子
和 歌 山 三 幸 会 川 柳	24日(土) 12時30分開場 途中・そわそわ・念	和歌山商工会議所 4階 第2会議室 〒640-8570 和歌山市南中間町20 ニュース和歌山編集部「和歌山三幸川柳会」
はびきの 市 民 会 川 柳	25日(日) 14時締切 新米・ペダル・風邪・同窓会	綾南の森 公民館 近鉄高鷲駅北東・徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川 柳 ふうもん 吟 社	25日(日) 13時開場 丸裸・エンドレス・手強い	開発ビル 2Fホール 鳥取市片原1-107 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
南 大 阪 川 柳 会	26日(月) 18時開場 色づく・さとり・組板・雑詠	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
松 露 川 柳 会	26日(月) 19時30分締切 母・痛い・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
京 都 塔 の 会	吟 行 11月26日(月) 11時 行先=醍醐寺 集合=地下鉄東西線「醍醐」駅 素・かけら・働く	京都ハートピア 地下鉄丸太町駅⑤号出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6779-3490) へご連絡ください。

11月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な	吟行句会 1日(木) バスにて送迎 辿る・蜜・手柄・囁目吟	大和高原ボスコヴィラ 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
富柳会	3日(土) 14時締切 踏む・もしも・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 TEL 0721-25-0603 池 森子
川柳 ねやがわ	3日(土) 14時締切 落葉・我慢・投資・忘れる 例外・ラッシュ	寝屋川市立総合センター 4階 第1研修室 寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
倉吉柳会	3日(土) 14時締切 白・苦しい・待て	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
城北柳会	吟行句会 5日(月) 12時締切 復興・DNA・煩わしい・囁目吟	不死王閣 阪急池田駅 10時20分集合 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
川柳塔 さかい	9日(金) 13時開場 さまざま・傾く・折句(リヤド)	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31 村上玄也
あかつき 川柳会	9日(金) 14時締切 熱い・朝・電線・時事吟	大阪保育運動センター(新谷町第1ビル 2階) 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口から3分・道路向い側 〒599-0232 阪南市箱作1586-14-102 森村美花
川柳大阪	吟行 10日(土) 14時締切 譲る・頭・秘密	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川柳塔 わかやま 吟社	10日(日) 14時10分締切 兼題=長・うっかり・大事 課題吟=半島	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼題 〒640-8453 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟 〒592-8349 堺市浜寺諏訪町東2-208-5 柴原道夫
川柳塔 打吹	10日(土) 13時締切 嘘・突然・吸う	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
川柳塔 まつえ	10日(土) 13時45分締切 首・錨・追う・サービス	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町366 錦織禮子
八尾市民 川柳会	11日(日) 13時30分締切 美人・底・近い・雑詠	八尾神社内 西郷会館3F 近鉄八尾駅西口徒歩5分 〒581-0831 八尾市山本町北5-9-3 土谷耀一
西宮北口 川柳会	12日(月) 14時締切 文化・覗く・つんつん・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩3分 プレラにしのみや 〒662-0062 西宮市木津山町3-15 亀岡哲子
川柳 あまがさき	13日(火) 14時締切 気配・機嫌・なんで・自由吟	尼崎女性センター トレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
ほたる 川柳 同好会	13日(火) 13時30分締切 文化・捨てる・みっちり	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール 蛍池駅駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎

柳界展望

★第59回八尾市民川柳大会は8月26日、八尾市文化会館で開催。同人の秀句次の通り。

香しきものよ産湯の天使たち 池 森子
★第62回富柳会川柳大会は9月15日、すばるホールにて開催。参加者109名。同人秀句次の通り。

爪割れて戦は少し延期する 高田美代子
地味でいい わたしは平泳ぎで終る

★吹田市民川柳大会は9月23日、メイシアターに於いて開催。同人の秀句。

傾いたまま生きてます 高齢者 山本希久子
神様のカルテはみだし まだやる気 山本希久子

夏休み親子川柳の秀吟賞として、富田美義さん、富田保子さんが入賞。

★平成23年度川柳塔みちのく大賞は岡本花匠さん（同人・弘前市）に決定。赦し合う刻が来ました 古酒を酌む

☆木本朱夏さん（副理事 長・和歌山市）は、川柳雑誌「風」86号に「ことばは誰のものか」を発表した。

☆藤井則彦氏（同人・豊中市）は川柳展望9月号会に於て「能の話」を40分間講演した。

◇中井アキさん（同人・富田林市）は句集『万華鏡』を上梓。B6判118頁、序文・池 森子。

▽新刊紹介△

◇木津川計著『ことばの身づくろい』上方芸能出版センター刊。定価一五〇〇円（税込）。「ことばの

化粧とことばの礫」など11章、352頁。

▽お詫びして訂正△

▼10月号P25上段19行目、水野黒免↓黒免。P47上段1行目、いうてみよ私のどことがもの足り↓いうてみよ私のどことがもの足りぬ。P92下段9行目、限界と言えぬ昭和のまだかまり↓まだかまり。

P126下段15行目、格好の↓格好の。20行目、格好いい↓格好いい。P127上段11行目、格好いい↓格好いい。14行目、格好は↓格好は。20行目、格好よく↓格好よく。

▽新誌友紹介△

寝屋川市 荒川 純甲 紹介者

富山ルイ子 江島谷勝弘 紹介者

斉藤 宏子 小沢 淳 紹介者

富永 恵子 鳥取市 紹介者

小沢 淳 両川 洋々 紹介者

新同人紹介

後藤 宏之
— 蘭幸・楓楽・未延子・紀の治推薦

今井 弘之
— 楓楽・求芽・宏子推薦

辻内 次根
— 蘭幸・楓楽・保州・朱夏推薦

堺市 大和 峯二 高槻市 三谷 勝浩
紹介者 鈴木いさお 紹介者 三谷待太郎

尾道市 日谷 寛 臨時常任理事会会9月25
紹介者 小島 蘭幸 日火 ①第18回川柳塔まつり及び同人総会最終確

伊万里市 畑山 学 認②チラシのキャッチフ
紹介者 吉富 節子 レーズ内容検討③定例確

鳥取市 谷口回春子 認事項④各部報告事項
紹介者 両川 洋々 次回10月23日火PM13時

鳥取市 山下 凱柳 30分
紹介者 両川 洋々

第54回 豊中市民川柳大会

と き 11月23日(祝) 正午会場
(阪急宝塚線曾根駅東100メートル)

ところ 豊中市立中央公民会館1Fホール

会 費 1500円(軽食・記念品・発表誌呈)

宿 題 各題2句 13時締切

「自 信」 長江 時子 選

「矛 盾」 赤松ますみ 選

「きっぱり」 田中 螢柳 選

「ファイト」 足立 淑子 選

「こぼれる」 板野 美子 選

「丸」 碓井 祥昭 選

「軸」 奥田みつ子 選

連絡先 〒560-0033

豊中市蛍池中町2222-3-11-411

TEL.06-6853-0470 田中 螢柳

主 催 豊中川柳会

第26回 堺市民芸術祭川柳大会

と き 11月24日(土) 13時開場

ところ 堺市民会館 4階 大集会場

南海高野線堺駅より南西へ徒歩10分

JR三国ヶ丘より南海バス一条通り下車

参加料 1000円(作品集呈)

宿 題 各題2句 出句締切 14時

「ぶれーく」 荻野 浩子 選

「わだかまり」 谷垣 郁郎 選

「拓 く」 長江 時子 選

「気まぐれ」 西内 朋月 選

「ふ た つ」 本多 洋子 選

「と て も」 三宅 保州 選

連絡先 堺川柳協会

〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3

河内 天笑 TEL.072-278-4706

主 催 堺文化団体連絡協議会

堺川柳協会

堺市堺文化振興財団

堺まつり 秋の誌上大会

課題と選者 各題2句 共選

「一 発」 日 野 愿 共選
谷 口 義

「泥」 三 島 湊 共選
山 本 希久子

「目」 三 宅 保 州 共選
岩 田 明 子

「旅」 小 島 幸 共選
板 野 美 子

投句料 1000円

締 切 11月26日(月)

投句用紙 専用句箋またはB5便箋4枚
(1枚につき1題2句ずつを2人の
選者に左右同じ句を記入)

投句先 〒593-8305

堺市西区堀上緑町2-16-3

川柳塔さかい 河内 天笑

TEL・FAX 072-278-4706

兵庫県川柳祭 in 三木

日 時 12月9日(日) 10時30分開場

場 所 三木市文化会館 小ホール

三木市福井1937番地 TEL.0794-83-3300

《事前投句》各題1句

締 切 9月10日(月) 当日消印有効

応募先 〒673-0713 三木市細川町豊地707

藤原 正明 方 TEL.0794-86-2248

兵庫県川柳祭三木市実行委員会 宛

課 題

「金 物」 濱邊稲佐嶽・みぎわはな・上野多恵子

「恵 む」 恩塚 治子・黒田 能子・毛利きりこ

「筆」 水田 蓉子・大橋あきえ・小紫喜八郎

応募料 1000円(郵便定額小為替を同封して下さい)

《当日投句》各題2句 12時締切

「新しい」 蛭原 夏牛 選

「青」 山口ヨシエ 選

「伝える」 矢沢 和女 選

「森」 平山 繁夫 選

「旅」 赤井 花城 選

出句料 1000円(発表誌呈)

主 催 兵庫県・兵庫県芸術文化協会・三木市

兵庫県川柳祭三木市実行委員会

兵庫県川柳協会

編集後記

★菊花展 白菊黄菊暮れ
残る 薫風

★十月三日毎日新聞夕刊によれば、今年、生誕一二〇年を迎えた芥川竜之介の出世作「鼻」の直筆完成原稿が、初公開されるといふ。編集者に渡される直前まで加筆、修正した箇所は一〇〇カ所にも及ぶ。最後まで推敲に推敲を重ねた原稿に、専門家は「文章に凝った芥川の一面が確認できる資料」と評価しているとか。文豪・芥川にして推敲に推敲を重ねたのだ。私たち川柳人も言葉を選び、磨き、作品を生み出す過程を楽しみたい。

★佐渡市の誌友・高野不二さんから麻生路郎著『これは面白い世界偉人の話』(大正十三年二月発行・定価六拾銭)が贈られてきた。所持の本の整理を考えています。父の思い出の本ですが有効に活用願えるならば……とのこと。高野さんの手紙によれば、「父は明治三十六年生まれで、大正十二年徴兵検査。近衛兵に入隊。大正十三年発行のこの本を買ったものと思います。中隊長の許可印があります」とのこと。なるほど、本の扉に「許可中隊長」の印が時代を語る。

★キリストを初め二十人の簡略な伝記を記載。関心があつてエリザベス一世女王の項目を読んでみた。私の知るところエリザベス一世の生母アン・ブーリンは悪女である。ところが路郎の筆はアンに極めて同情的で、路郎の

女流川柳大会

この夏、私の地元、佐賀県吉野ヶ里町で第一回卑弥呼の里女流川柳大会を開催した。その名の通り、女性しか参加できない大会だ。会場準備、片付けのみ男性の参加を許したのだが、喜んで手伝ってくれる男性陣に頭の下がる思いだった。

「女流」という言葉はもう古いという意見もあったが、私はこの文字にこだわりと誇りを持っている。女流川柳作家として、自分に出来る事をする。一歩ずつではあるが、これからもこの大会を続けていきたいと思つて、大会に集まつた女流作家。みんなキラキラと輝いていた。

(真島久美子)

ひとつこと

書かれた原本は何に拠つたものか、興味が湧く。

★10月8日、塔まつりが終わった。最終校正は19日。僅か10日で本誌を仕上げねばならない。例年のこととはいえプレッシャーは相当なものだ。

完司さん・黒兎さん・希久子さんはじめ大勢のお力をお借りして、無事お手元にお届けできました。感謝です。

(朱)

▼漢字は読めても書けないことがよくあります。年齢のせいにしてしまいましたが、あながちそれだけではないかも知れません。パソコンや携帯で文字を打つことが多くなつて、漢字を思い出す前にパソコンが文字を変換してくれまふ。

▼一字一字ペンで文章を書くことによつて漢字を思い出していたのではありません。手紙を書く時は辞書が手放せなくなつて、一頁ずつ紙をめくつて、本は読みたいものだなと思つています。

(能)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(1月号) 地名

市都
道府 道
姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「気持ち」(11月15日締切)

1月号発表

奥田みつ子 選 —— 共選 —— 森山 盛桜 選

B

A

地名

市都
府道
県
姓
雅
号

切らないで下さい

B

A

地名

市都
府道
県
姓
雅
号

きりとりせん

左右に同じ句を書いて下さい

個人用

年賀広告 原稿台紙

料金は払い込み用紙をご利用下さい。

1/9頁 1/6頁 1/3頁 2/3頁 1/2頁 1頁

(希望の大きさを○で囲んでください。)

原稿を貼布される方は、
この位置に貼り付けて下さい

電 話	住 所	姓・雅号
(	〒	
)		

川柳など掲載希望事項

送付先

〒543-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号

花野ビル201

川柳塔社

作品募集

川柳塔 (8句) 1月号発表 (11月15日締切)
 水煙抄 (8句)
 愛染帖 (3句)
 檸檬抄「気持ち」 (2句)
 一路集 (3句) 「発見」「張り切る」「ぎっしり」
 初歩教室 「正しい」 (3句)

小島蘭幸選
 西出楓選
 新家完司選
 森山盛桜共選
 奥田みつ子選
 海老池洋選
 大内朝子選
 岡本花匠選
 鈴木公弘担当

2月号
 檸檬抄「奇妙」
 一路集「うわべ」「練る」「アピール」
 初歩教室「戦」

本社11月句会

とき 11月7日(水) 13時開場・14時締切
 開場時間、締切時間を変更しています。ご注意ください。
 ところ アウィーナ大阪 4階 金剛
 天王寺区石ケ辻町19-12 電06-6772-1441
 おはなし 「出前をする川柳試食会」
 兼題 「句」
 席題 「うんざり」「器用」「古顔」「かぶる」
 会費 1000円
 投句料 5000円 (各題2句以内) (切手可)

北野哲男選
 居谷真理子選
 両川無限選
 安土恵選
 坊農柳弘選
 木本朱夏選
 小島蘭幸選

本社12月句会
 7日(金) 午後1時から
 兼題 「膝」「ピンチ」「充電」「秒読み」「尖る」

第31年度 夜市川柳募集

第6回「野菜」 政岡未延子選
 ハガキに3句 11月20日締切
 投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
 河内天笑方 川柳塔さかい

定価 八百円 (送料84円)
 半年分 五千円 (送料共)
 一年分 九千八百円 (同)
 (二〇二二年平成三十四年十一月一日発行)
 発行人 小島和幸
 編集人 木本朱夏
 印刷所 美研アート
 〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一七
 花野ビル201号室
 発行所 川柳塔社
 電話 〇六六七九一三四九〇番
 振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお問い合わせいたします。

杵つき製法の「すりごま」
オニザキの

すりごま




長い間親しまれてきた
オニザキの「すりごま」は、
名称を変更し、パッケージ
を一新いたしました。
オニザキのすりごまは、
元々すり鉢ですったゴマ
ではなく、杵と臼を使った
杵つき製法で出来た「すり
ごま」です。
今までと変わらぬ、風味
豊かな味わいをご堪能く
ださい。

株式会社 オニザキコーポレーション
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL  0120-30-5050

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専業メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023
TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484
東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021
(日本橋川村ビル4F)
TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159
<http://www.koki-envelope.com>